

岩屋口南遺跡

(IWAYAGUTI MINAMI ISEKI)

一般国道9号(安来道路)建設予定地内
埋蔵文化財発掘調査報告書VIII

96年3月

建設省松江国道工事事務所
島根県教育委員会

岩屋口南遺跡

(IWAYAGUTI MINAMI ISEKI)

一般国道9号(安来道路)建設予定地内
埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅷ

1996年3月

建設省松江国道工事事務所
島根県教育委員会

序

建設省松江国道工事事務所においては、安来地区の一般国道9号の交通混雑を緩和して、円滑な交通を確保し地域社会の発展に資するため、一般国道9号のバイパスとして安来道路の建設を進めています。

道路整備に際しては、埋蔵文化財の保護にも十分留意しつつ関係機関と協議しながら進めていますが、避けることのできない文化財については、道路事業者の負担によって必要な調査を実施し、記録保存を行っています。

当安来道路においても、道路予定地内にある文化財について島根県教育委員会と協議し、同委員会のご協力のもとに平成元年度から発掘、調査を行っています。

本報告書は、平成3年度及び平成4年度に実施した遺跡調査の結果をとりまとめたものです。本書が郷土の埋蔵文化財に関する貴重な資料として、学術ならびに教育のため広く活用されることを期待すると共に、道路事業が埋蔵文化財の保護にも十分留意しつつ進められていることへのご理解をいただきたいと思うものであります。最後に、今回の発掘調査及び本書の編集にあたり、ご指導ご協力いただいた島根県教育委員会ならびに関係各位に対し深甚なる謝意を表すものであります。

平成8年3月

建設省中国地方建設局松江国道工事事務所

所長 水上幹之

序

島根県教育委員会では、建設省中国地方建設局から委託を受けて、一般国道9号（安来道路）建設予定地内の遺跡の発掘調査を行っております。安来市佐久保町地内の調査は、平成元年度から平成5年度にかけて実施したところです。本書は、この内、平成3年度から4年度にかけて発掘調査を行った岩屋口南遺跡の調査の成果をまとめたものです。

安来市佐久保町付近は伯太川下流の東岸に位置し、中海に近いという立地を活かし、古くから文化が育まれており、古代には多くの遺跡が営まれていた事が明らかになっています。岩屋口南遺跡では弥生時代後期、古墳時代中期、古墳時代後期の集落跡や古墳時代後期の横穴墓が発見されました。古墳時代後期の集落跡や横穴墓からは鉄滓が見つかっており、この地域で製鉄に関連する生業が営まれていたことがわかつてきました。又、横穴墓の一つからは赤貝や、牛の骨が供えられた状態で検出されており、当時の葬送儀礼の一端を知ることができました。将来、こうした新たに見つかった歴史的事実が安来市や島根県の歴史を解明する契機となり、また広く一般の方々の埋蔵文化財に対する理解と関心を高める上で役立てば幸いです。

調査および本書の刊行にあたり、調査にご協力をいただきました地域住民の皆様や建設省松江国道工事事務所をはじめ関係各位に厚くお礼申し上げます。

平成8年3月

島根県教育委員会

教育長 清原茂治

例　　言

1. 本書は建設省中国地方建設局の委託を受けて、島根県教育委員会が平成3年度から4年度にかけて実施した一般国道9号安来道路建設予定地内埋蔵文化財（岩屋口南遺跡）発掘調査報告書である。

2. 発掘地は次の通りである。

安来市佐久保町字カワラケ免517外

3. 調査組織は次の通りである。

〔平成3年度〕(1991)

事務局　目次理雄（文化課課長）、藤原義光（同課長補佐）、勝部昭（同課長補佐）、高橋研（同文化係長）伊藤宏（同文化係主事）、加田惠康（島根県教育文化財団嘱託）

調査員　卜部吉博（文化課埋蔵文化財第2係長）、宮本正保（同主事）、石原順（同教諭兼文化財保護主事）、山尾一郎（同教諭兼主事）、佐々木聰（同教諭兼主事）、江川幸子（調査補助員）

〔平成4年度〕(1992)

事務局　目次理雄（文化課課長）、山根成二（同課長補佐）、高橋研（同主幹〈文化係長〉）、伊藤宏（同文化係主事）

勝部昭（埋蔵文化財調査センター長）、久家儀夫（同課長補佐）、工藤直樹（同企画調整係主事）、田辺利夫（島根県教育文化財団嘱託）

調査員　卜部吉博（文化課主幹〈調査第2係長〉）、今岡一三（同主事）、斎藤勉（同教諭兼文化財保護主事）、土谷徹（同教諭兼主事）、花井浩（同講師兼主事）、金山尚志（安来市教育委員会主事補）

〔平成6年度〕(1994)

事務局　広沢卓嗣（文化課課長）、野村純一（同課長補佐）、中島哲（同主幹〈文化係長〉）、丸宏治（同主事）、山崎浩司（同主事）

勝部昭（埋蔵文化財調査センター長）、佐伯善治（同課長補佐）、工藤直樹（同主事）

調査員　卜部吉博（文化課主幹〈調査第2係長〉）、丹羽野裕（同文化財保護主事）、椿真治（同主事）、池瀬俊一（同主事）、深田浩（同主事）、岩橋孝典（同主事）、寺尾令（同教諭兼文化財保護主事）、斎藤勉（同教諭兼文化財保護主事）、片山寛志（同教諭兼文化財保護主事）、金山尚志（安来市教育委員会主事）

〔平成7年度〕(1995)

事務局　勝部昭（文化財課課長）、森山洋光（同課長補佐）、西山彰（同文化財係長）、森脇幸（同主任主事）

宍道正年（埋蔵文化財調査センター長）、佐伯善治（同課長補佐）、濱谷昌宏（同主事）、原博明（中国建設弘済会島根支部）

遺物整理 野中洋子、釘宮和子、佐々木孝子、加藤佳子、田中路子、増田弘子、大島律江、佐伯明子、野坂栄子、牛尾ヨリ子、淀江正子、家島千歳、柏谷恵以子

4. 調査指導者

山本 清（島根県文化財保護審議会会長）、池田満雄（同委員）、田中義昭（同委員）、三浦 清（同委員）渡辺貞幸（島根大学法文学部教授）、井上貴央（鳥取大学医学部教授）、穴澤義功（たたら研究会員）

5. 本書で使用した遺構略号は次の通りである。

S I……堅穴住居跡 S B……掘立柱建物跡（加工段） S X……土壙墓・不明遺構
S D……溝状遺構 S K……土坑 S S……道路状遺構

6. 本書で使用した方位は国土調査法による第III座標系の軸方位である。

7. 本書の挿図では、縮尺を遺構1／80、遺物では須恵器1／3、弥生土器・土師器1／4、鉄製品・玉類1／2を基本にして載せたが、編集の都合でこれに依らないものもある。
8. 遺物の実測は、調査員が担当したが、一部鉄刀の実測について三宅博士氏（安来市教育委員会）の手をわざらわせた。
9. 本書の調査に関する執筆は、IV区を今岡が、III区2号・3号横穴墓を金山が、そのほかを卜部が行った。
10. 第5章自然科学的分析では、横穴出土の人骨について井上貴央、子持ち勾玉の石材について三浦清両氏から玉稿を賜った。
11. 本書の編集は金山の協力を得て卜部が行った。
12. 所載遺跡の出土遺物および実測図、写真は島根県埋蔵文化財調査センターで保管している。
13. 鉄滓の分析等は、後日改めて掲載する予定である。

目 次

第1章 調査にいたる経過	1
第2章 遺跡の位置と環境	2
第3章 調査の経過と概要	7
第4章 遺構と遺物	10
1 Ⅰ区の調査	10
2 Ⅱ区の調査	51
3 Ⅲ区の調査	58
4 IV区の調査	135
第5章 自然科学的分析	139
第6章 ま と め	146

挿 図 目 次

第 1 図	岩屋口南遺跡の位置	2
第 2 図	岩屋口南遺跡周辺の遺跡	3
第 3 図	調査区の位置	8
第 4 図	I 区遺構配置図	10
第 5 図	I 区 S I 01～S I 03実測図	11
第 6 図	I 区 S I 01南北ベルトセクション図	12
第 7 図	I 区 S I 01出土遺物実測図 1 (須恵器)	14
第 8 図	I 区 S I 01出土遺物実測図 2 (土師器)	15
第 9 図	I 区 S I 01出土遺物実測図 3 (土師器)	16
第 10 図	I 区 S I 02出土遺物実測図	17
第 11 図	I 区 S I 03出土遺物実測図	18
第 12 図	I 区 S I 04実測図	19
第 13 図	I 区 S I 04出土遺物実測図	20
第 14 図	I 区 S I 05実測図	20
第 15 図	I 区 S I 05出土遺物実測図	20
第 16 図	I 区 S I 06出土遺物実測図	21
第 17 図	I 区 S I 07実測図	21
第 18 図	I 区 S I 07出土遺物実測図	22
第 19 図	I 区 S I 08・09・10実測図	22
第 20 図	I 区 S I 08出土遺物実測図	23
第 21 図	I 区 S I 12実測図	23
第 22 図	I 区 S I 12出土遺物実測図	23
第 23 図	I 区 S B01実測図	24
第 24 図	I 区 S B01出土遺物実測図 1 (土器)	25
第 25 図	I 区 S B01出土遺物実測図 2 (石製品)	25
第 26 図	I 区 S B04実測図	26
第 27 図	I 区 S B04出土遺物実測図	27
第 28 図	I 区 S B05実測図	28
第 29 図	I 区 S B05出土遺物実測図	29
第 30 図	I 区 S B06実測図	30
第 31 図	I 区 S B06出土遺物実測図	31
第 32 図	I 区 S B08・S I 06実測図	31
第 33 図	I 区 S B08出土遺物実測図	32
第 34 図	I 区 S B12実測図	32
第 35 図	I 区 S B13・S B14実測図	33～34

第36図	I区S B15実測図	35
第37図	I区S B16実測図	36
第38図	I区S B16出土遺物実測図	36
第39図	I区S B17実測図	37
第40図	I区S B18実測図	38
第41図	I区S K01実測図	38
第42図	I区1号横穴墓実測図	39
第43図	I区1号横穴墓玄門部赤貝、牛骨、土器出土状況図	40
第44図	I区1号横穴墓出土遺物実測図1（土器）	41
第45図	I区1号横穴墓出土遺物実測図2（鉄刀）	41
第46図	I区L2区土器出土状況図	43
第47図	I区包含層出土遺物実測図1	44
第48図	I区包含層出土遺物実測図2	47
第49図	I区出土玉類実測図	49
第50図	II区遺構配置図	50
第51図	II区S I01実測図	50
第52図	II区S B01実測図	51
第53図	II区S B02実測図	52
第54図	II区S B03実測図	53
第55図	II区S B04実測図	54
第56図	II区S B04P-33出土鉄器実測図	55
第57図	II区S B05実測図	55
第58図	II区出土遺物実測図	56
第59図	III区S I01実測図	57
第60図	III区遺構配置図	58
第61図	III区S I01出土遺物実測図	59
第62図	III区S I02・03・S B01実測図	60
第63図	III区S I02・03・S B01出土遺物実測図	61
第64図	III区S I04実測図	62
第65図	III区S I04出土遺物実測図	62
第66図	III区S I05・06・07実測図	63
第67図	III区S I06出土遺物実測図	63
第68図	III区S I08・09・S X01実測図	64
第69図	III区S I08・09出土遺物実測図	64
第70図	III区S B02・03・04実測図	65～66
第71図	III区S B02・03出土遺物実測図	65～66
第72図	III区S B05実測図	68

第73図	III区S B06・07実測図	69
第74図	III区S B08・09実測図	71
第75図	III区S B10実測図	72
第76図	III区S B10出土遺物実測図	72
第77図	III区S B11・15実測図	73
第78図	III区S B12実測図	74
第79図	III区S B13・14実測図	75
第80図	III区S B11・12・13・14・15実測図及び鍛造剥片検出状況	76
第81図	III区S B11～15出土遺物実測図	77
第82図	III区S B11・15出土遺物実測図	77
第83図	III区S B16・17実測図	78
第84図	III区S B18実測図	78
第85図	III区S K01実測図	79
第86図	III区S K02実測図	79
第87図	III区S K03・S X01実測図	79
第88図	III区S S01出土遺物実測図	80
第89図	III区第3調査区西斜面土器だまり実測図	80
第90図	III区第3調査区西斜面土器だまり出土土器実測図	80
第91図	III区S S01実測図	81
第92図	III区1号横穴墓実測図	83
第93図	III区1号横穴墓関連土層断面図	84
第94図	III区1号横穴墓遺物出土状況図	85
第95図	III区1号横穴墓出土遺物実測図1	86
第96図	III区1号横穴墓出土遺物実測図2	87
第97図	III区1号横穴墓前庭部前方付近出土遺物実測図	88
第98図	III区1号横穴墓出土金属製品実測図	88
第99図	III区1号横穴墓前庭部出土太刀実測図1	91～92
第100図	III区1号横穴墓前庭部出土太刀実測図2	93～94
第101図	III区2号横穴墓実測図	95
第102図	III区2号横穴墓遺物出土状況図	96
第103図	III区2号横穴墓出土遺物実測図1	98
第104図	III区2号横穴墓出土遺物実測図2	99
第105図	III区2号横穴墓出土遺物実測図3	101
第106図	III区3号横穴墓実測図	105
第107図	III区3号横穴墓遺物出土状況図	106
第108図	III区3号横穴墓出土遺物実測図1	107
第109図	III区3号横穴墓出土遺物実測図2	110

第110図	III区 3号横穴墓出土遺物実測図3	111
第111図	III区 3号横穴墓出土直刀実測図	113~114
第112図	III区 2号、3号横穴墓須恵器出土状況相關図	116
第113図	III区 2号、3号横穴墓出土須恵器実測図	117
第114図	III区 4号横穴墓実測図	119
第115図	III区 4号横穴墓出土須恵器実測図	120
第116図	III区 4号横穴墓玄室出土鉄製品実測図	121
第117図	III区 5号横穴墓実測図	121
第118図	III区 6号横穴墓実測図	122
第119図	III区 6号横穴墓玄室出土須恵器実測図	122
第120図	III区第1調査区東斜面上部出土遺物実測図	123
第121図	III区第1調査区東斜面下部出土遺物実測図1	125
第122図	III区第1調査区東斜面下部出土遺物実測図2	126
第123図	III区第1調査区南斜面出土遺物実測図	129
第124図	III区第1調査区北斜面出土遺物実測図	130
第125図	III区第2調査区出土玉髓製剥片実測図	130
第126図	III区第2調査区出土遺物実測図	130
第127図	III区第3調査区西斜面出土鉄矛実測図	131
第128図	III区第3調査区東斜面出土遺物実測図	131
第129図	IV区土層断面図	132
第130図	IV区出土遺物実測図	133
第131図	IV区出土木製品実測図	135
図 1	III区 2号横穴	137
図 2	III区 3号横穴	138
図 3	III区 1号横穴	139

図版目次

- 図版1 ① I区調査前全景（西から）② I区第2調査区調査前近景③ I区第1調査区完掘状況（北から）
- 図版2 ① I区S I01、02、03全景（北東から）② I区S I01近景（北東から）③ I区第1調査区土層
堆積状況（南から）
- 図版3 ① I区S I01遺物出土状況（上層）② I区S I01遺物出土状況（下層）③ I区S I01セクション
- 図版4 ① I区S I01全景（南から）② I区S I02全景（南から）③ I区S I02検出状況（北から）
- 図版5 ① I区S I02遺物出土状況② I区S I02遺物出土状況③ S I02遺物出土状況
- 図版6 ① I区S I03全景（北から）②同全景（南から）③同セクション
- 図版7 ① I区S I03遺物出土状況②同③同壁体溝内遺物出土状況
- 図版8 ① I区S I04全景（東から）②同セクション③同主柱穴土層断面
- 図版9 ① I区S I05全景（東から）②同セクション③ I区S I06全景
- 図版10 ① I区S I07全景（南から）②同掘り下げ状況③ I区S I07~11全景
- 図版11 ① I区S I12全景（南東から）②同掘り下げ状況（南から）③同セクション
- 図版12 ① I区S B01全景（北東から）② I区S B01セクション③ I区S B04遺物出土状況
- 図版13 ① I区第2調査区西側全景（東から）②同（南東から）③ I区S B04全景（南から）
- 図版14 ① I区S B04セクション②同遺物出土状況③同全景
- 図版15 ① I区S B04全景② I区S B05全景（南から、右はS B17）③同近景（同）
- 図版16 ① I区S B05セクション② I区S B05セクション③ I区S B05近景（北から）
- 図版17 ① I区S B06全景②同掘り下げ状況（北から）③同（南から）
- 図版18 ① I区第2調査区東側全景（手前からS B08、13、14）② I区S B08セクション（南側）③同
セクション（北側）
- 図版19 ① I区S B08遺物出土状況②同遺物出土状況③同遺物出土状況
- 図版20 ① I区S B08掘り下げ状況②同全景（南東から）③ I区S B12全景（北から）
- 図版21 ① I区S B12セクション②同全景（東から）③同全景（西から）
- 図版22 ① I区S B15全景（南から）② I区S B16全景（北西から）③同遺物出土状況
- 図版23 ① I区S B17全景（北から）② I区S B17全景（北西から）③ I区S B17掘り下げ状況
- 図版24 ① I区1号横穴墓全景（南東から）②同近景（同）③同前庭部セクション
- 図版25 ① I区1号横穴墓前部状況（東から）②同（北から）③ I区1号横穴墓羨道部遺物出土状況
- 図版26 ① I区1号横穴墓玄室セクション②同羨道部全景③同玄門部牛骨、赤貝検出状況
- 図版27 ① I区1号横穴墓玄門部赤貝検出状況②同玄室完掘状況③同玄室完掘状況
- 図版28 ① I区1号横穴墓玄室側壁②同玄室天井部③同玄室天井部
- 図版29 ① II区調査前全景（南東から）② II区調査後全景（南から）③ II区上段セクション（西から）
- 図版30 ① II区上段セクション（東から）② II区S I01全景③同東西セクション（南から）
- 図版31 ① II区上段柱穴検出状況（東から）②同（西から）③ II区S B01全景（北東から）
- 図版32 ① II区S B01全景（北西から）②同セクション（東から）③同遺物検出状況

- 図版33①II区S B01遺物検出状況②II区上段建物検出状況（西から）③同（東から）
- 図版34①II区S B02全景（北から）②II区S B03全景（北から）③III区S B01～04全景（西から）
- 図版35①II区S B04全景（北から）②同ピット内鉄鎌検出状況③同焼土面検出状況
- 図版36①II区S B05全景（北西から）②同遺構検出状況③同遺物検出状況
- 図版37①III区S I 01全景（北東から）②同セクション（南から）③同遺物検出状況
- 図版38①III区S I 01近景（北東から）②III区S I 02、03、S B01全景③同セクション
- 図版39①III区S I 02、03遺物出土状況（東から）②同遺物出土状況（南東から）③III区S I 04全景（南西から）
- 図版40①III区S I 04壁体溝セクション②同セクション③III区S I 05、06、07全景（西から）
- 図版41①III区S I 05、06、07全景（南から）②III区S I 06全景（東から）③III区S 05,07全景（南から）
- 図版42①III区S I 08,09遠景（東から）②III区S I 08,09全景（東から）③III区S B02全景（東から）
- 図版43①III区S B02セクション②III区S B03,04全景（北から）③III区S B05,06,07全景（南西から）
- 図版44①III区S B05,06,07全景（南東から）②III区S B05セクション③III区S B06,07全景
- 図版45①III区S B08,09全景（南東から）②III区S B09内土坑セクション③III区S B09,10全景（東から）
- 図版46①III区S B10全景（北から）②III区S B11,12全景（南西から）③III区S B12全景（西から）
- 図版47①III区S B11,13,14,15全景（南から）②III区S B13,14セクション③III区S B13,14鍛造剥片サブリング状況
- 図版48①III区S B14ピット26セクション②III区S B13ピットセクション③III区S B16,17全景（北東から）
- 図版49①III区S S01全景（南から）②同全景（北から）③同セクション
- 図版50①III区S X01全景②III区S K01全景③III区S K02全景
- 図版51①III区S K03全景②同遺物出土状況③III区第1調査区東斜面遺物出土状況
- 図版52①III区第3調査区東斜面土器だまり②III区第3調査区西斜面土器だまり③III区第3調査区東斜面調査風景
- 図版53①III区1号横穴墓全景（西から）②同前庭部調査状況（南西から）③同前庭部調査状況（南東から）
- 図版54①III区1号横穴墓前庭部セクション（南西から）②同前庭部セクション（南から）③同前庭部遺物出土状況
- 図版55①III区1号横穴墓前庭部遺物出土状況②同前庭部鉄刀出土状況③同前庭部鉄刀出土状況（遠景）
- 図版56①III区1号横穴墓閉塞石検出状況②同羨道部セクション③同羨道部完掘状況
- 図版57①III区1号横穴墓前庭部小横穴セクション②同玄室遺物出土状況③同玄室遺物出土状況
- 図版58①III区1号横穴墓玄室左側天井部②同玄室側壁③同玄室側壁
- 図版59①III区2号、3号横穴墓遠景（北西から）②III区2号横穴墓全景③同前庭部須恵器検出状況（西から）
- 図版60①III区2号横穴墓前庭部須恵器検出状況（西から）②同前庭部東西セクション③同前庭部南北セクション

図版61①Ⅲ区 2号横穴墓前庭部須恵器検出状況（北から）②同前庭部須恵器検出状況（東から）③同

閉塞状況

図版62①Ⅲ区 2号横穴墓玄室遺物出土状況②同玄室遺物出土状況③同玄室遺物出土状況

図版63①Ⅲ区 2号横穴墓玄室遺物出土状況②同玄室遺物出土状況③同玄室遺物出土状況

図版64①Ⅲ区 2号横穴墓玄室遺物出土状況②同玄室遺物出土状況③同玄室遺物出土状況

図版65①Ⅲ区 2号横穴墓玄室遺物出土状況②同玄室遺物出土状況③

図版66①Ⅲ区 2号横穴墓玄室天井部②同玄室側壁③同玄室側壁

図版67①Ⅲ区 3号横穴墓全景②同前庭部遺物出土状況（北西から）③同前庭部遺物出土状況（北東から）

図版68①Ⅲ区 3号横穴墓前庭部セクション（西から）②同前庭部遺物出土状況③同閉塞状況全景

図版69①Ⅲ区 3号横穴墓閉塞部遺物出土状況②同閉塞部遺物出土状況③同玄室内遺物出土状況

図版70①Ⅲ区 3号横穴墓玄室遺物出土状況②同玄室遺物出土状況③同玄室遺物出土状況

図版71①Ⅲ区 3号横穴墓玄室遺物出土状況②同玄室遺物出土状況③同玄室奥壁

図版72①Ⅲ区 4号横穴墓遠景②同全景③同墓道セクション

図版73①Ⅲ区 4号横穴墓玄室全景②同玄室遺物出土状況③同玄室遺物出土状況

図版74①Ⅲ区 5号横穴墓遠景②同全景③Ⅲ区 6号横穴墓全景

図版75①Ⅲ区 6号横穴墓墓道セクション②同玄室全景③同玄室遺物出土状況

図版76①Ⅳ区 全景②同土層堆積状況③同舟田出土状況

図版77 I区 S I 0 1 出土遺物（須恵器）

図版78 I区 S I 0 1 出土遺物（須恵器、土師器）

図版79 I区 S I 0 1 出土遺物（土師器）

図版80 I区 S I 0 1 出土遺物（土師器）

図版81 I区 S I 0 1 出土遺物（土師器）

図版82 I区 S I 0 1、0 4 出土遺物

図版83 I区 S I 0 5、0 6、0 7、0 8、1 2、S B 0 1 出土遺物

図版84 I区 S B 0 1、0 4、0 5、0 6、0 8、1 6 出土遺物

図版85 I区 1号横穴墓出土遺物（須恵器、土師器）

図版86 I区 1号横穴墓出土遺物（鉄刀）、I区包含層出土遺物

図版87 I区 包含層出土遺物（上層、下層）

図版88 I区 包含層出土遺物（下層）

図版89 I区 包含層出土遺物、II区 S B 0 4 出土遺物

図版90 II区 S B 0 1、0 2、0 5 出土遺物、II区上層出土遺物

図版91 III区 S I 0 1、0 2、0 3、S B 0 1 出土遺物

図版92 III区 S I 0 2、0 3、0 4、0 6、0 8、0 9、S B 0 1、0 2、0 3、1 0 出土遺物

図版93 III区 S B 1 1、1 2、1 3、1 4、1 5 出土遺物、第3調査区西斜面土器だまり出土遺物

図版94 III区 1号横穴墓出土遺物（須恵器）

図版95 III区 1号横穴墓出土遺物（須恵器）

- 図版96Ⅲ区 1号横穴墓出土遺物（須恵器、鉄器）
- 図版97Ⅲ区 2号横穴墓出土遺物（須恵器）
- 図版98Ⅲ区 2号横穴墓出土遺物（須恵器）
- 図版99Ⅲ区 2号横穴墓出土遺物（須恵器）
- 図版100Ⅲ区 2号横穴墓出土遺物（須恵器、耳環、刀子、玉類）
- 図版101Ⅲ区 3号横穴墓出土遺物（須恵器）
- 図版102Ⅲ区 3号横穴墓出土遺物（須恵器）
- 図版103Ⅲ区 3号横穴墓出土遺物（須恵器）
- 図版104Ⅲ区 3号横穴墓出土遺物（須恵器、刀子、耳環、刀装具、玉、直刀）
- 図版105Ⅲ区 2号、3号横穴墓出土遺物（須恵器）
- 図版106Ⅲ区 2号横穴墓出土遺物（須恵器）
- 図版107Ⅲ区 3号横穴墓出土遺物（須恵器）
- 図版108Ⅲ区 2号、3号横穴墓出土遺物（須恵器）
- 図版109Ⅲ区 4号横穴墓出土遺物（須恵器）
- 図版110Ⅲ区 4号、6号横穴墓出土遺物（鉄製品、須恵器）第1調査区東斜面上部出土遺物
- 図版111Ⅲ区 第1調査区東斜面上部、下部出土遺物
- 図版112Ⅲ区 第1調査区東斜面か部出土遺物
- 図版113Ⅲ区 第1調査区南斜面出土遺物
- 図版114Ⅲ区 第1調査区南斜面、北斜面、第2調査区出土遺物
- 図版115Ⅲ区 第3調査区西斜面、東斜面、IV区出土遺物

第1章 調査に至る経過緯

昭和47年5月26日付けで、建設省松江国道工事事務所から島根県教育委員会に「国道9号バイパス」建設の基本設計資料として、島根県境の安来市吉佐町から松江市乃白町までの30.3kmにおける埋蔵文化財の有無について照会があった。

そこで、県教育委員会では、地元教育委員会の協力を得て昭和47年、48年に遺跡の分布調査を実施した。これらの調査結果をふまえ建設省からルート案が提示され、昭和48年7月には松江市東地区の予定ルートに関する遺跡の取り扱いについて協議があった。昭和48年7月には安来地区的清水～月坂間のルート案について協議があった。つづいて、昭和50年1月22日付で県教育委員会あて松江東地区と安来地区的うち清水～月坂間の一部について発掘調査の依頼があった。これを受け、昭和50年7月には建設省と契約を取り交わし、昭和51年度、松江市竹矢町才ノ峠古墳群、同矢田町平所遺跡、安来市早田町大坪古墳群の発掘調査を、昭和51年度には、松江市平所遺跡の関連再調査、東出雲町出雲郷夫敷遺跡の試掘調査を実施した。平所遺跡では、埴輪窯跡から馬・鹿・家・人物などの形象埴輪が出土し、昭和52年6月には国の重要文化財に指定された。

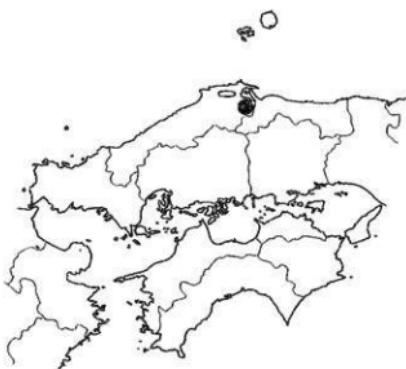
昭和55年度、56年度には、昭和57年に開催が決定していた「くにびき」国体の主要幹線道路となる「松江東バイパス」（以前は「米松バイパス」と呼ばれていた）東出雲町出雲郷から松江市古志原町に至る5.4km間の7遺跡（東出雲町の春日遺跡、夫敷遺跡、松江市の布田遺跡、中竹矢遺跡、才ノ峠遺跡、勝負遺跡、石台遺跡）のうち2車線分を緊急に調査した。

その後、「松江バイパス」は高規格道路に計画変更され、「松江道路」となり、昭和60年に建設省から前回調査した7遺跡の残り4車線分の依頼があった。調査は昭和61年度から平成3年度まで順次行った。

昭和61年度には安来市島田町から同赤江町に至る延長6.9kmが「安来バイパス」として事業化されたが、昭和63年度には高規格道路に計画変更され、「松江道路」につなぐ東出雲町出雲郷～安来市吉佐町間の18.7kmの「安来道路」として実施されることになった。この計画変更で予定ルートにも変更が生じたため、昭和62年度・63年度に再度分布調査を実施した。

発掘調査は、まず、安来市赤江町から島田町に至る6.9km（インター部を含む）において、平成元年度から同4年度まで7遺跡（安来市宮内町宮内遺跡、佐久保町大原遺跡、同曰コクリ遺跡、同岩屋口遺跡、黒井田町越し峠遺跡、同才ノ神遺跡、島田町島田南遺跡）で実施し、平成4年度からは安来市荒島町～東出雲町出雲郷を「安来道路西地区」として、さらに、平成5年度からは安来市吉佐町～島田町を「安来道路東地区」として実施中である。

第2章 遺跡の位置と環境



第1図 岩屋口南遺跡の位置

岩屋口南遺跡は、島根県安来市佐久保町に所在する。安来市は島根県の東端部にあり、北は中海に面し、南は中国山地から続く標高300m以下の山々がいくつもの低い尾根筋となって中海に迫っている。したがって、他地域に比べ平野部の割合は概して小さいが、それでも市内中央部には飯梨川、吉田川、伯太川の三河川によって形成された

県下有数の「穀倉地帯」安来平野が広がっている。今回の調査

対象地は、市内中央部安来平野の東縁に位置し、伯太川の東岸の丘陵地帯に立地している。ここでは、安来市内、とりわけ遺跡の存在する同市佐久保地区周辺の遺跡を概観し、本遺跡の地理的、歴史的環境の一端を整理することとした。

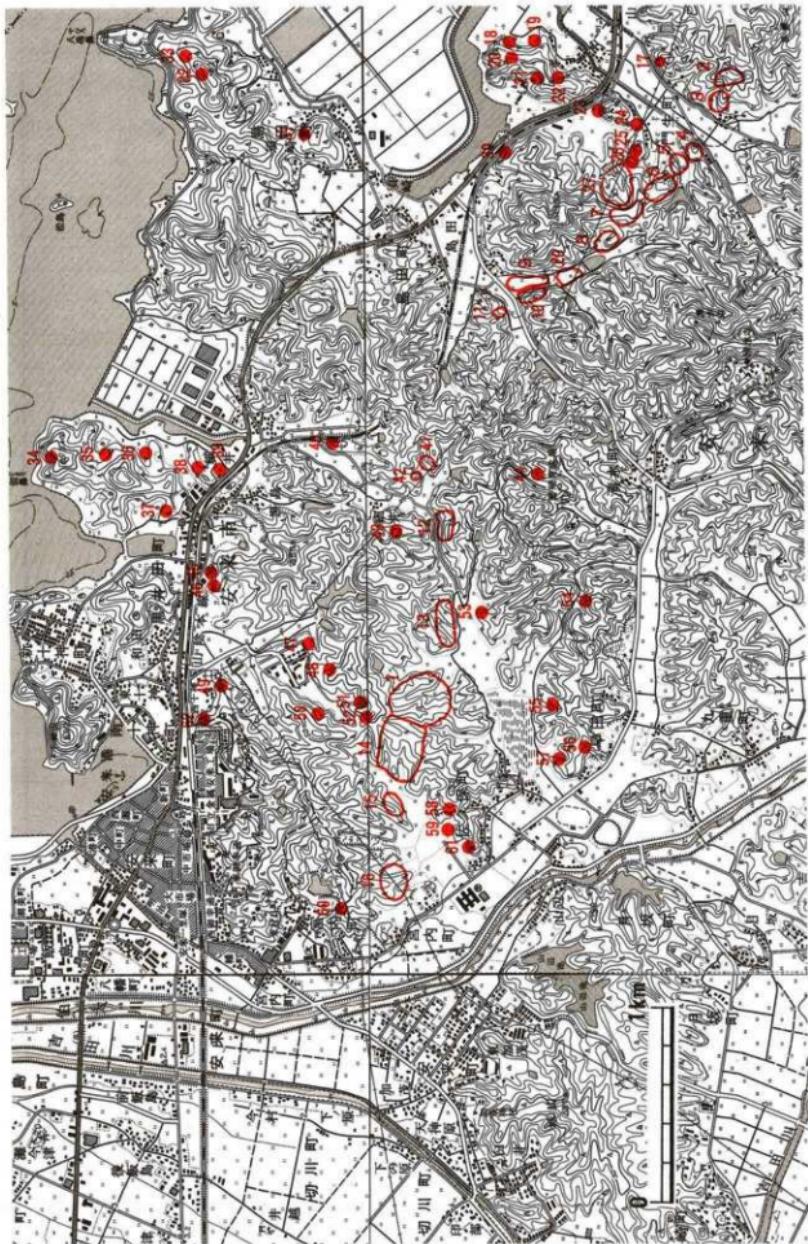
安来市佐久保町は、もと能義郡宇賀荘村に含まれており、黒井田町のあるもと島田村、宮内町のあるもと安来町とは境を接している。安来市の中央部の北寄りに位置している。「出雲國風土記」に記載の意宇郡安来郷、櫛縫郷に比定される地域であったと考えられている。

佐久保町周辺は、西に伯太川、吉田川、飯梨川がありなす安来平野が広がっている。北、東、南には中国山地から連なる山塊が展開し、その先端は至るところで尾根が八つ手の葉状に延びている。この尾根と尾根の間の谷は概ね低湿地となっている。多くの遺跡はこの丘陵上や、その縁辺に集中して存在している。また、この丘陵地は、今日、筍や梨などこの地域の特産品が盛んに栽培されている他、桧や杉の植林がなされている。

以下、周辺に存在する遺跡について概観しておく。

安来市内では、縄文時代の遺跡は從来あまり知られていないかったが、安来道路予定地内の近年の調査で、島田地区の島田黒谷I遺跡や明子谷遺跡で縄文時代前期から後期にかけての土器が大量に検出された。いずれも二次的に流れ込んだ土層に包含されており、遺構は認められなかったが、付近に大きな集落跡があることが推定される。

弥生時代になると、前期の遺跡は荒島地区的柳II遺跡から、安来道路予定地内の今年度の調査で、壺形土器が検出されたのみであるが、中期後半になると高広遺跡、吉佐地区の山の神遺跡、などで竪穴住居跡が見つかっている。また、宮内遺跡からは土墳墓も検出されている。弥生時代後期には猫ノ谷遺跡、普請場遺跡、臼コクリ遺跡、宮内遺跡、越畠遺跡など多くの遺跡が見つかっている。とりわけ門生地区的陽徳寺遺跡では高地性集落が見つかっており注目されている。長曾土墳墓群のような群集する土墳墓も作られたり、島田黒谷三遺跡のような木棺墓も出現する。



第2図 岩屋口南遺跡周辺の遺跡

番	遺跡名	所在地	種別	摘要
1	岩屋口遺跡	佐久保町	集落跡、横穴墓	(北) 穹穴墓12、弥生後期集落 (南) 横穴墓7、弥生後期~奈良集落跡
2	陽徳遺跡	門生町	集落跡、他	集落~弥生後期
3	陽徳寺遺跡	門生町	堤跡、寺院跡	堤~平安、寺院跡~近世
4	門生黒谷Ⅲ遺跡 (五反田古墳群)	門生町	集落跡、古墳群	集落跡~弥生後期 古墳群~前期~中期6基
5	門生黒谷Ⅱ遺跡	門生町	集落跡	古墳中期
6	門生山根1号窯	門生町	須恵器窯跡	5世紀末
7	島田黒谷Ⅲ遺跡	島田町	土壙墓	弥生後期
8	島田黒谷Ⅱ遺跡	島田町	散布地	須恵器
9	島田黒谷Ⅰ遺跡	島田町	散布地	繩文、弥生後期
10	普請場遺跡	島田町	集落跡	弥生後期、古墳中期~平安
11	島田南遺跡	島田町	集落跡	古墳後期~奈良
12	才ノ神遺跡	黒井田町	集落跡、祭祀跡	集落~弥生後期、祭祀~奈良~平安
13	越岬遺跡	黒井田町	集落跡	弥生後期、古墳後期~奈良
14	臼コクリ遺跡	佐久保町	集落跡、墳墓、 横穴墓	集落~弥生後期、墳墓~弥生後期 横穴墓19基
15	大原遺跡	佐久保町	集落跡、玉作工 房跡、横穴墓	集落~弥生後期、玉作~古墳中期、 横穴墓1基
16	宮内遺跡	宮内町	集落跡、横穴墓	集落跡~弥生後期、横穴墓2基、他
17	陽徳経塚	門生町	経塚	一字~石経
18	小崎遺跡	門生町	散布地	弥生土器
19	下口古墳群	門生町	古墳群	円墳2基
20	和田古墳群	門生町	古墳群	円墳2基
21	常福寺山土壙墓	門生町	土壙墓	
22	山根古墳	門生町	古墳	前方後円墳
23	大歳神社古墳	門生町	古墳	方墳?
24	門生・山根遺跡	門生町	集落跡	古墳中期
25	黒谷古墳群	門生町	古墳群	方墳、円墳
26	ウガフキ鉄跡	門生町	鉄跡	スラグ
27	門生古窯跡群高畑地区	門生町	窯跡群	窯跡、須恵器工房跡
28	門生古窯跡群山根地区	門生町	窯跡群	須恵器散布
29	明子谷遺跡	島田町	散布地	繩文土器、弥生土器
30	東谷古墳群	島田町	古墳	人物埴輪
31	ちょう塚古墳	島田町	古墳	円墳、陶棺
32	赤崎山横穴	島田町	横穴墓	
33	岩崎宅横穴	島田町	横穴墓	
34	高留古墳	黒井田町	古墳	円墳、円筒埴輪、須恵器
35	小馬木古墳	黒井田町	古墳	

36	浜小崎遺跡	黒井田町	集落跡、古墳、横穴墓	古墳—前方後円墳、形象埴輪 集落—古墳
37	長曾遺跡	黒井田町	集落跡	古墳中期 竪穴住居
38	黒鳥横穴	黒井田町	横穴墓	3穴以上
39	大日さん古墳	黒井田町	古墳	円墳、円筒埴輪
40	大納言山古墳	黒井田町	古墳	円墳
41	たらら谷鉢跡	黒井田町	鉢跡	スラグ
42	猫の谷遺跡	黒井田町	集落跡	弥生後期 竪穴住居
43	越峰古墳	黒井田町	古墳	
44	繩谷遺跡	清水町	集落跡	古墳
45	長曾土壙群	黒井田町	土壙墓群	弥生後期
46	刎烟遺跡	黒井田町	散布地	弥生土器、土師器
47	高広遺跡	黒井田町	集落跡、横穴墓	集落跡—弥生、古墳後期以降 横穴墓—13基、家形石棺、双龍環頸太刀
48	客さん古墳	黒井田町	古墳	古墳後期、長持形石棺2
49	佐久保山古墳	黒井田町	古墳	円墳
50	長廻遺跡	黒井田町	散布地	須恵器
51	大神谷古墳群	佐久保町	古墳	前方後円墳、円墳
52	大荒神土壙墓	佐久保町	土壙墓	
53	寺谷遺跡	黒井田町	散布地	弥生土器、土師器、須恵器
54	丸山古墳	早田町	古墳	
55	堂面土壙墓	佐久保町	土壙墓	古墳
56	早田古墳	早田町	古墳	
57	叶谷遺跡	早田町	集落跡、古墳	集落跡—弥生後期 竪穴住居
58	玉造土壙墓	佐久保町	土壙墓	
59	玉造遺跡	佐久保町		
60	新林古墳群	宮内町	古墳群	古墳前期
61	禿前古墳	佐久保町	古墳	円墳
62	毘女塚古墳	黒井田町	古墳	古墳中期、前方後円墳、葺き石、円筒埴輪、舟形石棺、鉄劍、鐵鎌、鐵矛

表1 岩屋口南遺跡周辺の遺跡

古墳時代前期には、20mの円墳で割竹形木棺2、土器棺1を埋葬施設にした新林2号墳や25mの円墳で内法の長さ4.5m、幅0.5mをはかる狭長な縦穴石室1、割竹形木棺1、小型箱式石棺を埋葬施設にした五反田1号墳がある。五反田1号墳の縦穴式石室は盗掘を受けていたものの小型鏡、菅玉、鉄器類が攢乱土の中から検出されている。また島田黒谷I遺跡では、古式土師器の出土する溝跡があり、生活の痕跡をとどめている。

古墳時代中期になると、伯太川の東岸地区では遺跡の数が一挙に増加する。まず、古墳としては、

全長50mの前方後円墳で荒島石製の繩掛突起を持つ舟形石棺を埋葬施設とする毘売塚古墳が挙げられる。この古墳は、河原石を主とした葺石を施し、円筒埴輪も巡っている。遺物として、棺外からは鉄矛1本、鉄鎌3点以上が、管内からは鉄劍2本以上、金銅製空玉3点が検出された。墳形が前方後円形であること、比較的豊富に金属製品を副葬していること、『出雲国風土記』にある語臣猪麻呂の説話に縁の古墳として、月の輪神事と呼ぶ際事が継承されていることは注目される。生産遺跡としては、出雲地方で最も古い須恵器窯跡の一つで山陰須恵器編年のI期とされる門生古窯跡群が存在する。この古窯跡群は高畠地区と山根地区からなっている。高畠地区は、從来高畠古窯跡群と呼ばれていたところで複数の散布地があり、窯の本体も複数存在するものと推察されている。なお、昭和56年に中国電力（株）の鉄塔建設に伴って安来市教育委員会が同地区で実施した発掘調査では、須恵器工房跡が確認されている。山根地区では、平成6年度の安来道路予定地内の調査で高畠地区より1段階古いと考えられる須恵器と共に門生山根1号窯が検出された。窯跡は床面での長さ6.5m、窯の中程の焼成部における最大幅が2m、煙出しの最大形が1mを測る大型のものであった。山陰の初期須恵器生産を探る上で重要な遺跡であり、正式の報告書の刊行がまたれる所である。玉作関係遺跡については、平成6年度に安来道路予定地内で発掘調査したI期の須恵器を伴う大原遺跡が著名である。この他、I期の須恵器を伴う堅穴住居跡が確認されたものとして長曾遺跡、門生山根遺跡、などが知られている。

古墳時代後期になると、毘売塚期古墳の東の丘陵に長持形石棺2基を埋葬施設とする客さん古墳が築造される。飯梨川の東側の地域は、横穴式石室の希薄な地域であり、吉佐町の神代塚古墳、吉佐貝塚古墳を除いては今のところ分かっていない。安来市は県内でも横穴墓の集中する地域であるが、この地域も主要な谷には横穴墓が造られている。四注式もしくは擬似四注式で平入りのタイプが主流を占めるのは市内の他地域と共通する。伯太川の東側の地域ではその造りや副葬品で注目すべき横穴墓が多い。灯明台石を伴う横口式家形石棺を備え、馬具一式を副葬した宮内1号横穴墓、灯明台石を伴う横口式家形石棺を備え、單鳳環頭大刀を副葬した臼コクリ横穴墓、横口式家形石棺をともない双龍環頭大刀が出土した高広四区1号横穴墓、彩色装飾壁画を描き端正な横口式家形石棺を持つ穴神1号横穴墓などがその例である。生産遺跡としては徳見津遺跡、五反田遺跡で鍛冶遺構が確認されている。明確に鍛冶関連遺跡と確認されないものの、伯太川の東側ではスラグを散布する遺跡が鳥取県米子市船田町にかけて多く見られ、すべてこの時期とは言えないものの、この地域ではかなり広範囲に製鉄に関連する行為が行われていたらしい。集落跡としては、高広遺跡などが知られている。

奈良時代には、普請場遺跡、島田南遺跡などで集落跡が確認されている。とりわけ島田南遺跡では、墨書き土器、ヘラ書き土器、などが出土し、古代の役所との関連も考慮されている。

以上、縄文時代から奈良時代にかけての伯太川の東側地域の遺跡を時代ごとに概観した。

安来市全体の中で伯太川の東側地域は、古墳時代において、特別の意味をもつ地域であるといって過言ではない。それは、古墳時代中期に山陰のほかの地域に先駆けて須恵器の生産が始まったり、ほぼ同時期に玉造が行われたりすることに表されている。そして、古墳時代後期にも製鉄関連遺跡が多く認められたり、古墳に横穴式石室が採用されることが希であったりすることにつながる。こうした、地域色が弥生時代や、古墳時代前期に遡って認められるのかどうかは今後の課題であるが、もし、古墳時代中期にその画期があるとすれば生産や流通の問題のみならず、出雲全体の政治的動向を視野においた検討が必要となろう。ともあれ、地域史の解明が待たれる地域である。

第3章 調査の経過と概要

1 平成3年度の調査

平成3年度は、I区とII区の調査を行った。4月25日に現場事務所に機材を搬入し発掘用具を現場に移動することから始めた。岩屋口南遺跡は、安来道路の本道部と本道部南側のインターチェンジ予定地に位置している。平成2年度当初は、「岩屋口遺跡」として取り扱っていたが、平成2年度の試掘調査の結果と平成3年度に実施した本道部の調査結果を受けて平成4年度のインターチェンジ予定地の調査時から本道部を含む南側を岩屋口南遺跡、その北側を岩屋口北遺跡として取り扱うこととした。

本書では、こうした事情から平成3年度に調査を実施した本道部分も岩屋口南遺跡とし、北から南北に伸びる尾根および西斜面をI区、その東側に位置し北から南東に伸びる尾根の先端をII区、その南側に広がる水田を水田部、インターチェンジ予定地をIII区として記載した。

I区の調査

I区の調査は、西斜面の立木伐採の片づけが終わっていなかった為、4月26日にトレンチの設定を行い東斜面の試掘から開始した。

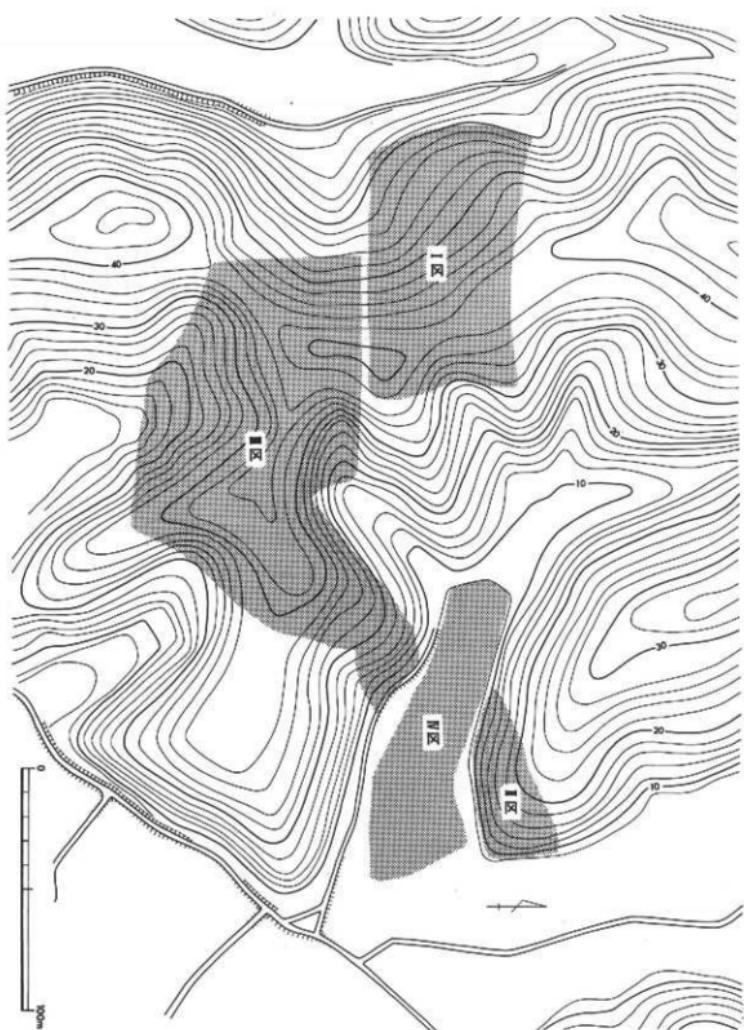
東斜面では、合計11ヶ所のトレンチを設定したがいずれも遺構・遺物を確認することはできなかつた。そこで、急速試掘の主体をまだ片づけの終わっていない西斜面に移すこととした。西斜面は、南西に馬蹄形に開く谷で南北に伸びる尾根から派生する小尾根が降りながら谷に沿って、西から南に回り込むように形成されていた。大量に散乱する桧の丸太の間を縫ってトレンチを11ヶ所設定した。このトレンチ設定の過程で、桧の根が起た跡に空洞があることを確認したので、ほぼ、横穴墓であるとの認識をもつた。いずれのトレンチからも須恵器、土師器などの遺物が検出され、遺構の密度の高さを想像させたが、地表面から2mばかり掘っても地山に到達しない所が多く、壁の崩落等危険が予期されたので6月12日に至って地山の検出を諦めざるを得なかつた。

建設省による立木伐採の後かたづけの後7月5日には1/100の地形測量を開始して7月18日からは谷下部の表土掘削を行った。8月6日には同区の全面発掘を開始した。その結果、概ね斜面の全面から遺構を確認し、縦穴住居跡、掘立柱建物跡、横穴墓を検出することができた。横穴墓の玄門部からは、大量の赤貝と3点の牛骨が検出され、葬送儀礼に関連する行為と考えられた。これらの写真撮影、遺構実測を行った後、12月24日に現地調査を終了した。

II区の調査

II区の調査は、5月10日から開始した。II区は、分布調査時点で、丘陵の南斜面が広い範囲に加工され平坦面を作り出されていた。地形の状況だけをみると後世の畠地として造成された可能性が考慮されていたところである。平成2年度の範囲確認調査において斜面の端において一部で柱穴と須恵器、土師器片が検出されていたので、後世に遺構面が削平されていたとしても、なお遺構の痕跡が確認できるのではないかと考え調査区を平坦面全面に設定して発掘調査を行った。この結果、遺構面はほぼ廃棄された状況を保っていることが確認された。6月12日からは平成2年度確認調査が行われていなかった尾根上と北斜面にトレンチを設定したが遺構遺物は確認されなかつた。南斜面の平坦面からは、掘立柱建物跡が検出された。なお出土遺物の中に若干の鉄滓があり、この遺跡の性格が鉄生産に何ら

かの関連を持つものと考えられた。8月8には写真撮影、遺構実測とともに終了し、現地調査を終えた。



第3図 調査区の位置

2 平成4年度の調査

平成4年度の調査は、Ⅲ区と水田部で行った。4月16日機材の搬入を行い水田部の調査から開始した。

Ⅲ区の調査

Ⅲ区の調査は、Ⅰ区から続く南北に伸びる尾根とその尾根を挟んで東西に存在する斜面を第3調査区、その尾根の南側に展開する斜面を第2調査区、その南北に伸びる尾根から東に派生する尾根の平坦部と北、南、東の斜面を第1調査区と呼称して行った。第3調査区は前年度調査のⅠ区と同じ谷に面しており、当初から同一の集落跡と考えられていた。調査は、平成2年度の範囲確認調査において比較的遺物出土密度の高かった第1調査区から始める事とした。調査は5月11日開始した。

第1調査区

第1調査区では、平坦面の表土除去から始め、必要に応じてトレントを設定しながら順次、北斜面、南斜面、東斜面と掘り進めた。遺構は、北斜面では確認されなかったものの、平坦面からは、古墳時代後期の焼土土壤、弥生時代後期の掘立柱建物跡などが検出された。南斜面からは、弥生時代後期の竪穴住居跡、古墳時代後期の小形の横穴墓が確認された。また、東斜面からは、弥生時代後期の竪穴住居跡、奈良時代の加工段を伴う掘立柱建物跡が検出された。なお、この掘立柱建物跡の調査中に穴沢氏の指導のもとに鍛冶剥片を検出することができ、この建物が鍛冶に関係するものであることを確認することができた。

第2調査区

第2調査区は、東斜面、北西斜面とトレントを設定して調査を進めた。北西斜面では、遺構面の確認が難しく、若干の竪穴住居跡と掘立柱建物跡を確認するに留まった。東斜面では、その頂近くで2基の古墳時代後期の横穴墓を確認し、その下方では加工段を伴う掘立柱建物跡を検出した。これらの、横穴墓は第1調査区で見つかった小形の横穴墓と表裏の位置関係にあり、同一の群を構成していたものと考えられる。また、これらの横穴墓は、2基とも閉塞石に須恵器が張り付いており、前庭部を埋めていたことが明かとなり注目された。

第3調査区

第3調査区は立木の伐採が遅れていたため、9月1日から調査を始めた。Ⅰ区の調査の時点で斜面のほぼ全面から遺構が検出されていたので、同じ谷に位置しているこの調査区もほぼ同様の遺構が存在するものと考え、尾根部から谷部に向かって順次調査を行った。尾根の頂部のすぐ下からは、古墳時代後期の横穴墓が単独で検出された。この横穴墓の前庭部の前方には急斜面に高さ2mばかりの盛り土がなされており、横穴墓の造成時の残土を処理したものと考えられた。この斜面の西側下方からは古墳時代の竪穴住居跡2、古墳時代以降の加工段を伴う掘立柱建物跡4が検出された。

また、南西の用地際からは古墳時代中期に遡ると考えられる、尾根を開削して第2調査区に通じる道路跡を確認することができた。図面の実測、写真撮影を終えて、平成5年1月9日に調査を終了した。

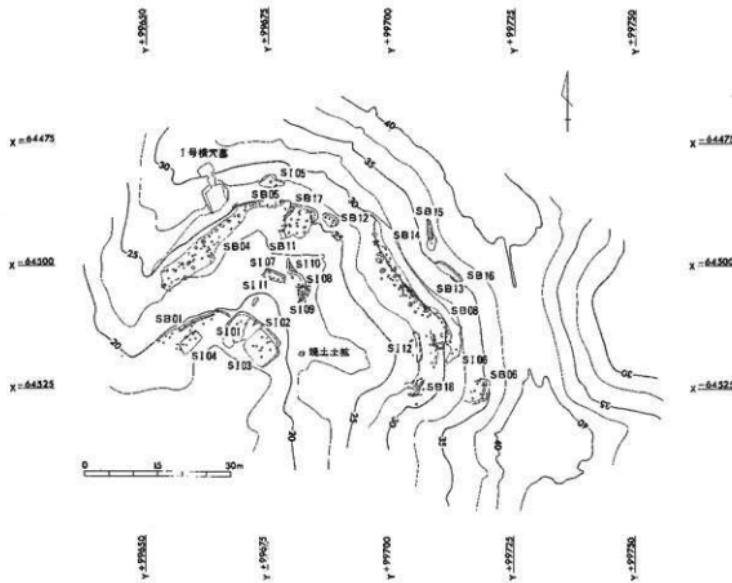
第4章 遺構と遺物

1 I区の調査

I区では、西南に開く斜面からまとめて遺構が検出された。この斜面は、南から北に抉るようにはいる狭長な谷に面している。遺構は、海拔19mから36mにかけて認められた。なお、19m以下にも遺構は存在するものと考えられるが、道路用地外になるので調査は行わなかった。竪穴住居跡12、掘立柱建物跡12、焼土坑1を検出した。

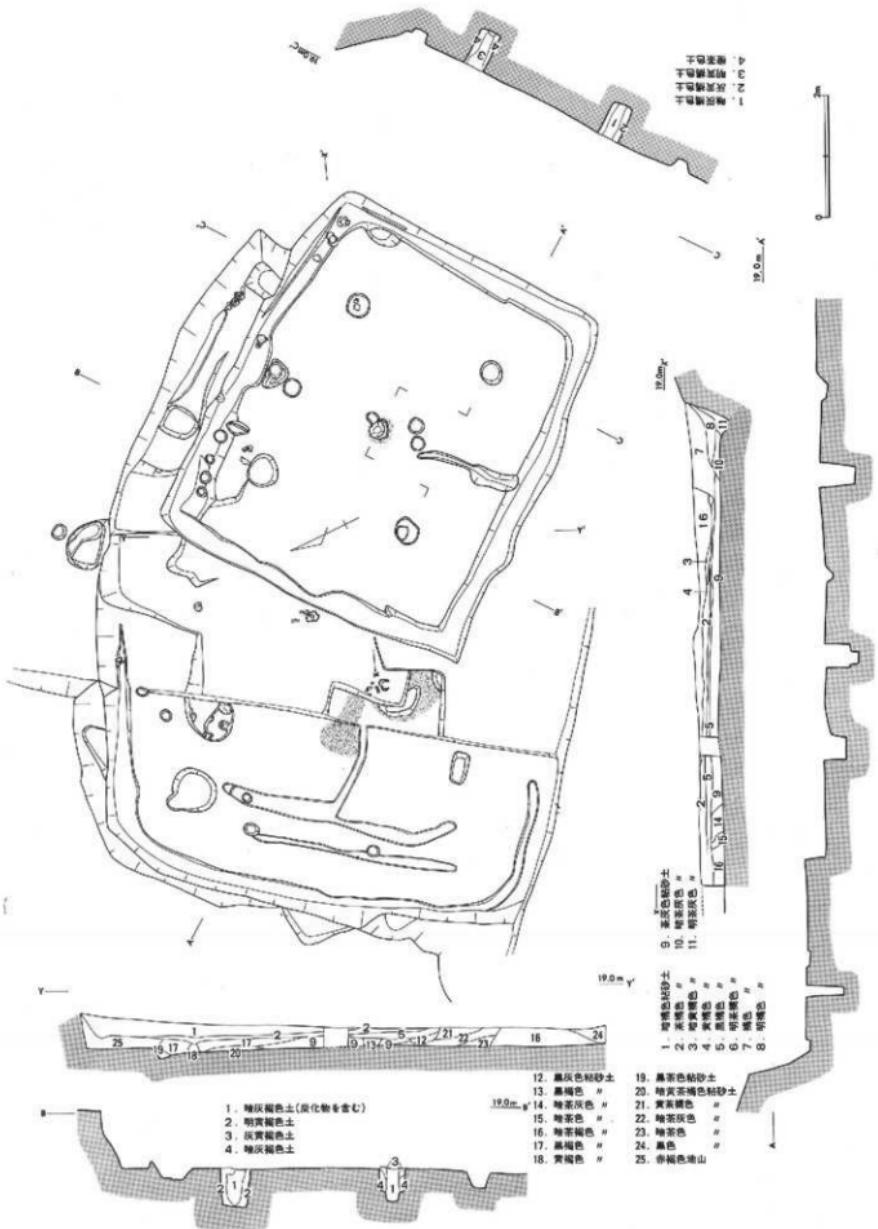
S I 0 1 (第5図)

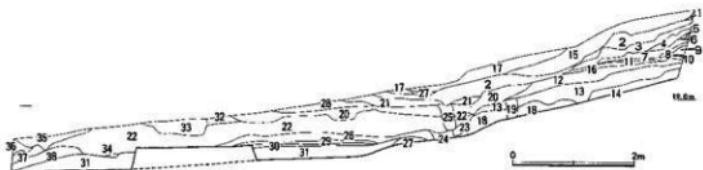
S I 0 1は、馬蹄形に開く谷の下部にあり、ちょうど掘り鉢の底のような位置から検出した。このため、この住居跡の上部は斜面の上から土砂が崩落、流入したものらしく、住居跡検出面の2m以上にわたって堆積土が存在していた。調査はこの堆積土の除去を行うことから開始したが古墳時代後期以後の厚い遺物の包含層が認められた。この包含層の下には間層を挟んで古墳時代中期の土器群が認められ、これが北から南に落ち込んでいく様子が認められた。この時点で、竪穴住居跡の存在が想起されたので、慎重に精査を行った。この結果、東側は検出できなかったものの、完全に残っていた西側で一辺7mを測る方形の竪穴住居跡を検出した。遺構は褐色粘砂土に掘り込まれ、その覆土は上層で黒褐色、下層で茶褐色を呈しており、炭化物や土器を含んでいた。また、下層に至るほど地山ブロックを含む傾向にあった。



第4図 I区遺構配置図

第五圖 1區 S 01~S 03測量圖





- | | | |
|-------------------------|----------------------------|----------------------------|
| 1. 明灰色粘砂土(炭化物を少々含む) | 14. 茶褐色粘砂土 | 27. 黒褐色粘砂土 |
| 2. 法灰青灰色粘砂土(") | 15. 椿色粘砂土(地山ブロックを含む) | 28. 暗灰褐色粘砂土(地山ブロックをわずかに含む) |
| 3. 法系褐色粘砂土(炭化物を多く含む) | 16. 黒褐色粘砂土(炭化物、地山ブロックを含む) | 29. 明褐色粘砂土(地山ブロックを含む) |
| 4. 茶褐色粘砂土(炭化物を少し含む) | 17. 黒褐色粘砂土(地山ブロックを含む) | 30. 明褐色粘砂土 |
| 5. 法系褐色粘砂土(") | 18. 茶褐色粘砂土(") | 31. 明褐色粘砂土(地山ブロックをわずかに含む) |
| 6. 法系褐色粘砂土 | 19. 淡黒褐色粘砂土(炭化物をわずかに含む) | 32. 暗灰褐色粘砂土 |
| 7. 黒褐色粘砂土 | 20. 黑褐色粘砂土(炭化物を含む) | 33. 暗褐色粘砂土 |
| 8. 茶褐色粘砂土 | 21. 暗褐色粘砂土(1~2mの地山ブロックを含む) | 34. 明褐色粘砂土(炭化物を含む) |
| 9. 暗茶褐色粘砂土 | 22. 黒褐色粘砂土(地山ブロック、炭化物を含む) | 35. 暗褐色粘砂土(地山ブロックを含む) |
| 10. 明茶褐色粘砂土(炭化物をわずかに含む) | 23. 明褐色粘砂土(炭化物を含む) | 36. 黒色粘砂土 |
| 11. 暗褐色粘砂土 | 24. 茶褐色粘砂土 | 37. 暗褐色粘砂土(2~3mの地山ブロックを含む) |
| 12. 棕色粘砂土 | 25. 明褐色粘砂土 | 38. 暗茶褐色粘砂土(地山ブロックをわずかに含む) |
| 13. 赤褐色粘砂土 | 26. 茶褐色粘砂土(地山ブロック、炭化物を含む) | |

第6図 I区 S101南北ベルトセクション図

西側の壁は、北から南にかけて削平されており、北西の角で1m、南西の角で0.3m残存していた。壁際には、幅10cmから30cmの壁体溝がコの字形に巡る。そのほかにも床面には南北に走る2条の浅い溝があり、この住居跡で2回以上の建て替えが行われていたことを示唆している。ピットは7ヶ所確認したが、どれが、主柱穴になるのか確認し得なかった。

出土遺物（第7図～第9図）

S101からは、大量の須恵器と土師器が出土した。須恵器は、蓋壺、高壺（有蓋、無蓋）、土師器は、壺、低脚壺、高壺、甑、壺、甕が確認された。このうち須恵器は陶邑編年T K23、47に対応するものと考えられる。以下、須恵器、土師器の順で器種ごとに説明したい。

図示した須恵器蓋壺（第7図1～10）10点の内、蓋は4点ある。いずれも、口縁端部には段を持っており、若干ではあるが稜より口縁部が外に出ている。調整は、基本的に天井部外面を回転ヘラ削り、そのほかを回転ナデで仕上げている。1は、復元口径12.1cmで器高は4cmと他の土器と比べて低い。灰黒色を呈し、薄手の土器で胎土には小粒の砂粒を若干含んでいる。天井部の回転ヘラ削りの範囲はやや狭い。ヘラ削りは浅い。輪轂の回転方向は右である。天井部と口縁部を分ける稜はシャープである。

2は、復元口径12.6cm、器高4.8cmを測る。器高に対して口縁高は高い。暗灰色を呈し、薄手の土器で胎土には細かい砂粒を多く含んでいる。天井部は若干丸みを帯びる。天井部の回転ヘラ削りの範囲は広い。輪轂の回転方向は左である。天井部内面中央には指頭による押圧の後仕上げナデが施されている。稜はシャープで、口縁端部は若干肥厚する。3は、復元口径12.2cm、器高は5.0cmである。灰色で、胎土には砂粒を多量に含んでいる。焼きはやや軟らかい。天井部の回転ヘラ削りの範囲は広い。削りは荒く砂粒が多く移動する。輪轂の回転方向は右である。ざんぐりとした厚手のタイプで、稜もシャープさに欠ける。4は、口径12.8cm、器高5.1cmを測る。明灰色であるが、器表面には濃い緑色の自然釉が厚くかかる。厚い作りで特に、天井部の厚みは目に付く。胎土には砂粒を多量に含む。天井部の回転ヘラ削りは狭い。輪轂の回転方向は右である。天井部内面の中央には仕上げナデを施す。

口縁端部は若干肥厚する。

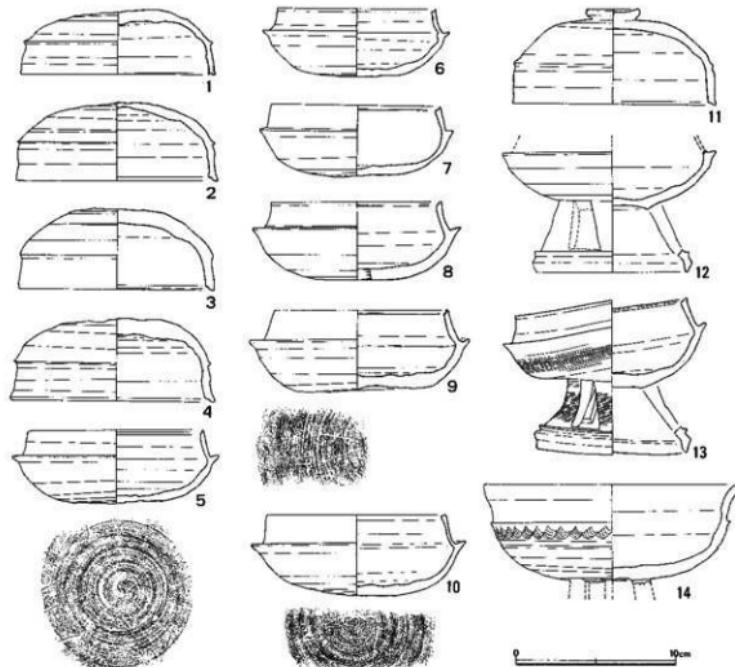
坏は、6点図示した。10を除いていずれも口縁端部には段を持っている。また、口縁部は若干内傾する。調整は基本的に底部外面は回転ヘラ削り、そのほかを回転ナデで仕上げることは、蓋と共通する。5は、口径11.0cm、受け部径13.0cmで器高は4.5cmである。暗灰黒色を呈し、断面は、セピア色をなしている。比較的薄い作りになっている。底部外面の削りは浅いがシャープである。底部内面は同心円状に凹凸が著しい。回転ヘラ削りは、受け部近くにまで及んでいる。轆轤の回転方向は左である。底部外面には土器の焼成以前に描かれたヘラ記号がある。6は、復元口径9.8cm、復元した受け部径11.6cm、器高4.2cmと若干小振りである。灰黒色で断面はセピア色を呈している。比較的薄い作りになっている。ヘラ削りの範囲は狭い。この土器の端部は、いずれもシャープに仕上げられており、口縁端部は若干外側に肥厚する。回転ナデは、見込みの中央部には及んでいない事が留意される。轆轤の回転方向は左である。7は、復元口径10.5cm、受け部径12.1cm、器高4.5cmで口径の割に低い作りである。灰色で、砂粒を若干含んでいる。底部の回転ヘラ削りの範囲はやや広めである。比較的に低い作りである。灰色で、砂粒を若干含んでいる。底部の回転ヘラ削りの範囲はやや広めである。薄い作りである。受け部はほぼ水平に作られており、口縁部は、受け部から口縁端部に向かって緩やかに肥厚する。轆轤の回転方向は右である。8の法量は、復元口径10.6cm、復元した受け部径13.0cm、器高4.8cmである。淡灰色で胎土には多少の砂粒を含んでいる。器厚は、やや厚めである。口縁部は受け部から内傾し、その中央近くで若干外反する。口縁端部はやや肥厚する。底部の風化は著しいが、回転ヘラ削りは受け部近くにまで及んでいる。内面の回転ナデは中央にまでは至っていない。轆轤の回転方向は右である。9は、口径10.7cm、受け部径13.7cm、器高5.1cmとやや大振りである。灰色で、比較的大粒の砂粒を含む。厚手の土器であるが、底部で特に厚い。内面の、体部と口縁部の境には横に粘土の接合痕が残る。底部の回転ヘラ削りは荒く、ヘラ削りの範囲も狭い。底部から体部にかけての外形は角張る。口縁部の立ち上がりは他のものに比べて内傾する。轆轤は、左回りである。底部にはヘラ記号が認められる。10は、復元口径11.2cm、復元した受け部径13.3cm、器高5.0cmを測る。灰色を呈すが、断面はセピア色に近い茶褐色である。口縁端部は、他の土器と異なりヘラで切ったように平らに作っている。立ち上がりはやや内傾し、先端に向かって肥厚する。底部から体部にかけては丸く仕上げる。受け部と立ち上がりにかけての内面には明瞭に界線が認められる。器厚は0.2cm～0.7cmで体部から立ち上がりにかけて薄い。回転ヘラ削りの範囲はやや狭い。見込みは、中央部を除いて2度ナデを施している。底部にはヘラ記号が認められる。轆轤の回転方向は左である。

第7図11は、完形品である。有蓋高杯の蓋と考えられるもので、口径12.6cm、器高5.9cm（つまみを除くと5.2cm）である。つまみは、径3.8cmで中央が窪む。天井は丸く作られ、稜はやや鈍い。削りの範囲は広めである。灰色で、大きめの砂粒を多量に含む器厚は、やや厚めである。口縁端部には段を持つ。轆轤の回転は右である。第7図12・13は、有蓋高杯である。ともに台形の3方透かしの脚部を有する。12は、立ち上がりを欠くが、受け部近くまで回転ヘラ削りを施す。脚端部には段を持つ。体部は比較的薄い作りである。灰色で、轆轤の回転は右である。13は、復元口径10.7cm、器高は8.6cm～9.7cmで、台形の3方透かしの脚部を持つ。透かしは均等には割り付けられていない。立ち上がりは口縁端部にかけてやや内傾し、肥厚する。体部から脚部にかけてカキ目を施す。暗灰色で断面はセピア色を呈す。脚端部には明瞭に段を有す。体部は薄く、丁寧な作りであるが焼けひずみが著しい。

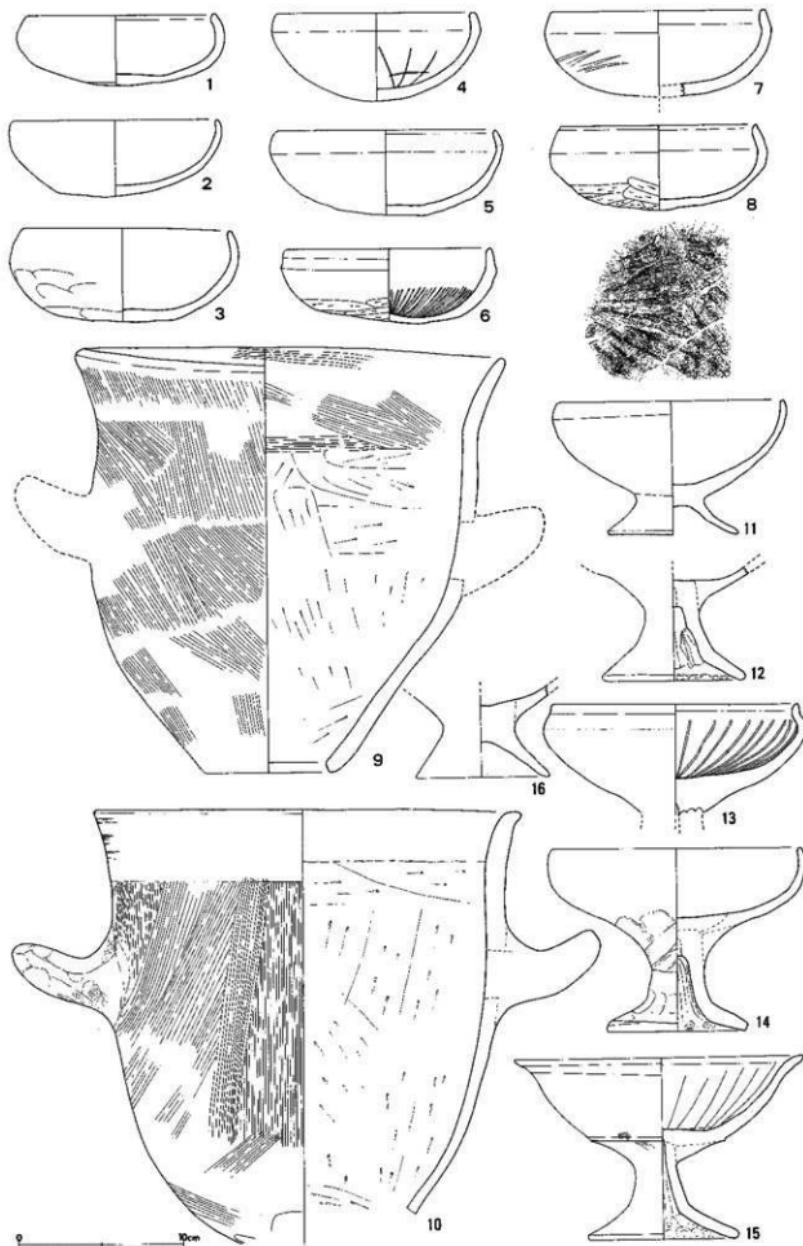
轆轤は左回転である。

14は、無蓋高杯で、脚部を欠く。口径15.3cmで残存高は6.0cmである。シャープな稜を持ち、稜の上には外反する口縁部がつく。また、この稜の直下には細かい備描波状文が巡る。灰色で、大きめの砂粒を含む。轆轤は左回転である。外面には、自然軸がかかる。見込みには、重ね焼きの痕跡が残る。

土師器坏（第8図1～8）は、土器の表面には、墨流しをしたように白い粘土の模様が認められるものが多く、胎土も緻密である。体部は内湾しながら外に開くものが、また口縁部も内湾し、内傾するものが多い。多い。1は、復元口径11.3cm、器高4.2cmを測る。淡黄灰色を呈す。底部はやや尖り気味で、底部から体部にかけては丸みを付ける。器面の剥落のため調整が分かりにくいが、口縁部内外面は横ナデを施す。最大径は上半部に位置する。2は、口径12.3cm、器高4.6cmである。黄灰色で、底部は比較的丸みを帯びる。口縁は、余り内湾しない。器面の剥落が著しく調整の全体は不明であるが口縁部内外面は横ナデを施す。最大径は上部上部約1/4に位置する。3は、口径12.5cm、体部



第7図 I区SI01出土遺物実測図(1)(須恵器)

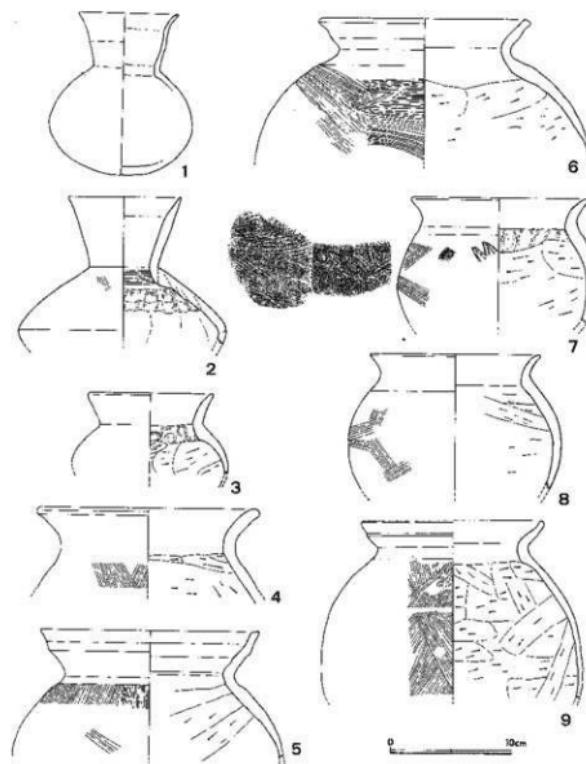


第8図 I区 SI01出土遺物実測図(2)(土師器)

最大径13.8cm、器高5.6cmの深い作りである。オレンジ色を呈す。底部は比較的平らである。底部から、体部に至る外面は横方向のヘラ削り、口縁部と内面は横ナデを施す。最大径は上部約1/3に位置する。4は、復元口径11.7cm、最大径12.6cm、器高5.3cmで口径に比して深い作りをなす。オレンジ色を呈す。底部は丸く仕上げる。外面の体部上方は、横ナデ、口縁部はつまみナデを施す。見込みには放射状の暗文を施す。この暗文は間隔の広いもので、その中心は底部の中心からずれている。口縁部に黒斑が付く。最大径は上部約1/5に位置する。5は、口径13.0cm、最大径14.0cm、器高5.1cmを測る。明黄褐色をなしている。器面の風化が著しく調整は不明である。最大径は上部約1/4に位置する。6は、口径12.5cm、器高4.5cm、最大形13.0cmを測る。口縁はほぼ直立している。この口縁部外面には段が付く。底部外面は横方向のヘラ削り、体部外面は横ナデを施す。口縁部内外面はつまみナデを行

い見込みには間隔の放射状の暗文を施す。最大径は上部約1/4に位置する。7は、復元口径13.0cm、残存口径5.1cm、最大径13.7cmでオレンジ色を呈す。最大径は、上部1/5に位置する。底部外面はヘラ削り、体部はヘラ磨きを施す。口縁部はつまみナデを行う。8は、復元口径11.9cm、復元最大径13.1cm、器高5.1cmでオレンジ色をなす。最大径は上部約2/5に位置する。調整は、内面が横ナデ、外面が口縁部から体部にかけて横ナデ、底部がヘラ削りを施こされている。このヘラ削りは3箇所を始点にして行われており注目される。

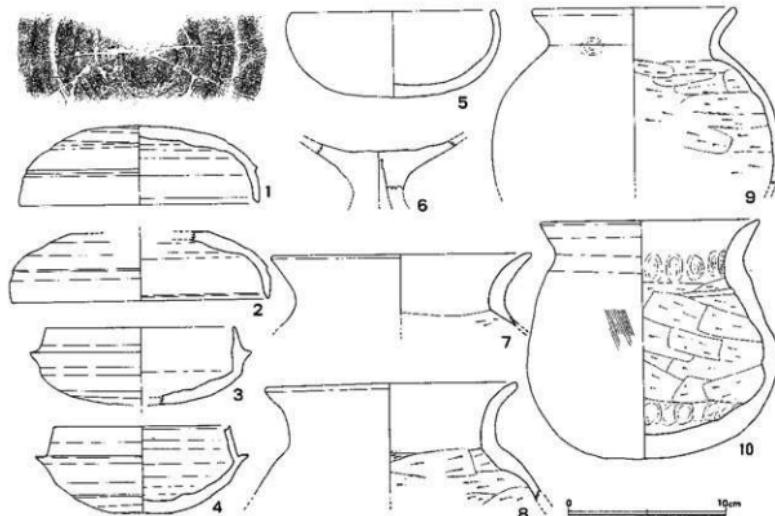
瓶(第8図9、10)は、底の完全に抜ける9と、複数の円孔を穿ったとみられる10がある。9は、口縁部がやや外に開き、口径26.0cm、器高25.4cm



第9図 I区 S101出土遺物実測図(3)(土師器)

を測る。胴部の最大径は全体の約 $1/2$ に位置するが、この最大径の辺りから直線的に底にいたる。黄褐色を呈す。把手は失われているが、一对あったものと考えられ、その取り付けは差し込み式になっていたことがその破片から観察された。調整は外面が荒い刷毛目、内面は口縁部で刷毛目、胴部でヘラ削りが認められた。10は、その器形が砲弾型をなすもので、9と異なり底は丸みを持つ。暗褐色で口径35.8cm、残存高26.0cmを測る。把手は一对あり差し込み式になっている。口縁部は内外面とも横ナデ、胴部は外面刷毛目、内面はヘラ削りを施す。見込みには放射状の暗文が認められる。

高杯（第8図11～15）は、基本的に杯と共通する胎土や、色調をなしている。杯部は、15を除いて杯と共通する器形をとる。また、15を除いて杯部と脚部の接合部は緩く外反しており、その境が明瞭でない。11を除いて脚部と杯部の接合部内面には、杯部の底に向かって小孔が穿たれている。11は、口径13.2cm、器高8.0cm（脚部高2.0cm）、脚端部径7.8cmの体脚形をなすものである。オレンジ色を呈す。杯部外面には刷毛目が認められるもののその他は器面の剥落のため調整はよく分からぬ。12は、杯部の口縁部及び体部を欠く。残存高8.2cm、脚部高4.0cm、脚端部径8.6cmを測る。黄灰色で、杯部及び脚部外面は横ナデを施す。脚内面は、筒部がヘラ削り、脚端部が、横ナデと指頭による押圧で仕上げる。13は、脚部を欠く。オレンジ色で、口径14.9cm、残存高6.1cmを測る。口縁部は短く屈曲し直立する。体部外面、および口縁部内面は横ナデが認められる。見込みには放射状の暗文が認められる。14は、復元口径15.0cm、脚端部径8.1cm、器高10.9cmで、黄灰色を呈す。杯部外面、脚端部は横ナデ、杯部と脚部の接合部は指頭によるナデ付け、脚部外面は指頭による押圧を行う。また、脚部内面はシボリ目と指頭による指圧が認められる。15は、杯部に段を持つもので、口縁部は端反りする。また、杯部と脚部の境がより明確に区別される。復元口径17.4cm、脚端部径9.1cm、器高10.8cmを測る。オレ

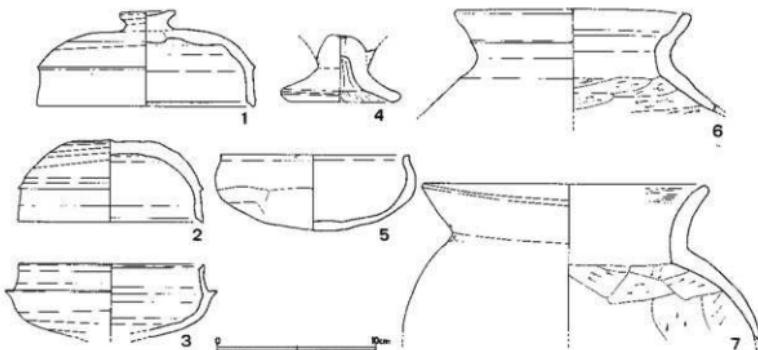


第10図 I区 SI02出土遺物実測図

ンジ色で口縁外面には横ナデ、杯部外面の段付近には細かい刷毛目が認められる。杯部内面には放射状の暗文が施されている。脚部は外面が横ナデ、内面には指頭による押圧が認められる。また筒部には、しづり目が認められる。

壺甌類は9点(第9図1~9)図示した。壺1・2は、直口の口縁部をもつもので、頸部は口縁に比して縮まる。胎土はいずれも坏及び高坏と共通するオレンジ色の細かい粒子の粘土を利用している。1は、復元口径8.2cm、器高13.1cm、頸部径5.5cmを測る小形の土器である。胴部は、その最大径が11.7cmで1/2より下に来る。底部は丸く安定が悪い。器面は、風化が著しく調整が不明なところが多いが、口縁部内面には横ナデが認められる。2は、口径9.3cm、頸部径5.7cm、胴部最大径17.0cmの算盤玉状の胴部を持つ土器である。残存高は11.9cmである。胴部と口縁部は別々に成形されており、後で胴部に口縁部を差し込んでいる。胴部上半部は輪積みで成形されており粘土紐の段が明確に残り、その部分には指頭による押圧が認められる。また、その下部はヘラ削りの後横ナデが行われるなど丁寧に仕上げられている。このことからこの土器は3段階以上に分けて成形されたことが分る。口縁外面は横ナデ、胴部外面は刷毛目調整の後横ナデを施す。頸部の内面には7条の横ナデを施す。3は口径10.2cm、頸部径8.4cm、胴部最大径12.9cmの赤橙色の壺である。口縁部内外面は横ナデを施す。胴部内面のヘラ削りは荒く、深い。厚めの土器で、砂粒を多く含んでいる。

甌は「く」の字口縁の4・6・7・8と複合口縁状の段をもつ5・9がある。いずれも砂粒を多く含み、口縁部から頸部の内外面は横ナデを行っている。また、7を除いて胴部外面は刷毛目、内面はヘラ削りを行っている。4は、復元口径18.3cm、頸部径14.5cmの茶褐色の土器である。口縁端部は丸く納める。5は、復元口径18.0cm、復元頸部径10.0cmの茶褐色の土器である。口縁端部は平たく仕上げる。6は、復元口径17.3cm、復元頸部径14.0cmの黄灰色の土器である。黒班がある。口縁はその半ばでやや膨らみ、端部は平らであるが外側にアクセントを持つ。7は、復元口径14.5cm、復元頸部径12.6cmのピンクがかった茶褐色の土器である。胴部最大径は、中央より下にあるものと思われ、16.5cmを測る。胴部外面上部にはタタキ目が認められ、一部にへら書きの文様が描かれている。下部には刷毛目が認められる。頸部内面には指頭による押圧が認められる。口縁端部は尖り気味ながら丸



第11図 I区 SI 03出土遺物実測図

く仕上げている。8は、復元口径13.9cm、復元頸部径12.2cm、ピンクがかった茶灰色の土器である。復元胴部最大径は17.4cmで胴部の約1/2にあるものと思われる。口縁端部は尖り気味に丸く仕上げる。9は、復元口径14.4cm、復元頸部径12.4cmの淡黄灰色の土器である。復元胴部最大径は21.2cmで胴部の下半部に位置するのと思われる。口縁端部は平らに仕上げるが、内側にアクセントを持つ。

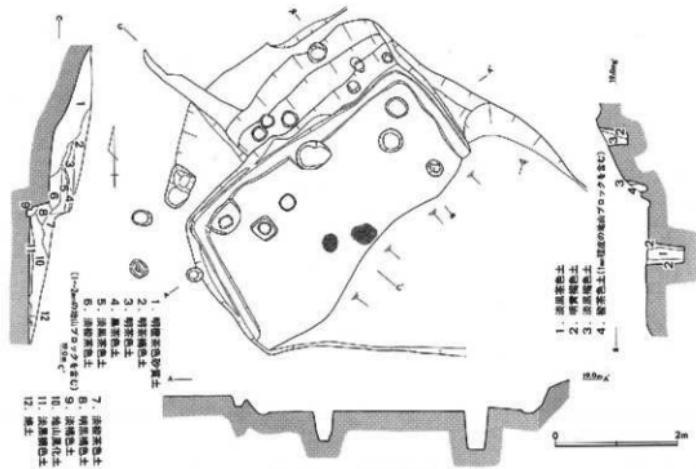
S I 02 (第5図)

S I 02は、方形の竪穴住居跡でS I 03を切って作られている。当初、S I 03単独の住居跡と認識して調査を進めていたため、面としては、東西のコーナー、北東の一片しか確認することが出来なかつた。セクションベルトからの情報を加味すれば、約5m×5.2mの規模であったことが推定される。北東の壁は、床面までの高さ約50cm、延長約5m確認された。壁体溝は幅10cm、長さ2mで確認された。

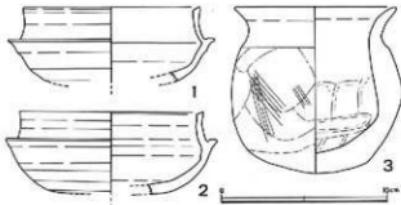
出土遺物（第10図）

出土した遺物は、須恵器（蓋杯）、土師器（杯、高杯、壺、甌）である。須恵器蓋杯1～4の内、蓋（1、2）は、ともに口径が大きく天井の平たいもので、天井の回転ヘラ削りの範囲は狭い。全体から受ける感じもシャープさを欠く。陶邑編年のMT15の時期に対応するものと考えられる。1は、口径14.9cmで、口縁端部を斜めにカットする。明灰色で、焼きはよくない。天井部外面にヘラ記号が認められる。轆轤の回転は右である。2は、口径16.0cmで口縁端部には段が付く。灰色を呈す。杯はやや大型で底部が平たく収まる3と底部が深く丸い作りとなる4とがある。ともに底部の回転ヘラ削りの範囲は狭い。1は、口径11.7cm、受け部径13.8cmで、口縁端部を丸く仕上げる。明灰色で焼きは軟らかい。轆轤は左回転である。2は、口径11.0cm、受け部径13.2cmで口縁端部には段を持つ。灰色で、焼成は良好である。轆轤は右回転である。

土師器杯、高杯（5、6）は、基本的に胎土が良く選定されていることや作り方においてS I 01と同じである。1は、口径12.3cm、器高5.4cmの深い作りである。肌色で見込みには刷毛目の痕跡が残る。（7、8、9）は、いずれも「く」の字口縁で外反しながら立ち上がる。胎土は明確に杯、高杯



第12図 S I 04実測図

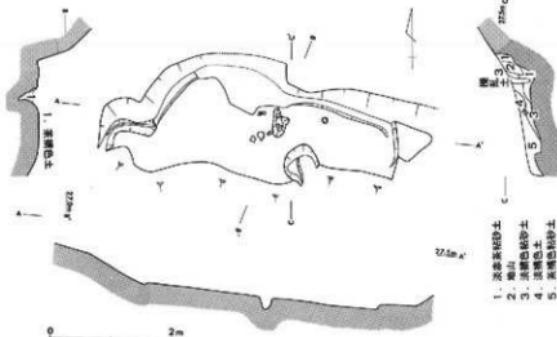


第13図 I区 SI04出土遺物実測図

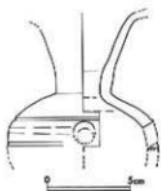
とは異なる。頸部から胴部にかけての内面は荒く深いヘラ削りを行い、調整不明の7を除いて口縁内外面は横ナデを施す。7は、淡黄灰色で口径16.2cmを測る。8は、黄褐色で口径15.7cmを測る。9は、明赤褐色で口径12.7cm、頸部径10.7cmを測る。胴部最大径は17.9cmではほぼ真ん中辺りに位置するものと考えられる。壺10は、赤褐色で多量の砂粒を含む。ほぼ完形品である。「く」の字口縁であるが、その口はあまり開かない。口縁内外面には横ナデを施す。胴部外面の一部には刷毛目が認められる。頸部内面には指頭による押圧が、胴部内面には荒いヘラ削りが施されている。底部には指頭による押圧が認められる。分厚い作りで、口径13.7cm、器高14.7cmを測る。胴部最大径は15.7cmで中央よりやや下に位置する。下ふくれの土器である。

S I 03 (第5図)

S I 03は、床面で約6.4m × 5.4mの規模を持つ長方形の竪穴住居跡である。壁際には幅20cm～30cm、深さ15cm～20cmの壁体溝が四隅に巡る。南西側の壁体溝のはば中央から、壁体溝に直交するように、この住居跡の中心に向けて幅10cm～20cm、長さ1.8mの溝が掘られている。床面には4つの



第14図 I区 SI05実測図



第15図
I区 SI05出土遺物実測図

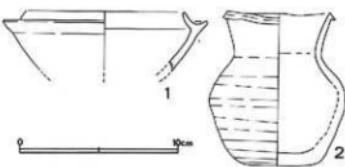
主柱穴が認められ、その直径はそれぞれ40cm～50cm、深さ60cm～70cmであった。また、建物の中央には周囲が焼けた直径30cm、深さ16cmの4中央ピットが検出された。住居の壁は南東部で確認されたが、よく残ったところで70cmであった。

出土遺物 (第11図)

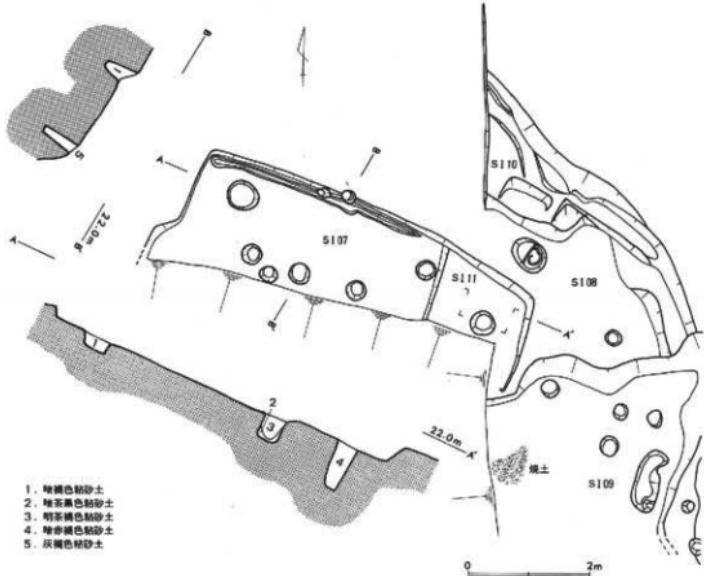
S I 03からは、須恵器（蓋・蓋環）、土師器（高环、环、甕）が出土した。須恵器は概ね陶邑編年T K23、47期の所産と考えられる。

蓋1は、口径13.6cm、器高5.9cmで有蓋高环の蓋と考えられる。壁体溝から出土した。天井部には、径3.4cmの中央が窪むつみが付く。厚手の土器で口縁端部には段が認められる。灰黄色で、天井部外面の回転ヘラ削りの範囲は狭い。天井部内面には不整ナデが認められる。轆轤の回転は、右である。2は、口径11.6cmの蓋环蓋で口縁端部には段を有す。やや厚い作り

である。暗灰色で、天井部外面の回転へら削りの範囲は狭く、粗い。縦轍は右回転である。3は、口径11.6cm、受け部径13.7cmの壺である。壁体溝から出土した。底部の回転へら削りの範囲はやや広い。薄い作りである。暗灰色で断面はセピア色である。縦轍は右回転である。土師器高壺4、壺5は、きめの細かい粘土を用いる点や、その作りがSI01、02の同じ器種と共通する。4は、低脚をなすもので脚端部径7.6cmを測る。壁体溝から出土した。明黄褐色で脚部内面はへら削りと指頭による押圧が認められる。5は、口径11.7cm、器高4.7cmの口縁端部にアクセントを持つ浅い壺である。壁体溝から出土した。淡黄褐色をなす。口縁内外面は横ナデ、体部から底部にかけては横方向のへら削りが認められる。底部内面にはへら磨きを施す。6、7は壺である。6は、口径14.7cmで、口縁内外面に段を持ち、複合口縁の名残りをとどめる土器である。淡黄灰色で、口縁及び頸部内外面は横ナデ、胴部外表面は縦ハケの後横ナデを施す。胴部は横削りを行う。7は、口径14.9cmで「く」の字口縁を持つ土器である。壁体溝から出土した。淡黄灰色を呈す。口縁から頸部にかけての外表面は、横ナデ、口縁内面は横ハケを施し、頸部以下は鋭く削る。

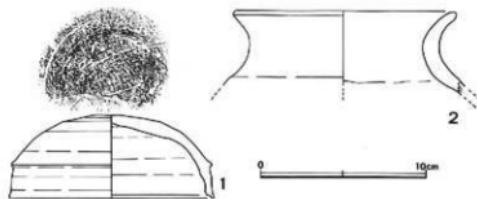


第16図 I区SI06出土遺物実測図



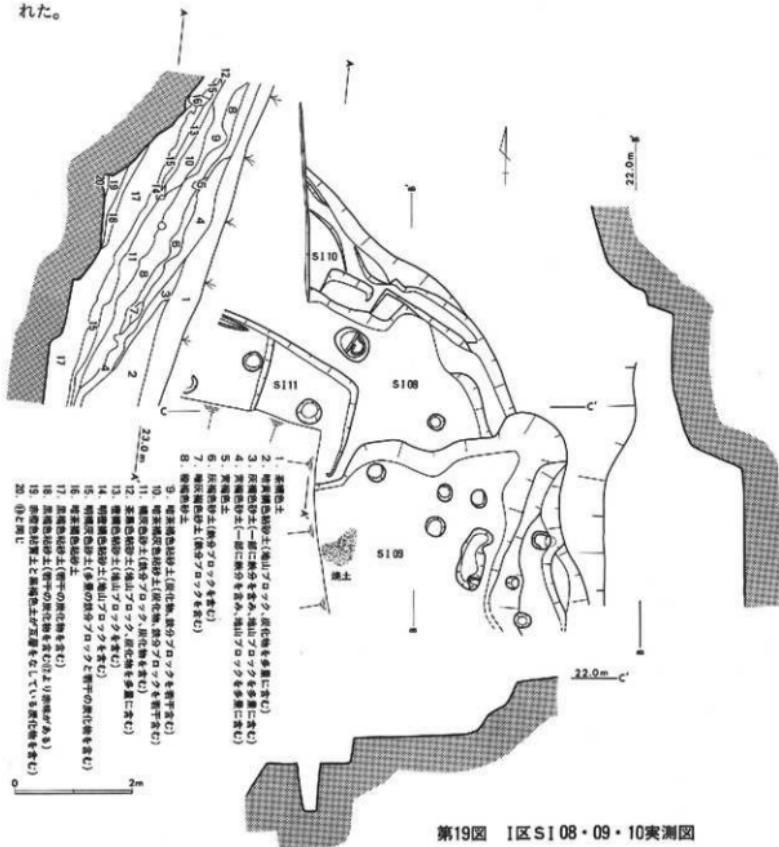
第17図 I区SI07、11実測図

S I 04 (第12図)



第18図 I区 S I 07出土物実測図

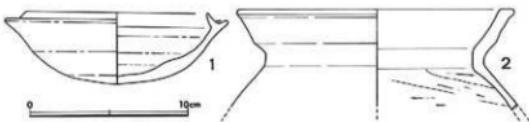
て2穴確認された。1つは、円形で径40cm、深さ60cmで、いま1つは、深さが49cmで2段になっており、上が四角で1辺16cm、下が円形で8cmであった。住居跡の中央付近には2カ所で焼土面が確認された。



第19図 I区 S I 08・09・10実測図

出土遺物（第13図）

1、2は須恵器蓋坏の蓋である。いずれも、薄い作りでシャープに仕上げてある。1は復元口径10.6cm、受け部径12.4cmで胎土、焼

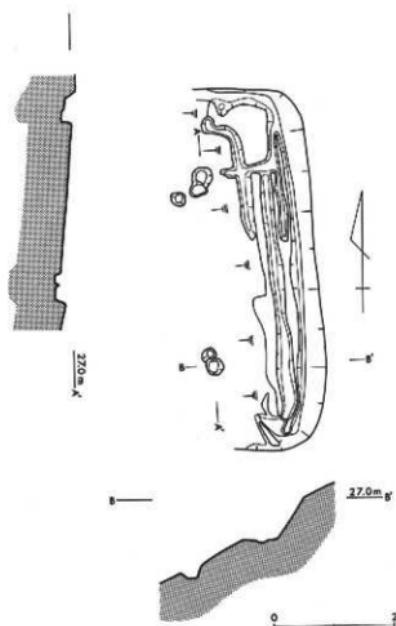


第20図 I区SI08出土遺物実測図

成共に良好である。灰色である。底部のヘラ削りの範囲はやや広い。口縁端部は肥厚し、段を持つ。2は、復出土元口径11.0cm、受け部径12.7cmの青灰色の土器である。受け部外面にはアクセントを持つ。口縁端部には段を有し、肥厚させる。轆轤の回転は右である。3は、復元口径9.6cm、器高9.9cmの厚い作りの土師器である。黄褐色で胎土には砂粒が多く含む。ピット内から出土した。頸部外面から胴部内面にかけては横ナデを施す。胴部外面には所々に縦ハケが認められる。

S I 05 (第14図)

S I 01の北上方、標高27m付近に作られている。方形の住居跡と考えられる。南側が既に流失し、北側の一部に後世の搅乱を受けているが、北側の壁に平行して床面で長さ約3.4m、西側の壁に平行して床面で長さ約11.5m残存していた。壁高は、残りの良いところで約57cm確認できた。壁に沿った床面に幅約15cmの壁対抗が巡る。ピットは1穴確認されたが主柱穴と考えられるものは確認されなかった。



第21図 I区SI12実測図

出土遺物（第15図）

須恵器甌が出土した。口縁部及び胴部下半を欠失する。床面から出土した。頸部上部の径6.4cm、頸部高4.3cm、くびれ部径3.2cmを測る。胴部最大形は9.2cmで胴部には2条の沈線が巡る。孔は、径1.3cmで上方から穿たれている。灰色で胎土は緻密である。頸部内面にはシボリ目が認められ、その他は回転ナデを施す。

S I 06 (第32図)

S I 01の東上方標高約31m前後に作られた住居跡でS B08によって切られているおり、

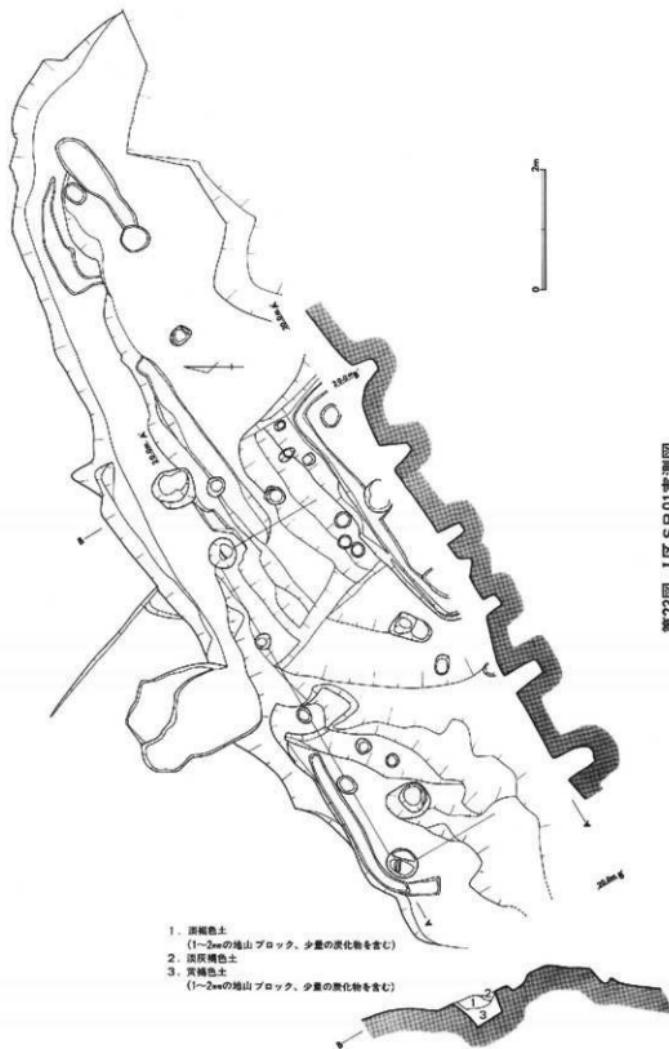


第22図 I区SI12出土遺物実測図

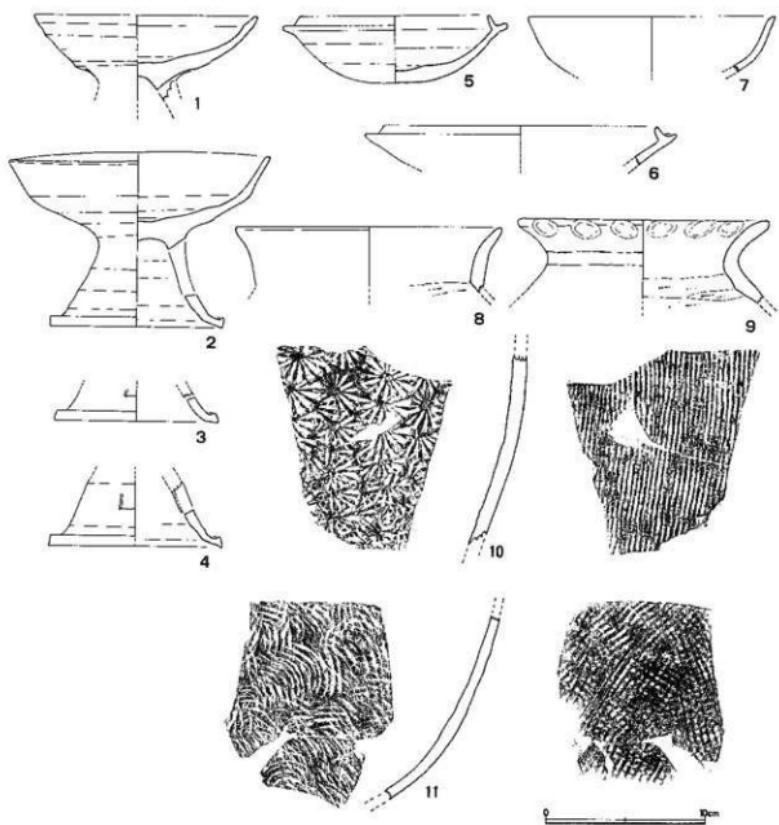
北東隅のごく一部しか残っていない。残存部分は北の壁際の床面で約3.2m、東の壁際で約1.9mである。東の壁際には幅約35cmの壁体溝が掘られている。ピットは3穴確認されたが主柱穴と考えられるものは確認されなかった。

出土遺物（第16図）

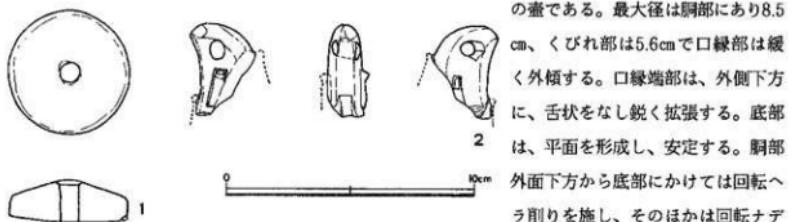
須恵器蓋と小形の壺が出土した。1は、復元口径10.0cmの壺である。受け部の復元径は7.8cmで、残存部の調整は内外面とも回転ナデである。灰黄色を呈す。2は、灰色で復元口径6.5cm、器高9.5cm



第23回 1区SB01実測図



第24図 I区 SB01出土遺物実測図
(1)(土器)



第25図 I区 SB01出土遺物実測図(2) (石製品)

S 107 (第17図)

S 101の北方で確認された住居跡で標高約22mの緩傾斜地に立地している。方形の住居址で、隣のS 111を切って作られている。遺構検出面が分かりにくく、住居跡のプランを検出できた時には結果的に床面から約16cmしか壁が残っていなかった。また、谷側にあたる南半分は既に流失していた。完

全に残っていた北側の辺は床面で長さ4.25mであったが、東側では約1.3mしか残っていなかった。北の壁に沿って長さ3.7m、幅約22cmの壁体溝が床面から検出された。ピットは6穴確認されたが主柱穴と考えられる穴は南にある2穴で、西の穴は、径34cm、深さ71cm、東の穴は、径35cm、深さ71cmであった。中心での柱間寸法は1.8mと認められた。

出土遺物（第18図）

1は、須恵器蓋杯の蓋である。陶邑編年のTK23、47期に併行するものと考えられる。灰色で復元口径12.3cmを測る。やや厚手の土器で、口縁部は短く、端部には段を持つ。天井部外面の回転ヘラ削りの範囲はやや狭い。天井部内面の中央には回転ナデが認められない。輪轆は左回転である。2は、土師器の壺である。茶褐色で胎土には砂粒を多く含む。頸部から口縁部にかけての内外面には横ナデを施し、胴部内面にはヘラ削りを行う。

S I 0 8 (第19図)

S I 11と重複する。切り合い関係は良く把握できなかっただが、S I 08の床面を検出してからS I 11のプランを確認しており、S I 08が新しいものと考えている。不整形で、或いは加工段であった可能性もある。

出土遺物（第20図）

1は、須恵器蓋杯の杯である。口径11.4cm、受け部径14.0cmである。淡灰褐色で砂粒を若干含む。底部外面はヘラ起こしのままで、その他は回転ナデで仕上げる。2は、土師器の壺で口径17.3cmを測る。オレンジ色で口縁部は複合口縁状をなす。胴部内面はヘラ削り、その他は横ナデを施す。

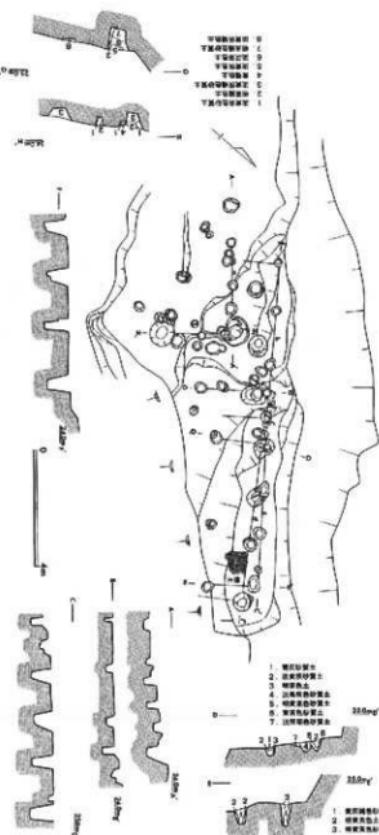
S I 0 9 (第19図)

S I 09を切っている。北東に後世の搅乱を受けているが、1辺2.6mの方形の住居跡と考えられる。残存する壁高は約40cmである。南西側床面には焼土面がある。遺物は検出されなかった。

S I 1 0 (第19図)

S I 08の北側で検出された住居跡である。西側は検出されなかったが、残存部分は弧状を描いており、或いは円形の住居跡であった可能性もある。壁体溝、柱穴、遺物とも確認されなかった。

S I 1 1 (第17図)



第26図 I区SB04実測図

S I 11は、S I 07によって切られている。方形の住居跡と考えられる。このため、北東の隅しか残存していない。S I 07と同じく、プランを検出できた時には結果として約21cmしか壁が残っていなかった。壁体溝は認められなかった。ピットは1穴確認したが、主柱穴となりうるか否かは明らかでない。遺物は検出されなかった。

第27図 I区SB04出土遺物実測図

S I 12 (第21図)

S I 01の東側上方で検出した方形住居跡で標高21mの地点に立地する。谷側にあたる西はほとんど流失しており、東側の壁際が辛うじて残っている。東側の壁は一応残存しており、この壁に沿った床面での長さは約5.6mである。壁体溝は3本確認されており、複数回の建て替えが行われていたことが理解される。主柱穴も東側で、床面が流出した斜面から、南北に2穴ずつ重複して4穴検出され、この建物の建て替えを裏付けている。北側の柱穴は、2穴確認され径35cm、深さ27cm、もう一方は、径25cm、深さ23cmであった。南側の柱穴も2穴あり、一方は径35cm、深さ29cmでもう一方は、径25cm、深さ20cmであった。柱間寸法は、それぞれ3.15mと2.7mであった。

出土遺物 (第22図)

須恵器蓋環の环が出土した。床面からの出土である。淡灰色で、口径11.3cm、受け部径13.1cmを測る。陶邑編年のTK23、47期に併行するものと考えられる。口縁端部は、外側に肥厚し段を持つ。底部の回転ヘラ削りの範囲はやや狭い。底部内面中央にはナデが及んでおらず、不整ナデを行う。轆轤の回転方向は左である。

S B 0 1 (第23図)

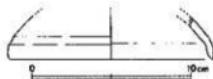
S I 04の北西にある掘立柱建物跡である。概ね、標高20m辺りに位置している。建物は、丘陵斜面を大きく切りとて加工段を造成し、この段によって形成された平坦面に建てられていたものと考えられる。

加工段は、山側で長さ15.6m、谷側で長さ9m幅は広いところで3.25mある大規模なものである。壁の高さは、高いところで約76cmある。この壁に沿って、西側に於いては柱穴を閉むように幅25cm、延長約2.2mの溝が鍵形に存在する。この加工段は数次に渡って手を加えられているらしく内側にも浅い段の痕跡が認められる。このうち、南内側の段の明確のものは長さ9m確認できるが、西側では後世の攪乱によって欠失している。壁の高さは、約15cmでこの壁に沿って長さ3.7m、幅35cm溝が認められた。

柱穴は、5穴がほぼ一直線に並んでいることから、桁行4間の建物と推定される。規模は、桁行き6.3mである。柱間寸法は、西から1.6m、1.4m、1.4m、1.6mである。このように、両側が広いことから、或いは庇の付く建物であった可能性も考慮される。柱穴は直径30cm~50cmであるが、両側の2穴に比べて、内側の3穴の径が小さいことが注意される。桁行きの主軸はN-58°-Eである。

出土遺物 (第24図〈土器〉、25図〈石製品〉)

1~4は、須恵器高环である。いずれも、脚部に三角形の2方透かし一段を開けている。脚端部は外面上方に尖り気味に肥厚する。接地面は若干のアクセントを持つ。1は、復元口径13.9cmで脚部を欠く。床面からの出土である。2は、復元口径16.2cm、復元脚部径10.7cm、器高10.8cmを測る。3、4は、受け部を欠く。3は、復元脚部径10.1cm、4は、復元脚部径10.8cmを測る。5は、口径6.7



cm、受け部径14cmの坏である。底部はヘラ起こしの後、ナデでこの痕跡を消す。6は、高坏の坏部か。内外面ともに回転ナデを施す。7は、内外面ともに回転ナデを施す。8、9は、土師器の壺である。8は、復元口径16.5cmで口縁部内外面は横ナデ、頸部内面以下はヘラ削りを行う。9は、復元口径15.6cmを測る。口縁内外面は指頭による押圧、頸部内外面は横ナデを行う。胴部内面はヘラ削りを施す。10、11は、須恵器壺類の胴部破片である。10は、内面に放射状タタキを施す。

25図1は、玄武岩質の紡錘車である。直径4.9cm、中央での厚みは1.6cmである。中央には径0.7cmの孔を穿つ。2は、子持ち勾玉である。緑泥片岩製で、頭部が縦4.8cm程残る。径0.6cmの孔を穿ち、子は、痕跡を含め4個確認できる。子の全容を把握できるものは、長さ1.9cm、幅0.5cm、高さ0.3cmである。

24図9、10、25図2は、南側斜面からの出土であり、直接この遺構に関係しない可能性もある。

S B 0 4 (第26図)

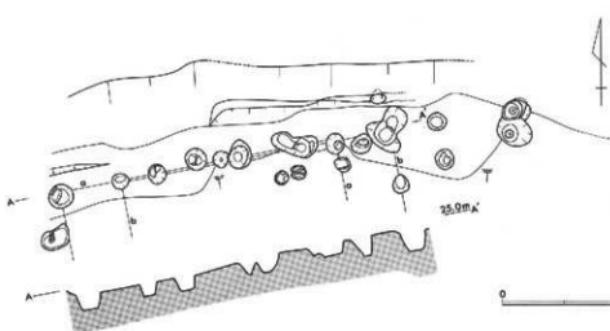
S I 01の北西上方で検出された掘立柱建物跡で、標高24m付近に立地する。後に切られているので全容は把握できないが、延長13m以上、幅4m以上、壁高2.0m～2.3mの加工段を造成し、平坦面に掘立柱建物を建築したものと考えられる。

建物はa～dの4棟確認した。aは、桁行き2間以上、梁間1間以上の建物である。規模は桁行き3m以上、梁間3.4m以上である。柱間寸法は桁行きで西から2.0m、1.7m、梁間で2.9mである。桁行きの主軸は、N-50°-Eである。

bは、桁行き3間の建物と考えられる。規模は桁行きで5.4mである。柱間寸法は、西から1.7m、1.7m、1.7mである。桁行きの主軸は、北に対して54度東に振れている。

cは、桁行き4間、梁間、1間以上の建物である。桁行きで6.8m、梁間が1.8mであった。柱間寸法は、梁間が1.6m桁行きは西から1.8m、1.5m、1.5m、1.7mである。桁行きの主軸は、53度東に振れている。

dは、桁行き3間、梁間1間以上が確認された。規模は桁行き5.8m、梁間が2.0mであった。柱間寸法は梁間が桁行きは西から1.7m、1.7m、1.8mである。桁行きの主軸は、N-55°-Eである。



第28図 I区SB 05実測図

建物の前後関係は柱穴の切り合いかからdをcが切っていることが確認されている。また、aは加工段がc、dのある面から掘り込まれていてことから新しいと考えられる。bについては、よく分からぬが、建物の主軸がdと同じであることが注意される。な

お、dに囲まれる位置には70cm×75cmの焼上面が存在する。

出土遺物（第27図）

須恵器蓋杯蓋である。床面から出土した。灰色を呈し、復元口径12.8cmを測る。内外面とも回転ナデを施す。

SB05（第28図）

SB05は、SB04の東側に存在する建物で標高25m付近に位置する。延長10m

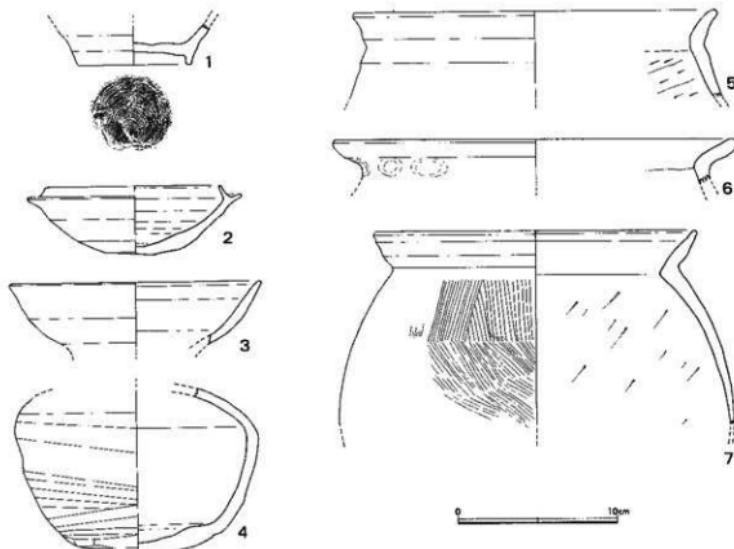
以上、幅1.2m以上、壁高約60cmの加工段を造成し、平坦面に掘建柱建物を建築したものとと考えられる。

建物はa、b 2棟切り合って確認された。aは桁行き3間の建物である。規模は桁行き4.9mである。柱間寸法は西から1.7m、1.4m、1.7mである。桁行きの主軸は、N-76°-Eである。

建物a、bは建て替えられたものと考えられるが、その前後関係を明らかにすることは出来なかつた。いずれにせよ、建物の方位が同じであることから、あまり時期差がない可能性もある。

出土遺物（第29図）

1～4は須恵器、5～7は土師器である。1は高台杯で、底部には回転糸切りが残る。復元高台径は7.0cmである。灰色を呈す。2は、蓋杯の杯である。薄い灰色で、口径10.9cm、受け部径は13.5cmを測る。底部外面にはヘラ削りを、内面には不整ナデを施す。その他は、回転ナデで仕上げる。3は、高杯の杯部の破片と考えられる。灰色で、復元口径15.6cmである。内外面とも回転ナデを施す。4は壺である。頸部以上を欠いている。灰色で、底部の一部を除いて薄い作りである。胴部の最大径はそ



第29図 I区SB05出土遺物実測図

の上部にあり、15.6cmで、胴部外面と内面の全ては回転ナデ、底部外面は回転ヘラ削りで仕上げる。5～7は、いずれも「く」の字口縁で、頸部内面以下胴部はヘラ削りで仕上げる。5は、復元口径23.0cmで、口縁端部には丸味を持たせる。暗褐色で胎土には砂粒を多く含む。口縁内外面と胴部外面は横ナデを施す。6は、復元口径25.2cmで、頸部から口縁部にかけては大きく外反する。口縁端部は丸く仕上げる。

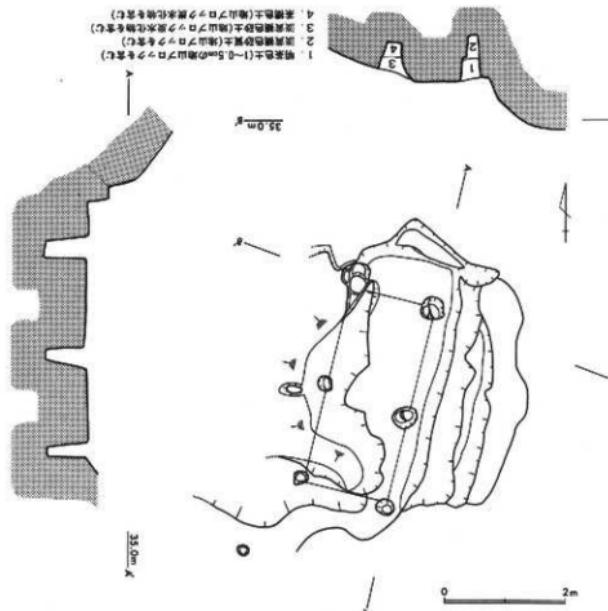
頸部外面には指頭圧痕が残る。茶灰色で胎土には砂粒を多く含む。7は、復元口径20.2cmで、口縁内外面は横ナデで仕上げる。口縁部は、つまみナデを行っており、内面には凹線状のくぼみが認められる。口縁端部は、やや尖り気味に丸く納める。胴部外面は比較的整った幅の広い刷毛目調整を行う。頸部以下内面は丁寧なヘラ削りを施すが、このため頸部内面には明瞭な稜が出来る。赤褐色で胎土には若干の砂粒を含む。

SB 06 (第30図)

S 101の東上方の尾根近くで検出された建物で標高35m付近に立地する。南北4.5m、東西1.5m以上に造成された加工段の平坦面にててらされている。この加工段の西側は既に流失している。

残存する建物は桁行き2間、梁間1間であるが、総柱建物であった可能性もある。建物規模は桁行き3.7m、梁間1.7mである。桁行きの柱間寸法は北から1.7m、1.6mで梁間は1.5mである。桁行きの主軸は、N-14°-Eである。

出土遺物 (第31図)



第30図 1区 SB 06実測図

須恵器高杯である。杯部は一部を除いて失われている。淡灰色で、脚端部径は9.4cmである。透かしは2方向に認められ、一方の透かしは底辺1.4cmの台形をなすものと考えられ、もう一方は棒状に内面にまで貫通する切れ目を入れただけである。杯部内面は仕上げナデを行う。脚部は、内外面ともに回転ナデを

施す。

S B 0 8 (第32図)

S I 06を切って S B 08の加工段が造成されている。標高31m付近に立地する。加工段は延長約 9 m、幅 3 m 以上にわたって造成されているが南側は既に流失している。

検出された掘立柱建物は桁行き 3 間、梁間 2 間である。建物規模は、桁行きが 3.6m、梁間が 2.0m である。柱間寸法は桁行きで 1.1m、1.1m、1.1m で梁間は 1.2m、1.1m である。桁行きの主軸は、N-61°-E である。

出土遺物 (第33図)

1 は、土師質の獸手形土支脚である。2本ある腕の部分、後部にあるつまみの部分及び裾にあたる部分が失われて、ほぼ胴体だけが残っている。芯まで粘土が詰まっている。風化が著しく調整は不明であるが、表面の凹凸が著しく、どのような調整方法を探るにせよ、荒い調整であったことが分かる。黄褐色で、胎土には砂粒を多く含む。2 は、須恵器蓋杯の蓋で、口径 12.2cm、器高 4.4cm を測る。天井部は外面はヘラ起こしのままで、天井部内面は回転ナデの後、仕上げナデを行う。その他は回転ナデで仕上げる。

S B 1 1 (第39図)

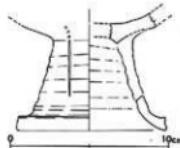
S B 17の南西に S B 17を切って造成されている加工段である。南北に 2 m、東西に 1.5 m だけ残っている。壁高は約 80cm である。建物は検出されなかった。

S B 1 2 (第34図)

S I 01の北上方にある S B 17の東隣で検出された。標高 26m 近りに位置している。長さ 3 m 以上、幅 1.5 m 以上の加工段が造成され、その平坦面に建物が建築されていた。山側にある壁は高いところでは 1 m 以上ある。谷側にあたる南西部は既に流失していた。掘立柱建物は、桁行き 2 間以上、梁間 1 間以上と考えられた。建物規模は、桁行き 2.1m、梁間が 1.45m である。柱間寸法は、桁行きが北西から 0.75m、0.75m、梁間が 1.1m である。桁行きの主軸は、N-111°-E である。

S B 1 3 (第35 図)

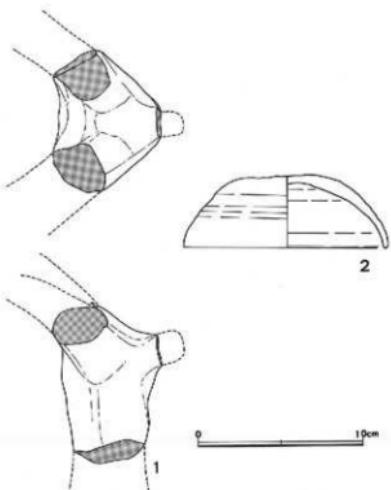
S B 13は、S I 01の北西上方に位置し、標高 30m 近りに立地している。山側の斜面を切り土して南北に加工段を造成し、平坦面を作り出している。北隣には、S B 14が、南隣には、S B 08がある。S



第31図

I区SB 06出土遺物実測図

第32図 I区SB 08、SI 06実測図



第33図 I区SB08出土遺物実測図

行きの主軸は、N-135°-Eである。

bは、梁間1間以上、桁行き4間の建物と考えられる。aから若干谷側にある建物である。柱穴の位置関係から考えて壁際にある溝は、この建物に伴うものと考えられる。建物規模は、梁間が2.1m、桁行きが6.9mである。柱間寸法は、梁間が1.8m、桁行きは、北から1.2m、1.7m、1.4m、1.5mである。柱穴は直径25m~45mで、深さは44cm~59cmであった。桁行きの主軸は、N-138°-Eである。

cは、bからさらに谷側にある建物で、その主軸も、もっと西に振れている。桁行き3間の建物と考えられる。建物の規模は、桁行き4.6cmである。柱間寸法は北から1.3m、1.4m、1.6mである。柱穴は、直径が30cm~40cmで、深さは、21から53cmであった。桁行きの主軸は、N-145°-Eである。

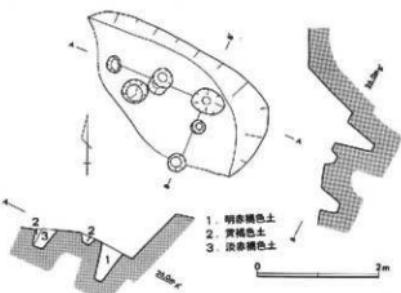
この建物からは、遺物は検出されなかった。

SB14 (第35図)

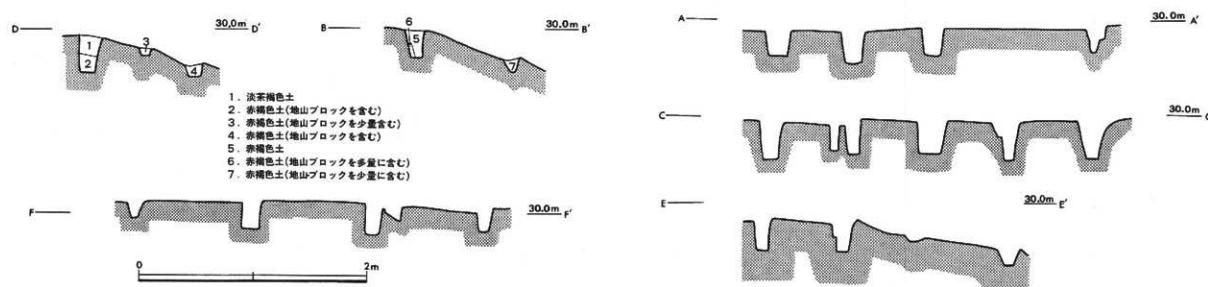
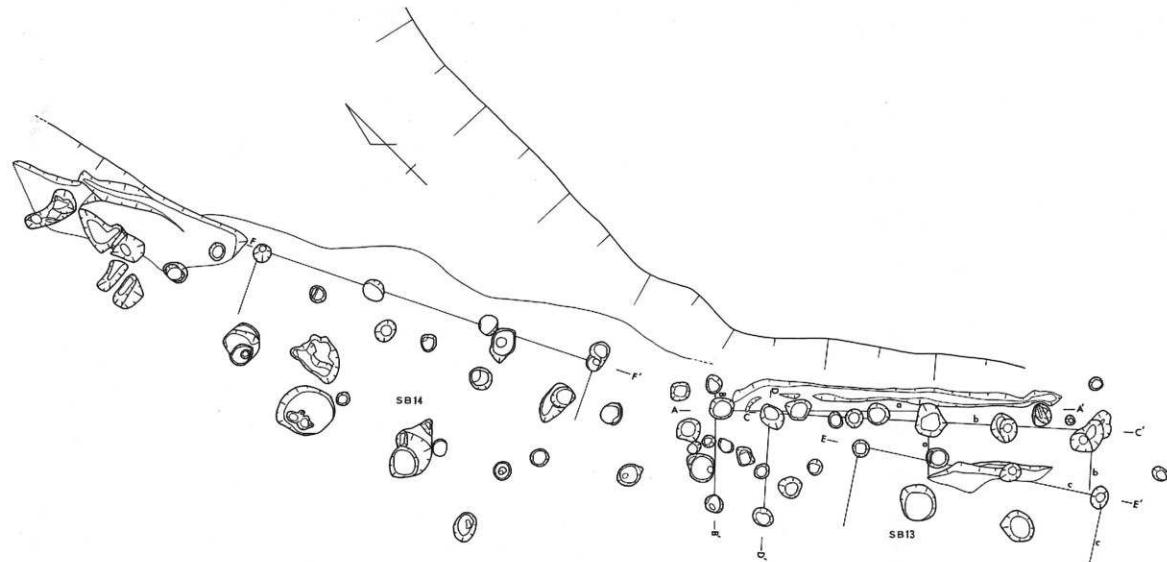
SB14は、SB13の北隣に位置する建物跡である。SB13の平坦面とは同じ面をなす。段の掘り込み面はSB13とは異なり、軸を北に振る。これと同時に壁もだんだん北に向かって高くなる傾向にあり、中央付近では、2mを越える。平坦面は、延長12mに及んでいる。

掘立柱建物は、桁行き4間と考えられる。規模は、桁行き6.5mである。柱間寸法は北から2m、2m、2mである。柱穴は23cmから35cmで深さは33cm~54cmである。桁行きの主軸は、N-153°-Eである。

この建物からは遺物は検出されなかった。



第34図 I区SB12実測図



第35図 I区 SB13・14実測図

S B 15 (第36図)

S B 14の東側に存在する。標高約36m辺りに立地している。丘陵の斜面を切り土して、加工段を造成し、平坦面を作り出している。加工段は、東西に長く造成されている。谷側にあたる西は流失している。残っている平坦面は、南北3.6m、東西1.2mである。加工段の壁高は、約1.2mである。残っている平坦面からは、柱穴、及び遺物は検出されなかった。

S B 16 (第37図)

S B 15の南側に存在する。標高約36m付近に立地している。丘陵の斜面を切り土して、加工段を造成し、「コ」の字形の平坦面を作り出している。段の方向は、S B 15より東に振れている。谷側にあたる北西は流失しているが、壁際には幅30cm、長さ5.2mの溝が巡っている。

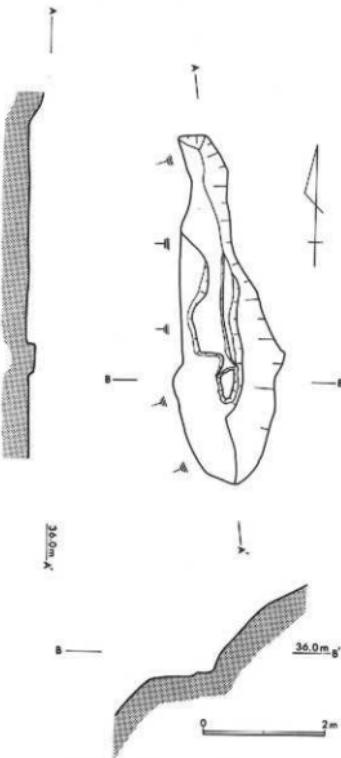
残っている平坦面からは柱穴は確認されなかった。

出土遺物 (第38図)

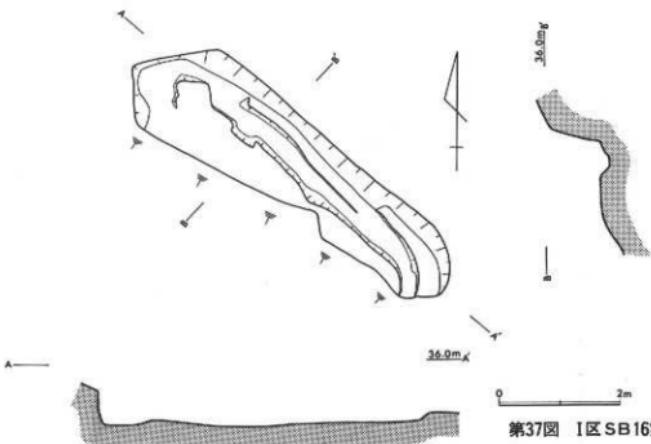
土師器の壺である。口径13.9cm、復元胴部最大径は26cm、残存高26cmを測る。口縁は、いわゆる「く」の字口縁をなすが、所によってその形状が大きく異なっている。胴部最大径の位置は半分より下にあり、下ぶくれの感じを与える。口縁部は、その端部近くをつまみナデしており、先端は尖り気味になる。頸部外面から、口縁部内面にかけては横ナデを行い、頸部内面には指頭圧痕が認められる。胴部内面は、上半部が横方向のヘラ削り、下半部が斜め方向のヘラ削りを施す。胴部外面の調整は不明であるが、下半部には黒斑が認められる。黄褐色で、砂粒を多量に含む。

S B 17 (第39図)

S I 07の北側に位置する建物で、標高約25m付近に立地する。丘陵の南向き斜面を掘削して加工段を造成し、南北6.3m以上、東西5.4m以上の平坦面を作っている。北側にあるこの段の壁は高さ約30cmである。この場所は、遺跡が構成される谷全体を見渡すことの出来る要衝の地である。この平坦面の東、西、南は既に流失しているが、ほぼ完全な形で掘立柱建物跡1棟を検出することが出来た。以下、掘立柱建物跡について述べる。掘立柱建物跡は、東西2間、南北2間の総柱建物で、倉庫跡と考えられる。建物に関係する柱穴は合計16箇所検出しているが、南北隅の柱穴はS B 11によって一部切られている。規模は、東西が5.0m、南北が5.0mである。柱間寸法は、東西が西から1.5m、1.5m、1.5mで南北が北から1.5m、1.5m、1.5mである。この建物の主軸はN - 8° - Eである。一番北の



第36図 I区 SB 15実測図



第37図 I区 SB16実測図

東西列の西から3番目の柱穴の側には、この柱穴に寄り添うように2カ所の柱穴が認められるが、これは或いは添え柱など補修用のものかもしれない。個々の柱穴に就いてみると、直径25cm～80cmまで大小さまざまであるが、外側の柱に比べて束柱が、やや小さいように感じられた。

S B18（第40図）

S B18は、S B16の西側下方に位置する建物で、標高29m付近に位置する。丘陵の



第38図 I区 SB16出土遺物実測図

西向き斜面を掘削して加工段を造成し、北東～南西に長さ m以上、北西～南東に幅 m以上の平坦面を作っている。さらには、この段の北西の内側にはもう1段が掘り込まれており、作り直しが行われたものと考えられた。これら2つの平坦面の谷側にあたる北西側は既に流失している。平坦面には合計6ヶ所の柱穴が存在しているが、明確に建物に復元しうるものは確認することができなかった。

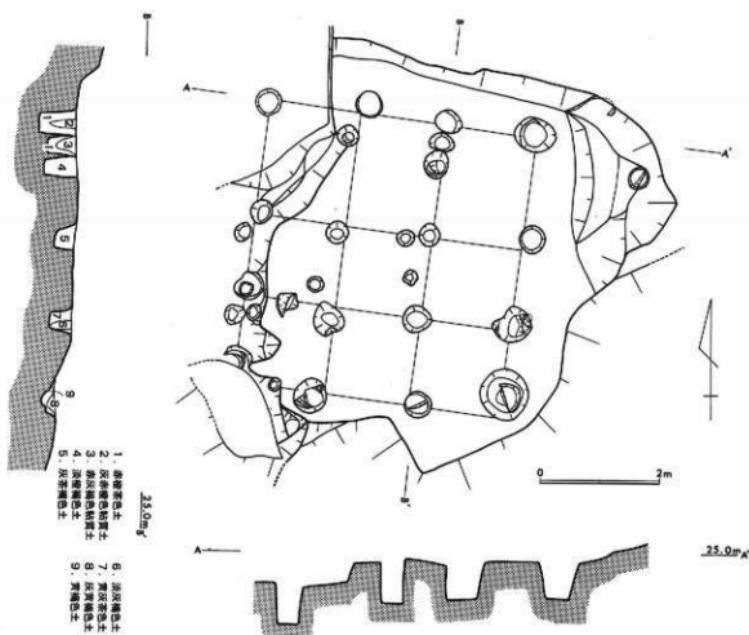
焼土土坑（第41図）

S I03の東側に位置し、標高21m付近に位置する。土坑の縁が赤く焼けており、中からは、炭化物が多量に検出された。特に、底面からは層を成して検出された。径0.9m×1.0mの不整円形で深さは0.53mを測る。図化出来るような遺物は検出されなかった。

1号横穴墓（第42図）

S B04の北側上方に分布する横穴墓である。横穴墓は、標高約35mの尾根近くの南を向いた急斜面に穿たれている。横穴墓の前庭部からは、I区の集落跡の存在する小谷を絶て見渡すことができる。玄室の床面は、標高約26.8mに位置する。こうした尾根近くに分布する横穴墓のあり方は、安来平野の東側の地域に共通する横穴墓造墓のあり方である。群をなして存在することが多いが、この谷では単独で存在する。

調査は、一部開口していた玄門上部から前庭部にむけてセクションベルトを設定して開始した。掘



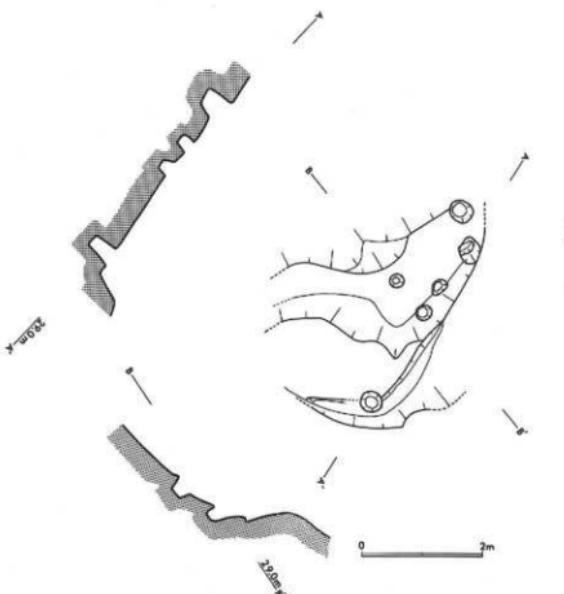
第39図 I区 SB 17実測図

り進めていく内に、前庭部と羨道部の境付近から、鉄刀片や、閉塞か石棺に使われたと考えられた石材が床面から浮いた状態で検出され、この横穴墓が既に盜掘を受けたものである可能性を示唆している。

土層の観察でも、層位は乱れていた。第1層は、花崗岩塊を大量に含む、さくくさくした茶灰色土で明確に2次堆積の状況を示していた。第5層は、黒褐色土で、通常の未盗掘の横穴墓では埋め土の上を覆い被さる状況で検出されることの多い層であるが、ここでは、厚みも均一でなく、途切れることは他と異なる。また、花崗岩塊のブロックを含んでいる点も異常である。第6層、第9層、第10層には、閉塞石か石棺材と考えられる荒島石の石材が混入する。このことから、床面近くまで搅乱を受けていたことが窺える。

前庭部は、主軸をN-147°-Eにとる。前庭部の規模は、奥壁床面で幅3.94m、奥から先端までの距離4.55m以上と非常に大形である。羨道部との境は、前庭部側が一段低くなっている、床面は若干の凹凸があるものの、平たく仕上げている。

羨道部は、奥側で幅1.35m、前庭側で幅0.96m、長さ1.75mを測り、平面形は台形を呈している。天井部は既に失われており、立面形は、知る由もないが側壁は、ほぼ垂直に立ち上がっている。前庭部近くの床面の中央近くには、30cm×39cm、22cm×34cm、12cm×25cmの柱穴状のピット3が重複して存在する。この内、一番奥側の穴は、玄室に向けて傾斜しており、閉塞装置を支える筋交い的なもの



第40図 I区SB18実測図

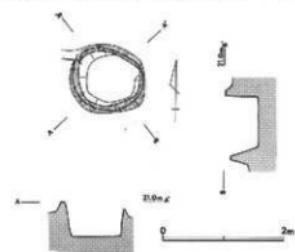
が置かれていた可能性がある。また、玄門部との境には、閉塞装置を受けたと考えられる幅約5cm、長さ45cmと幅約10cm、長さ48cmの浅い溝状の溝みが主軸と直行するように存在する。奥側の床面近くには、長さ50cm、幅20cm、厚さ13cmばかりの直方体の荒島石が存在する。閉塞石の一部と考えられる。この石の上には、赤貝が覆うように堆積しているが、赤貝は床面から浮いた状況にあり、二次的な堆

積と考えられた。このことは、土層の上からも確認され、赤貝は厚さ15cm程度の淡黄褐色砂土に含まれていたが、羨道部床面を覆っていた若干の花崗岩ブロックを含む暗灰色土に被っていた。左奥壁近くからは、須恵器の高台环が出土した。羨道床面は前庭部側に若干傾斜する。

玄門部は、羨道部より段を付け、さらに4cm程高くなっている。玄門の幅は、前庭側で0.8m、玄室側で0.94mを測り、左の玄室側で広がる傾向にある。

側壁の長さは左右でそれぞれ異なっており、右は、約1.15m、左は0.65mである。床面は平になっている。天井は既に失われており、立面形は不明であるが、側壁は直立する。

調査時には、玄門部には土砂が1.5mほど堆積しており、基本的には大量の花崗岩ブロックを含む黄灰色砂土、暗黄褐色砂土の3層が確認された。



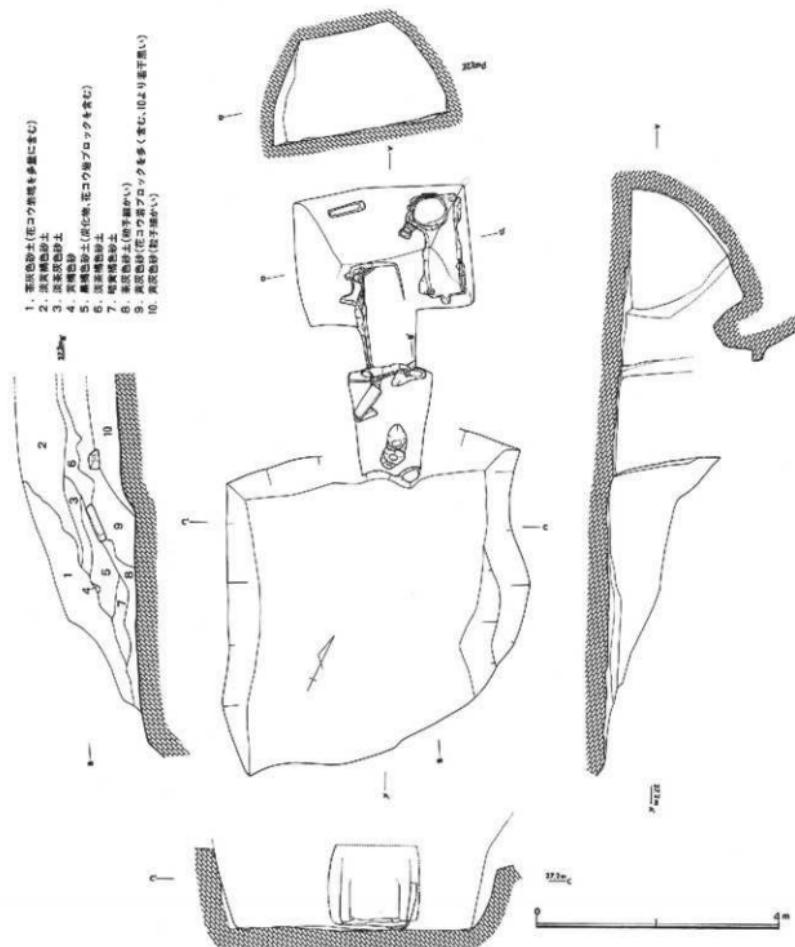
第41図 I区焼土土坑実測図

床面には、玄門の幅いっぱいに赤貝が堆積しており、側壁に沿って左は約0.55m、右は約0.85m認められた。(第43図) 赤貝は、ほぼ床面に密着し、玄室側が薄く、羨道側が厚い状態で検出された。厚みは厚いところで28cm認められた。赤貝は、口の閉じたものが多く目についた。この赤貝の集積の中からは、牛骨、土師器片、須恵器胸部破片が検出された。牛骨は、鳥取大学医学部解剖学第二講座井上貴央教授の鑑定に依れば、「左中足骨」で「埋葬時

は骨端軟骨が残存していたものと考えられる。」とされている。牛骨は、羨道部出土のものを含めて合計3点出土しており、他には踵骨、大腿骨が出土している。牛の全体からするとごく一部の骨しか検出されておらず、解体された後、その内の一部が赤貝と一緒に置かれたことが考えられる。

玄門部の赤貝は、茶褐色土とともに検出されたが、この直上には天井部からの崩落と考えられる径35cm程の花崗岩塊が幾つも存在した。この花崗岩塊の上には前述した暗黄褐色土が覆っていた。

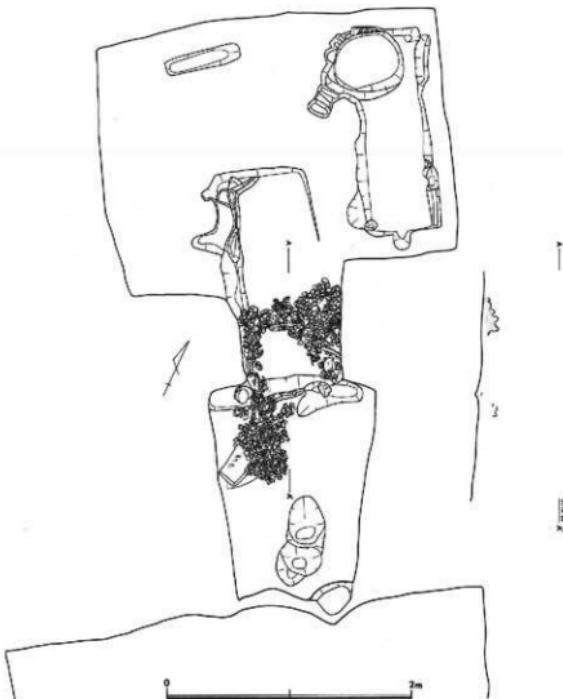
玄門部の赤貝の堆積状況を見ると、羨道寄りに幅50cm、長さ40cmに渡って貝のないところが存在することに気が付く。これと、羨道部の貝の出土状況を重ね合わせて考えると、羨道部の貝が玄門部から掘りとられたものであることに思いが至る。玄門部の残りの赤貝には乱れは認められなかった。



第42図 I区 1号横穴墓実測図

玄室は、奥壁が2.8m、右側壁が1.95m、左側壁が2.03mのいびつな長方形の平面形をなしている。玄門のところで前述したように、玄門の左右の側壁の長さが異なっていることから、前壁は左右が一直線上にはならない。形態は四面の壁と天井部の間に境のない、疑似四注式家形で、平入りである。床面から棟線までの高さは、高いところで1.63mを測る。

床面には、玄門から続く $0.65\text{ m} \times 1.0\text{ m}$ の周囲より5cm程度低い長方形の段がある。また、右側壁に沿っても、 $0.75\text{ m} \times 1.75\text{ m}$ の長方形の窪みがある。後者は、周囲より6cm~7cm低くなってしまっており、奥壁側には鍔で掘いた様な跡のある径65cmの



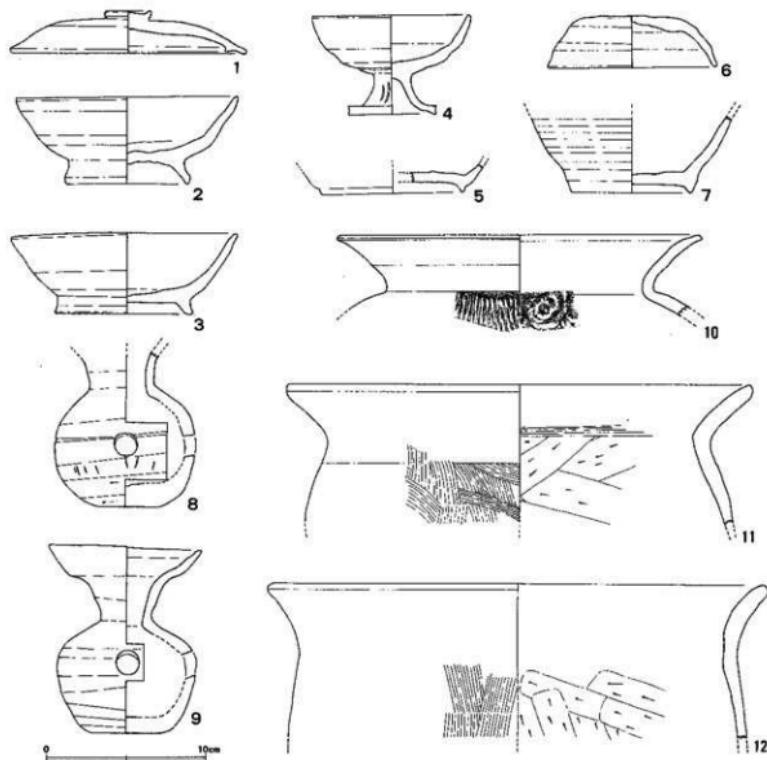
第43図 I区1号横穴墓玄門部赤貝、牛骨、土器出土状況図

凹みとそれにつながる $15\text{ cm} \times 20\text{ cm}$ の鍔の掘き跡状の凹みがある。これは、前庭部で出土した荒島石の石材のことを考慮すると、或いは、盗掘時の石棺の抜き跡とも考えられる。玄室内からは遺物は確認されなかった。

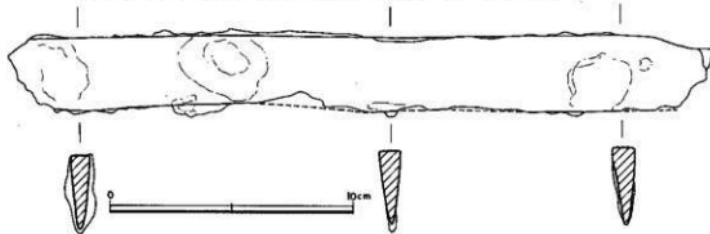
玄室には、調査時に、大量の土砂が詰まっていた。上には玄門から続く厚さ40cm程度の淡黄褐色砂土（花崗岩ブロックを含む）があり、その下には、奥壁の右側を中心に大きな花崗岩塊が集積しており、全面には5cm程の厚みで黄灰色砂土が認められた。いずれも、盗掘より後の堆積のように見られた。

上記したように、この横穴墓は、ある時期に盗掘を受けており、埋葬時の全容をつかむことができなかつたが、わずかに盗掘から逃れることのできた部分で興味深い事実の一端を知ることができた。それは、この横穴墓の葬送儀礼に関わるもので、玄門部に、赤貝や、牛を供獻していたことである。羨道の床面、及び、玄室から一個も赤貝の貝殻が見つかなかったことから、死者を埋葬した後赤貝や、牛を備え、横穴墓の閉塞を行ったことを窺うことができる。

赤貝は、前述したように、口を閉ざしたものが目についたことから、生の状態であった可能性が強い。また、牛骨については、「軟骨骨端」が付いているものがあることから、肉が付いていた可能性



第44図 I区1号横穴墓出土遺物実測図1(2羨道部 11玄門部出土)



第45図 I区1号横穴墓出土遺物実測図2(鐵刀)

もある。

出土遺物(第44図、第45図)

第44図1~10は須恵器である。1は、口径14.7cmの蓋である。前井部から出土した。天井部外面中央には径2.7cmのつまみが付く。つまみは、中が凹む。口縁の内側には短い返りが付くが返りは、口縁の下端線より外に出ない。返りの径は12.0cmである。器高は、つまみまでが2.6cmである。調整は、天井部外面が回転へら削りの後回転ナデ、体部外面から、体部内面にかけては回転ナデを施す。天井部内面は横ナデを行う。灰色を呈し、輪轂の回転は右である。2は、口径13.8cmの高台付きの壺であ

る。羨道部の左奥から出土した。高台は、高く、「ハ」の字形をなし、接地面の径7.5cmを測る。高台の端部外面には0.5cm程度の面ができる。器高は5.45cmである。体部内面から高台内側までは回転ナデを施すが、見込みは、横ナデのみにとどまる。底部の切り放しはヘラ起こしで、その痕跡が残る。青みがかった灰色をしている。轆轤の回転は右である。3は、口径14.1cmの高台付きの壺である。前庭部から出土した。高台は、しっかりしており、接地面は平らな面を作る。高台接地面の外形は8.5cmを測る。器高は5.0cmである。調整は、体部内面から、底部外面にかけては回転ナデを施すが、見込みは一次調整の横ナデにとどまる。底部外面中央には、ヘラ起こしの痕跡が残る。青みがかった淡灰色を呈す。轆轤の回転は右である。4は、口径9.9cm、器高6.1cmの高壺である。復元した脚端部径は5.4cmである。脚端部外面には面を作る。脚部には透かしを意識したと思われる刻み目が認められる。対向する方向にも元来はあったかも知れないが、欠失しているため不明である。調整は、壺部の体部内面から脚部内面にかけて回転ナデを施す。壺部見込みは、一次調整の横ナデにとどめる。灰色をなす。轆轤の回転は右である。5は、高台付きの壺である。口縁部を欠いており口径は不明であるが高台の径は、8.8cmである。高台は低い。器表面は全面に渡って摩滅している。淡灰色を呈す。轆轤の回転は右である。6は、口径10.6cmの蓋である。前庭部から出土した。蓋壺の蓋というより、短頸壺の蓋かと考えられる。器高3.2cmを測る。調整は、体部の内外面が回転ナデで、天井部内面は仕上げナデを施す。天井部外面にはヘラ起こし痕が残る。暗灰色で轆轤の回転は右である。7は、高台付きの壺である。復元高台7.5cmを測る。前庭部から出土した。高台と底部の境が不明瞭である。底部内面から底部外面にかけては回転ナデを施す。このうち体部外面のナデ幅は狭い。見込みには不定方向のナデが認められ、底部に外面には回転糸切りが痕が残る。淡灰色で、轆轤の回転は右である。8、9は、甕である。8は、口縁部を欠失する。胴部最大径は8.7cmでくびれ部の径は4.0cmである。前庭部から出土した。胴部中央には孔が開いている。この孔の上下には沈線とヘラ状工具による刻み目がある。沈線と刻み目は正面にしか施文されておらず、裏面は省略されている。また、刻み目はその間隔がまちまちで、並びも一様でない。外面の調整は、頸部から刻み目までは回転ナデ、以下底部までは回転ヘラ削りを施す。このため、底部は平たい。内面は回転ナデを施す。色調は灰色で、轆轤の回転は右である。9は、復元口径9.4cm、器高11.6cmを測る小形の甕である。前庭部から出土した。くびれ部の径3.2cm、胴部最大径は8.6cmである。胴部の中央よりやや上には孔が穿たれている。表面を飾る文様はない。外面の調整は口縁部から胴部下半に至るまで回転ナデ、以下底部までは回転ヘラ削りを行う。このため、底部は平たい。内面は回転ナデを行う。色調は灰色で、右半分には黒味がかった釉がかかる。9は、復元口径22.6cmの甕である。前庭部から出土した。「く」の字口縁で、単純に外反する。外面の調整は口縁部が回転ナデ、胴部が平行タタキである。内面は口縁部から頸部にかけて回転ナデ、胴部は同心円タタキを施す。灰色で轆轤の回転は右である。

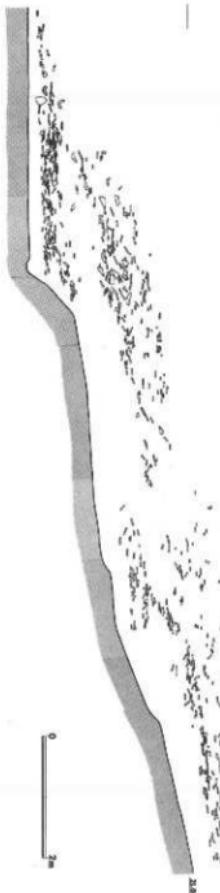
第44図11、12は、土師器の甕である。11は、玄門部の赤貝の中から出土した。復元口径28.6cmの「く」の字口縁をなす。黄茶色で、胎土には小さな砂粒を多く含む。調整は外面は口縁部が横ナデ、頸部から胴部にかけてはハケ目を施す。内面は、口縁部から頸部にかけては横ハケの後横ナデ、胴部はヘラ削りを施す。焼成は良好である。12は、前庭部から出土した。復元口径30.6cmを測る。口縁の外反が少ないので、或いは瓶になる可能性もある。黄茶色で、胎土には小さな砂粒を多く含んでいる。器表面はかなり磨滅しているが、調整は口縁部内外面に横ナデを行っている。胴部外面にはハケ目、

内面にはヘラ削りを行う。焼成は良好である。

第45図は、直刀の破片である。前庭部の奥側のかなり上から出土した。盗掘時に搔き出されたものと考えられる。残存長29.0cm、身元幅3.0cm、最大厚0.9cmを測る。先端部及び茎部は、折損して残っていない。

1号横穴墓から出土した遺物の内、確実に1号横穴墓の時期を表すものは、羨道部の奥から出土した須恵器の杯（第44図2）と赤貝の中から出土した土師器壺（第44図11）である。このうち、土師器についてはあまり形式変化が追えないもので、須恵器について考えてみたい。

第44図2は、1、3、9と同型式であり、これらはこの横穴墓の副葬品と考えて良さそうである。大谷編年の出雲6B期に該当する。



第46図 I区 L-2区土器出土状況図

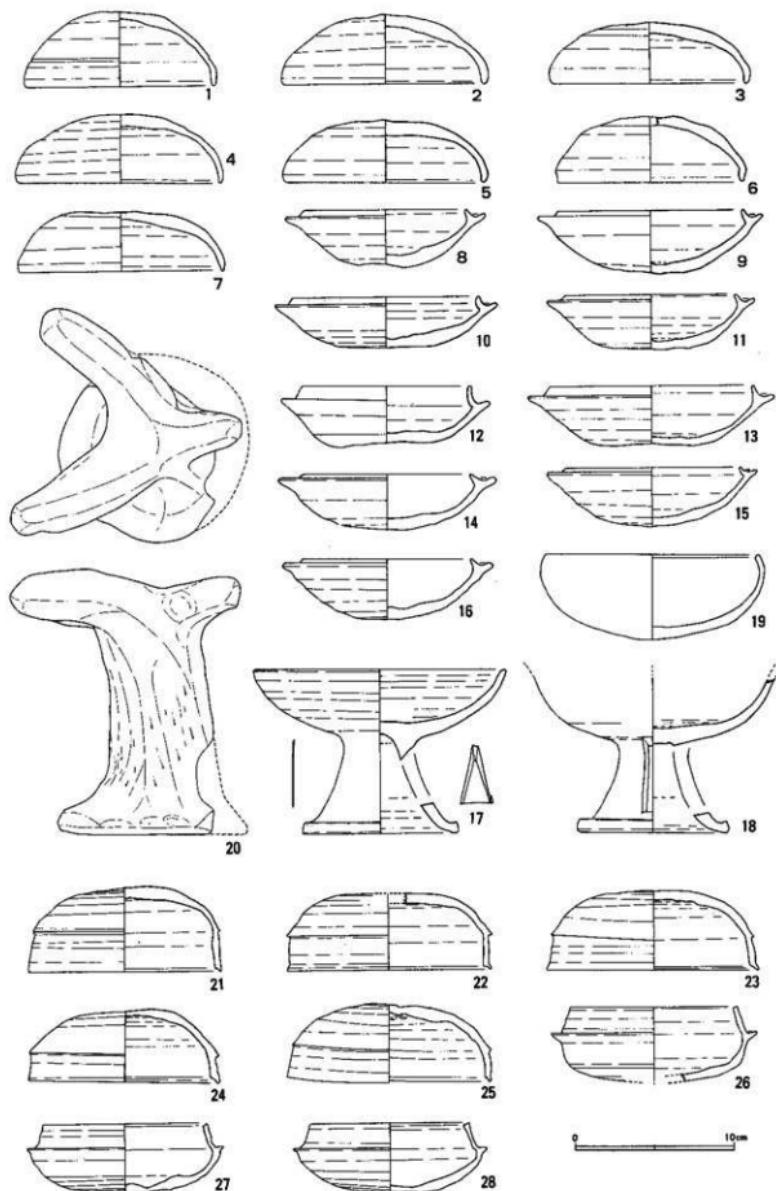
遺構に伴わない遺物（第47図、第48図、第49図）

ここに記載する遺物は、主に谷の下部から出土したものである。第46図は、土器の垂直分布図である。斜面の上方から斜めに一定の厚みをもって土器の堆積している様子が伺える。この上を覆っている土器群を上層として取り上げた。中央右寄りに、上層から下に一群の土器が存在する。これを、下層として取り上げた。また、左端の落ち込みは、S I 01で下層に相当するものである。土層は、谷の上部から下部にかけて流れ込んでいる様子が伺えたことから、土砂崩れ等によって、谷上部の遺構から流れ込んだ可能性の強いものであったことが分かる。上層の遺物も、大半が、こうした流れ込みの所産であったことと思われる。

図示した遺物は、上層では須恵器が多いが、土師器も壺類の破片を中心に多量に出土している。

以下、出土した土器について記述する。

第47図1～20は上層出土の遺物である。1～7は、須恵器蓋杯の蓋である。1は、口径12.1cm、器高4.7cmを測る。口縁部と体部の境の外面には一条の沈線が巡る。全体に丸い作りである。天井部外面にはヘラ起こし痕が残る。調整は、外面が、体部から口縁部にかけて回転ナデ、内面が、口縁部から体部にかけて回転ナデ、天井部には不整方向ナデを施す。淡灰色で、焼成は良好である。轆轤の回転は右である。2は、口径12.7cm、最大径13.0cm、器高4.3cmを測る土器である。全体に低い作りである。天井部外面はヘラ起こしを行っている。調整は外面が体部から口縁部にかけて回転ナデが認められる。器表面の風化がかなり進んでいる。色調は淡灰色で、轆轤の回転は右である。3は、口径12.2cm、最大径12.6cm、器高3.8cmを測る土器である。全体



第47図 I区包含層出土遺物実測図(1)(1~20上層出土 21~28下層出土 19~20土師器)

に低い作りをなす。天井部外面にはヘラ起こし痕が残る。調整は体部外面から天井部内面にかけて回転ナデを施す。色調は淡灰色で轆轤の回転は右である。4は、口径12.7cm、最大径13.0cm、器高4.3cmを測る土器である。天井部外面にはヘラ起こし痕が残る。調整は、体部外面から体部内面にかけて回転ナデを施す。天井部内面中央には不整ナデが認められる。色調は淡灰色で、轆轤の回転は右である。5は、口径12.4cm、最大径12.9cm、器高3.9cmを測る。低い作りである。天井部外面にはヘラ起こし痕が残る。調整は体部外面から天井部内面にかけて回転ナデを施す。淡灰色で、轆轤の回転は右である。6は、口径11.7cm、最大径12.0cm、器高4.1cmを測る土器で、短い口縁部を内曲させる。このため、口縁部と体部の境には段ができる。天井部外面にはヘラ起こし痕が残る。調整は、体部外面から天井部内面にかけては回転ナデを施す。天井部中央内面には不整ナデが認められる。天井部外面には、焼成前に刻まれた「×」印のヘラ記号が存在する。色調は淡灰色で、轆轤の回転は右である。7は、口径12.8cm、最大径13.0cm、器高3.7cmを測る土器である。天井部外面にはヘラ起こし痕が認められるも、ナデによってこの痕跡を消そうとしている。調整は、体部外面から天井部内面にかけて回転ナデを施す。天井部内面中央には不整ナデが認められる。淡灰色で、轆轤の回転は右である。

第47図8~16は、蓋杯の杯である。8は、口径10.2cm受け部径12.6cm、器高3.6cmの土器である。底部外面にはヘラ起こし痕が残る。調整は、体部外面から体部内面にかけて回転ナデを施す。見込みの中央には不整ナデが認められる。底部外面には、焼成以前に刻まれた「×」印のヘラ記号が認められる。色調は淡灰色で、轆轤の回転は右である。9は、口径11.7cm、受け部径14.2cm、器高3.9cmを測る土器である。底部外面にはヘラ起こし痕が残る。調整は、体部外面から底部内面にかけて回転ナデを施す。色調は淡灰色で、轆轤の回転は右である。10は、口径11.7cm、受け部径14.0cm、器高3.2cmを測る土器である。底部外面にはヘラ起こし痕が残る。調整は、体部外面から底部内面にかけて回転ナデを施す。見込みには不整ナデが認められる。底部外面には焼成以前に刻まれた「×」印のヘラ記号が認められる。色調は淡灰色で、轆轤の回転は右である。11は、口径10.8cm、受け部径13.1cm、器高3.4cmを測る土器である。底部外面はヘラ起こしを行う。調整は、体部外面から底部内面に至るまで回転ナデを施す。見込みの中央には不整ナデが認められる。色調は、淡灰色で、轆轤の回転は右である。12は、口径10.6cm、受け部径13.2cm、器高3.8cmを測る土器である。底部にはヘラ起こし痕が認められる。調整は、体部外面から底部内面にかけては回転ナデを施す。色調は淡灰色で、轆轤の回転は右である。13は、口径12.8cm、受け部径15.5cm、器高3.7cmを測る土器である。底部にはヘラ起こし痕が残る。体部外面から底部内面にかけては回転ナデを施す。見込みには、不整ナデが認められる。色調は、淡灰色で、轆轤の回転は右である。14は、口径10.6cm、受け部径13.7cm、器高3.5cmを測る土器である。底部外面は、ヘラ起こしを行う。調整は、体部外面から底部内面にかけて回転ナデを施す。底部外面はヘラ起こしの後は、ヘラ削りを行う。見込みには、回転ナデの後、不整ナデを施す。器表面は、やや摩滅する。轆轤の回転は右である。15は、口径11.1cm、受け部径13.2cm、器高3.7cmを測る土器である。底部外面にはヘラ起こし痕が認められる。調整は、体部外面から体部内面にかけては、回転ナデを施す。見込みには不整ナデが認められる。底部外面には、土器を乾かすときに付いたと思われる圧痕が認められる。淡灰色で、轆轤の回転は右である。16は、口径10.6cm、受け部径13.2cm、器高3.7cmを測る土器である。底部外面には、ヘラ起こし痕が認められる。調整は、体部外面から体部外間に至るまで回転ナデを施す。底部外面のヘラ起こしの後は、回転ヘラ削りを施す。色調は、淡灰色で、轆

轆の回転は右である。

第47図17、18は、須恵器高坏である。17は、復元口径15.8cm、器高10.2cm、脚底径9.8cmを測る土器である。脚端部には、0.7cm程の面ができる。脚部には、二方向に透かしがあり、一方は三角形、もう一方は線刻状に貫通する。調整は、坏部の体部内面から、脚部内面に至るまで回転ナデを施す。坏部の見込みには不整ナデが認められる。色調は、暗灰色で、轆轤の回転は右である。18は、脚底径9.6cm、残存高9.7cmを測る土器である。脚部には、二方向に台形の透かしが開けられている。脚端部外面には面ができる。調整は、坏部の体部内面から脚部内面にかけては回転ナデを施す。見込みには不整ナデが認められる。また見込みには、脚底径と同じ形の自然釉のかからない円形を示すところがあり、重ね焼きの痕跡と考えられる。焼成はやや不良で、色調は暗灰色である。

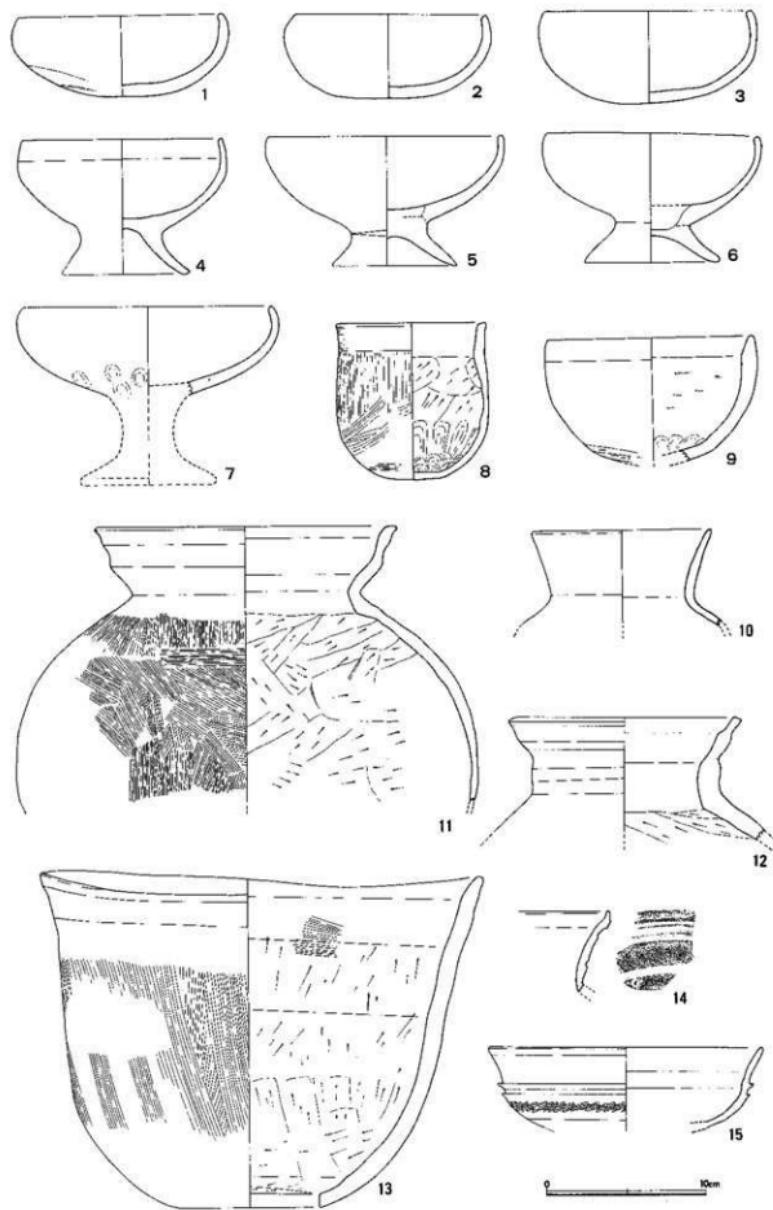
第47図19は、土師器の坏である。口径13.3cm、最大径14.0cm、器高5.3cmを測る。底部は尖り気味で安定性に欠ける。口縁部は内湾する。胎土は緻密で、色調は、オレンジ色を呈す。器面の風化が著しく調整は不明なところが多いが、底部外面にはヘラ削りが認められる。焼成はやや脆い。

第47図20は、獣手形土製支脚である。高さ16.5cm、脚底径11.3cmを測る。脚底部の一部を欠くが、2本のびる土器を支える腕の部分及び、後部に付くつまみの部分は良く残っている。心まで粘土が詰まっている。調整は、脚部に縱方向のヘラ削りが、つまみと脚端部には指頭による圧痕が施されている。色調は茶褐色で、胎土には大粒の砂粒が多く含まれている。

第47図21～28、第48図は下層の土器である。第47図21～28、第48図14、15は須恵器で、その他は土師器である。以下下層の土器について説明する。

第47図21～25は蓋杯の蓋である。21は、口径12.0cm、器高5.3cmを測る土器で、口縁部と体部を分ける稜は比較的シャープである。口縁端部には段が付く。天井部外面の回転ヘラ削りは広範囲に施される。体部外面から天井部内面にかけては、回転ナデで仕上げる。灰色で、胎土には一部に大粒の砂粒が認められる。轆轤の回転は右である。22は、復元口径12.7cm、器高4.7cmを測る土器である。口縁端部と稜には、強いアクセントが付く。天井の回転ヘラ削りの範囲は狭い。体部外面から天井部内面かけては回転ナデを施すが、天井部内面中央にはこの回転ナデは至っていない。暗灰色で、砂粒を多量に含む。轆轤の回転は左である。23は、口径13.2cm、器高4.9cmを測る土器で、稜は比較的シャープである。口縁端部には段が有り、外側にアクセントが付く。天井部外面の回転ヘラ削りの範囲は比較的狭い。体部外面から、天井部内面にかけては回転ナデを施す。天井部内面には同心円上の凹凸が認められる。灰色で、砂粒を若干含む。轆轤の回転は右である。24は、口径11.9cm、器高4.5cmを測る土器で、口径に比して器高が低い。立ち上がりも低く、器厚は厚い。天井部外面の回転ヘラ削りの範囲は狭い。体部外面から、天井部内面にかけては回転ナデを施す。明灰色で、胎土には砂粒を多く含む。外面には濃緑色の自然釉がかかる。轆轤の回転は右である。25は、復元口径12.7cm、器厚4.9cmを測る土器で、口縁端部には段が付く。天井部外面の回転ヘラ削りの範囲は比較的狭い。体部外面から、体部内面には回転ナデが施されている。天井部内面中央には、指頭圧痕が認められ、その上から仕上げナデが施されている。色調は淡黄灰色で、胎土には大小の砂粒を多く含む。器表面には自然釉がかかる。轆轤の回転は左である。

第47図26～28は、蓋杯の杯である。26は、復元口径10.4cm、復元受け部径12.7cm、残存高4.2cmの土器である。受け部はほぼ水平に張りだしている。口縁端部には段がない。底部は平らに仕上げており、



第48図 I区包含層出土遺物実測図(2)下層 (14・15須恵器)

口縁から底部の断面は箱形に近い。底部のヘラ削りは、その範囲がやや狭いが、回転ヘラ削りの後一部で手持ちのヘラ削りを行っている。体部外面から底部内面にかけては、回転ナデを施しているが底部中央には回転ナデが至っていない。薄手のタイプである。灰色で、轆轤の回転は左である。27は、復元口径10.2cm、復元受け部径12.2cm、器厚4.3cmの土器で、受け部はほぼ水平に張り出している。口縁端部には段があるものの、浅い。底部外面の回転ヘラ削りは、中央に一部削り残しがあるものの洗練された削りを行っている。削りの範囲はやや狭い。体部外面から底部内面にかけては回転ナデを施している。体部から底部内面のナデは深く、底部中央には円形に島状の高まりが残る。薄手のタイプである。底部外面には「+」印のヘラ記号が存在する。色調は黒色で、断面はセビア色である。轆轤の回転は左である。28は、復元口径9.9cm、受け部径12.1cm、器厚4.3cmの土器である。受け部は水平に張り出す。口縁端部には段がある。底部は比較的平らに作られている。底部外面の回転ヘラ削りは、その範囲はやや狭いが丁寧に行われている。体部外面から底部内面にかけては回転ナデを施している。灰色で、断面はセビア色を呈す。轆轤の回転は左である。

第48図14は、趣の口縁部と考えられる破片である。肥厚する口縁外面の下には突線があり、その下部にある2本の沈線に画された間には細かい波状文がある。黒灰色を呈す。

第48図15は、無蓋高杯の杯部である。復元口径17.1cm、残存高5.0cmを測る。口縁と体部の境には突線と稜が存在する。稜の下部には目の細かい波状文がある。体部外面から体部内面にかけては回転ナデを施す。底部外面には一部に回転ヘラ削りの痕跡が見える。

第48図1～3は杯である。1は、口径12.8cm、最大径13.5cm、器高5.0cmの土器である。底部は平たく、口縁は内傾する。調整は底部外面から体部外面にかけてヘラ削り、体部外面から底部内面に欠けては横ナデを施す。オレンジ色で、胎土は緻密である。焼きはやや甘い。2は、復元口径11.9cm、復元最大径13.0cm、器高5.2cmを測る。底部は平たく、口縁は内湾する。調整は、底部外面がヘラ削り、体部外面から、底部内面に欠けて横ナデを施す。色調はオレンジ色で、胎土は緻密である。焼成はやや甘い。3は、復元口径12.8cm、復元最大径13.6cm、器高5.7cmを測る土器である。口縁はやや内湾する。調整は口縁外面は横ナデ、底部外面はヘラ削りが認められるが、そのほかは風化のため不明である。色調は、オレンジ色で、胎土には細かい砂粒を含む。焼成は良好である。

第48図4～7は、高坏である。4は、口径12.5cm、最大径13.0cm、器高8.35cmを測る。復元脚部底径は8.0cmである。脚高は内面で2.8cmで、坏部に比して低い。調整は口縁外面に横ナデが認められる他、脚部内面にヘラ削りが認められる。その他は、器面の風化が著しく調整は不明である。黄灰色で、砂粒を大量に含む。所々に赤色顔料が残る。焼成は良好である。5は、口径14.7cm、器高8cmを測る。復元脚部底径は7.8cmである。脚部高は、内面で1.7cmを測り低脚をなす。調整は、全面に横ナデを施す。色調は、黄灰色で胎土は緻密である。焼成はやや甘い。6は、口径13.3cm、器高8.0cmを測る。脚部底径は8.3cm～8.9cmである。粘土が柔らかかったためか脚底部は円形にならない。脚高は内面で1.7cmを測り低脚をなす。調整は全面に横ナデが認められる。色調はオレンジ色で、胎土は緻密である。焼きはやや甘い。7は、復元口径15.5cm、残存高5.5cmの土器である。坏部が浅いことから、長脚形になるものと思われる。坏部の底近くの外面には指頭圧痕が認められるものの、その他は器面の風化が著しく調整は不明である。黄灰色で胎土は緻密である。焼成はやや甘い。

第48図8は、壇である。復元口径9.4cm、器高9.7cmを測る。外面の調整は、口縁部が横ナデ、体部

から底部にかけてが刷毛目、底部がヘラ削りである。内面の調整は、口縁部が横ナデ、体部がヘラ削り、体部から底部にかけては指頭による押圧が施される。色調は黄灰色で、胎土には若干の砂粒を含む。焼成は良好である。

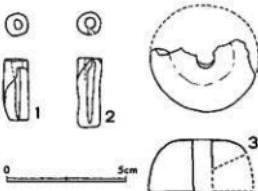
第48図9は、鉢である。口径12.2cm、残存高7.7cmを測る土器である。復元口径12.2cm、残存高7.7cmを測る。口縁端部の調整はつまみナデである。外面の調整は体部が指頭による押圧、底部がヘラ削りを施されている。内面は、体部がヘラ削り、底部が指頭による押圧を施されている。茶褐色で、胎土には砂粒を多く含む。焼成はやや甘い。

第48図10~12は、壺蓋類である。10は、口径11.1cmを測る壺で、口縁はストレートに立ちあがる。器表面の風化が著しく調整は不明であるが、胴部内面にはヘラ削りが認められる。淡黄褐色で胎土には砂粒を含む。焼成はやや甘い。11は、復元口径18.6cm、残存高17cmを測る壺である。口縁は複合口縁状をなす。胴部最大径は28.8cmで胴部の1/2あたりに位置する。調整は、外面が口縁部から頸部にかけてが横ナデ、胴部がヘラ削り、内面が口縁部から頸部にかけてが横ナデ、胴部がハケ目を施されている。色調はやや暗い肌色で、胎土には砂粒を多く含む。焼成は良好である。12は、口径14.4cmの壺である。残存高11.6cmを測る。口縁部から頸部にかけての外表面は凹線状に窪む。調整は、口縁から頸部にかけての内外面が横ナデ、胴部内面がヘラ削りである。濃いオレンジ色をなし、胎土には砂目が多い。焼成は良好なれど器面の風化が著しい。

第48図13は、口径27.8cm、器厚20.9cmの瓶である。鉢形をなし底部には円孔1が穿たれている。この孔の上側には面取りが認められる。把手は存在しない。口縁部外面の調整は横ナデ、胴部外面はハケ目を施す。口唇部内面の調整は横ナデ、その下はハケ目の後横ナデ、胴部内面はヘラ削りを施す。黄褐色を呈し、胎土には砂粒を多く含む。焼成は良好である。

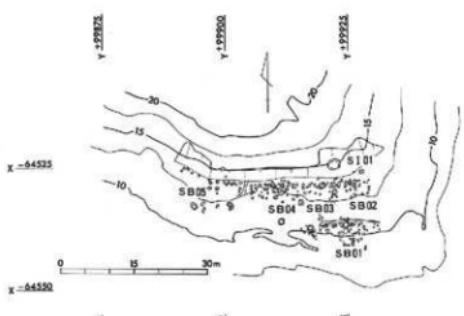
第49図は玉類を図示した。1、2は、碧玉製の管玉である。1は、長さ2.5cm、幅1cmで孔は片方から開けている。2は、長さ2.9cm、幅1cmで、孔は片方から開いている。3は、玄武岩製の紡錘車である。断面が蒲鉾形をなしている。復元底径は4.3cm、厚さは2.2cmである。中心にある孔は、径0.8cmである。

以上、I区の包含層の土器を概観したが、上層の土器は蓋杯が天井部や底部をヘラ起こしのままにしているものが多いことから山本編年のIV期を中心とした時期と考える。また、下層の時期は、山本編年のI期、陶邑編年のTK23、47期に該当するものと考えられる。I区の集落跡もこの2時期を中心とされたものと考えられる。



第49図 I区出土玉類実測図

2 II区の調査



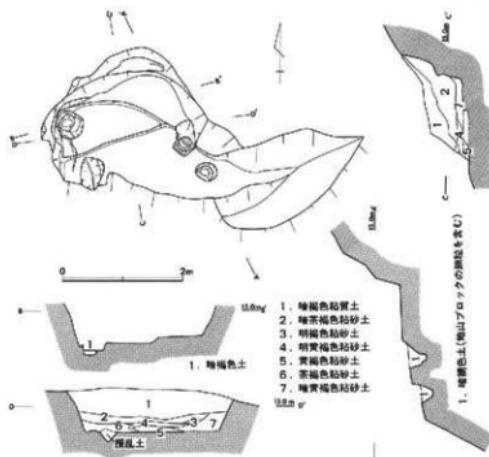
第50図 II区造構配置図

置する。床面で東西2.1m、南北は加工段で切られており1.7m程しか確認されていない。床面には貼り床を施している。ピットは3箇所確認されたが、主柱穴になるかどうか明らかでない。遺物は確認されなかった。

S B 0 1 (第52図)

南側に一段低く造成された加工段に造られた掘立柱建物跡である。北側上方には、S B 02～S B 05が存在する大きな加工段がある。

S B 01が存在する加工段は、確認できるところでは、概ね海拔11m付近から造成されている。東西に長く約15mばかり確認されている。北西には、短く鍵形に曲がるこの段のコーナーがある。



第51図 II区 S I 0 1実測図

II区の調査では、南斜面から遺構が纏まって出土した。地山を山側で2mばかり削りだして造られた長さ40mの加工段と、その南側に一段低く造られた長さ15mの加工段から遺構が検出された。検出された遺構は、竪穴住居跡1、掘立柱建物跡5である。

以下、各遺構について記述する。

x = -64550 S I 0 1 (第51図)

北の加工段の北西で検出されたもので、加工段の奥壁の途中に造成されている。海拔15m付近に位

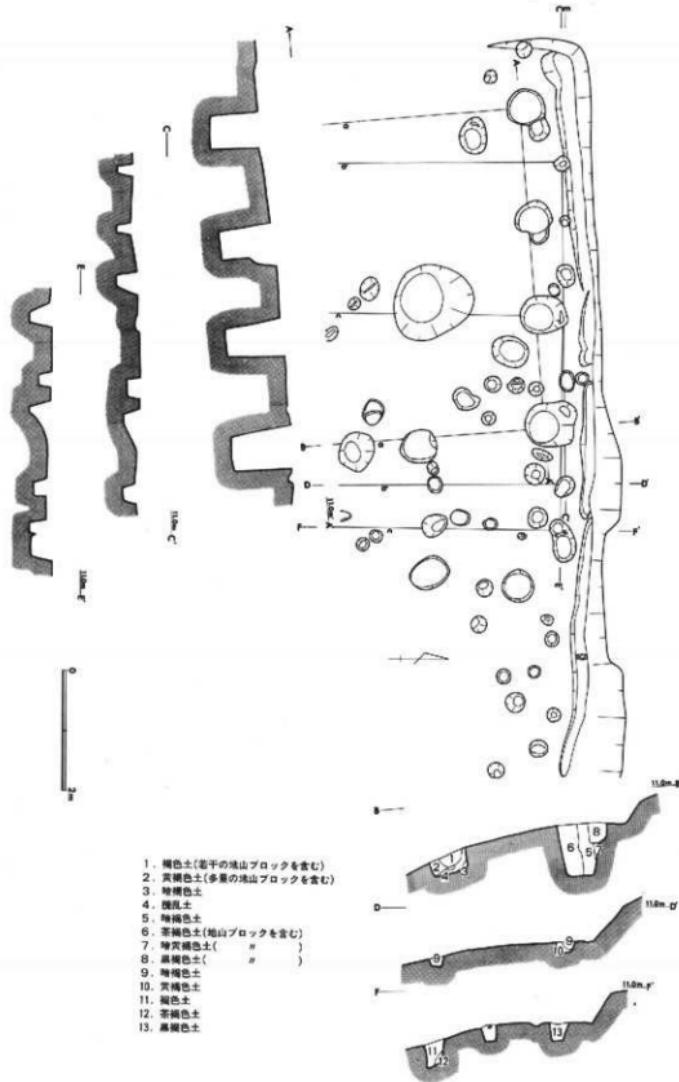
掘立柱建物跡は、3回の立て替えが確認されている。建物は、加工段の北側の壁面に沿って建てられており、壁際には、幅15cmの溝が存在する。また、掘立柱建物跡は、加工段の西側に寄せて建てられており東側は空き地となっている。作業場とも考えられる。

建物aは、桁行き3間の建物と考えられる。梁間については、南側が削平されており定かではない。建物規模は、桁行きで5.9m、柱間寸法は、1.8mである。柱穴は、径70cm、深さ90cm前後でしっかりしている。建物cによって切られている。

桁行きの主軸は、N-85°-Eである。

建物bは、桁行き3間、梁間が1間以上の建物である。建物規模は、桁行きで5.65m、梁間で2.4mである。柱間寸法は、桁行きで1.8m、梁間で2.1mである。桁行きは東西に位置し、後述する建物cとほぼ主軸同じ方向となる。柱穴は、径25~35cm、深さも20~30cmと建物cに比べて小振りである。

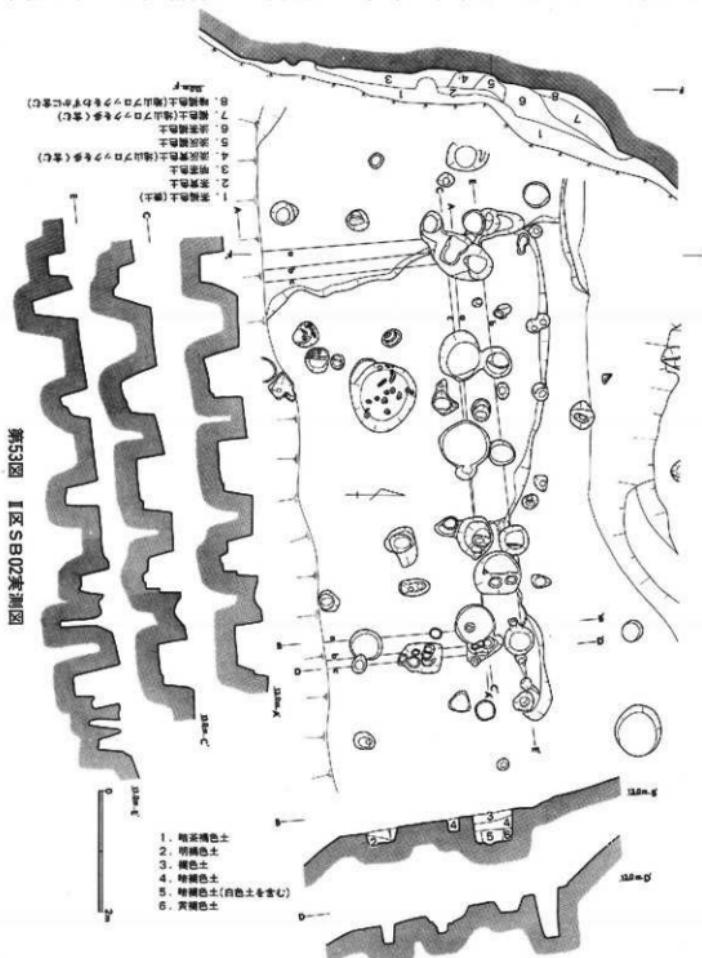
第52図 II区SB01実測図



建物cも桁行き3間、梁間が1間以上の建物である。建物規模は、桁行き5.3m、梁間2.4mである。柱間寸法は、桁行き1.7m、梁間2.0mである。柱穴は、径20~25cm、深さも20cm前後と小振りである。

建物規模、切り合いの状況から建物aが最初に建てられ、建物b、cがこれに続くものと考えられるが、b、cの前後関係は明らかでない。

遺物は、土師器と須恵器が検出されている。以下、図示できたものについて記述する。土師器（第58図7）は、「く」の字に開く口縁部を有する甕である。復元口径27.1cm、残存高5cmを計る。灰黄色を成しており、焼きはあまり。風化のため調整は不明である。須恵器（第58図1~6,8）は、蓋杯と甕が、出土した。1、2は、輪状のつまみを持つ蓋である。立ち上がりは短く「く」の字に折れ曲がる。1は、復元口径14.3cm、残存高3.5cmで、灰色を呈す。調整は、外面から内面にかけて回転ナデ、内面



天井部に仕上げナデが施されている。なお、つまみの内側には、糸切り痕が認められる。焼成はケンチである。2は、復元口径15.4cm、器高3cmで灰黄色を呈す。天井部外面には、ヘラ削り痕が残るも外面から内面口縁部にかけて回転ナデ、天井部内面には、仕上げナデを施す。3、4は、高台付の杯である。3は、復元高台径9.2cmを計る。高台内面は、糸切りの後ナデ消しを行っている。灰黄色で焼成はケンチである。4は、復元高台径10.2cmを計る。端部は、丸い。焼成はあまく、調整は風化のため不明である。5、6は、杯である。いずれも底部を欠失する。5は、復元口径12.8cmで内外面とも回転ナデを施す。黄灰色で、胎土には砂目が若干多く、焼成はややあまい。6は、復元口径14.0cmで内外面とも回転ナデを施す。暗灰色で胎土は緻密である。焼成は良好である。8は、復元口径42.4cmを計る甕である。頸部以下を欠失している。やや外反する口縁端部は、丸く収めている。口縁部には沈線で上下3つに画された文様帯があり、7条の単位からなる櫛描き波状文が施されている。胎土には、若干の砂粒を含むも焼成は、良好である。器面は、灰色を呈す。

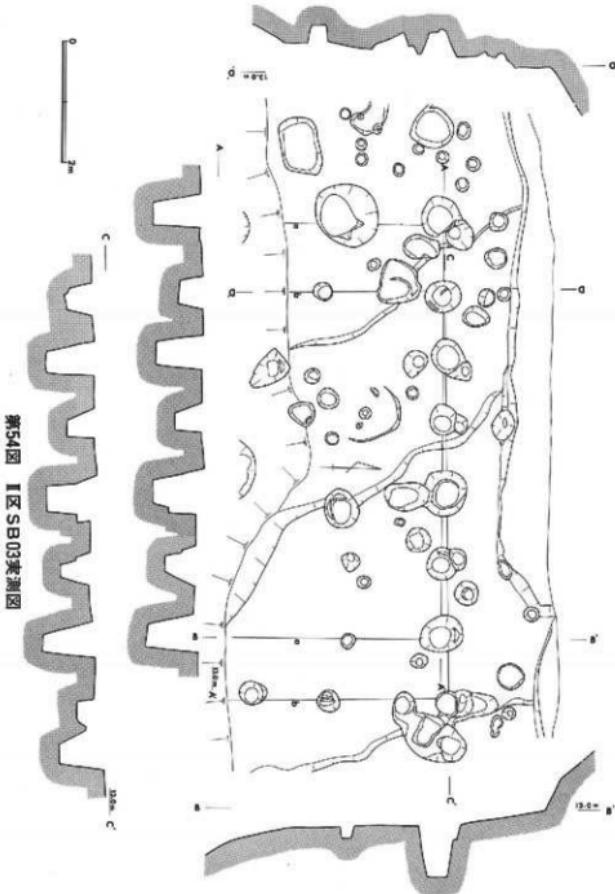
S B 0 2 (第

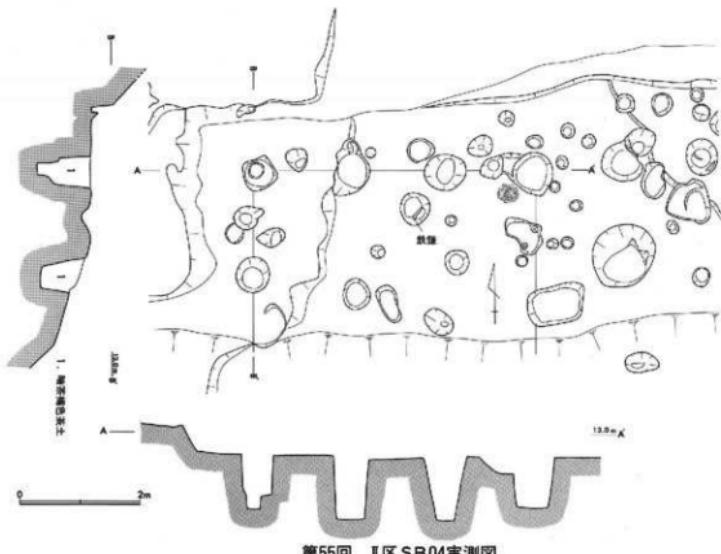
53図) SB02は、
S B 01の北側に
位置する掘立柱
建物跡で

長さ約40m、幅
約6mの平坦面
の東端に位置す
る建物跡である。

建物はa、b、
cの3回の建て
替えが確認され
ている。いざれ
も桁行きを東西
方向にとる建物
である。aは、
桁行き4間、梁
間1間以上の建
物である。S B
01-aとほぼ同
じ方位をとる。

建物規模は、桁
行きで6.7m、
梁間で2.3mで
ある。柱間寸法
は、桁行きで1.6





第55回 II区 SB04実測図

m、梁間で、1.8mである。柱穴規模は、径60cm~70cm、深さは、60cmと深い。bは、aから若干北にずれる建物で、桁行き4間の建物である。桁行きの方位は、ほぼaと同じである。建物規模は、桁行きで6.9mである。柱間寸法は、1.5mを測る。柱穴の規模は、径40~50cm、深さは、50cm前後である。cは、aを切って造られており桁行き4間、梁間1間以上の建物である。建物規模は、柱間寸法ともaとはほぼ同じである。柱穴規模は、aと重複しており不明な点も多いが径20cm前後と考えられる。

aは、cに切られており、cより古い事が確認されているが、bとa、cとの関係は明らかでない。

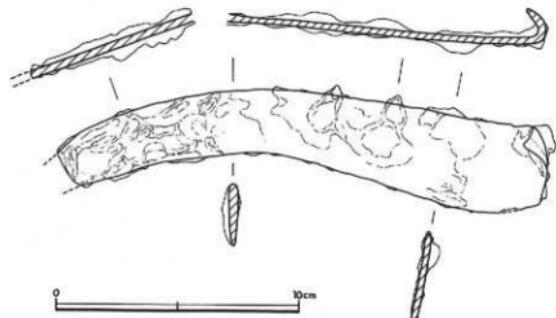
遺物（第56図9~11）は、3点の須恵器が検出されている。9は、高環の杯部である。復元口径18.4cm、残存高3.8cmを計る。調整は、内外面とも回転ナデで、色調は灰色である。胎土には、若干の砂粒を含むも焼成は堅致である。10は、杯である。復元底径は、9.7cmである。調整は、内外面とも回転ナデを施すが、底部外面には糸切り痕が残る。灰色を呈し、胎土には若干の砂粒を含む。焼成は、ややあまい。11は、復元高台径13.4cmを計る高台杯である。高台は、垂直に立ち上がる。調整は、内外面ともに回転ナデである。灰色を呈し、胎土には若干の砂粒を含む。焼成は堅致である。

S B 0 3 (第54図)

S B 03は、S B02と同じ平坦面にあり東に接して、存在する。掘立柱建物跡は、a、b 2回の建て替えが確認された。aは、桁行き3間の建物である。桁行きは、ほぼ東西に位置する。建物規模は、桁行き7.55mで柱間寸法は、2.3mである。柱穴は、径60~70cmで深さ80cm前後と大形である。bは、建物の方位は、aとほぼ同じである。建物規模は、桁行き7.2m、梁間2.3mである。柱間寸法は、桁行き2.3m、梁間2.0mである。柱穴は、径50~55cm、深さ30~40cmを測る。

これらの建物の前後関係は、直接切りあっている柱穴が存在しておらず、不明である。

S B 0 4 (第55図)



第56図 II区 SB04 P33出土鉄器実測図

S B04は、S B02、03と同じ平坦面にありS B03の東に存在する。桁行き3間、梁間1間以上の掘立柱建物跡である。この建物の西側には、鉤の手に曲がる段の境目がある。建物の方位は、S B03同じく桁行きは東西に位置する。

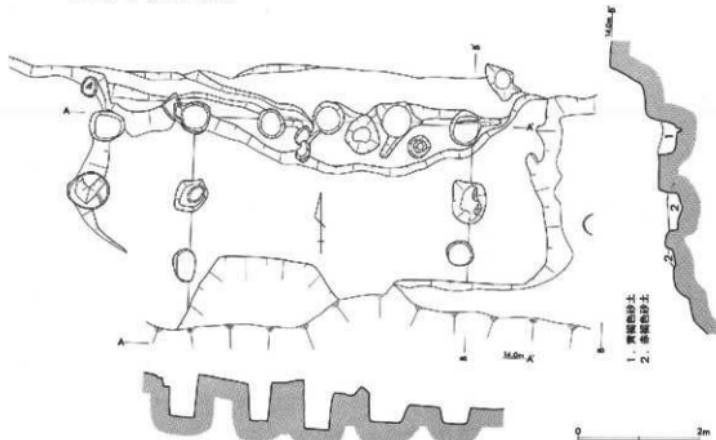
建物の北東のコーナー付近には、径40cmばかりの円

形の焼土が検出された。また、この焼土の西側1.5mにあるピット（P33）の中からは、鉄鎌がほぼ水平に置かれた状態で検出された。焼土については、鍛冶炉の可能性もあり鉄鎌の出土と相俟って注目されるところである。

建物規模は、桁行き5.15m、梁間2.2m以上である。柱間寸法は、桁行き1.6m、梁間1.8mである。柱穴は、径55~70cm、深さ70~87cmを測る。建物の方位は、S B03とほぼ同じで桁行きの方向が東西となる。

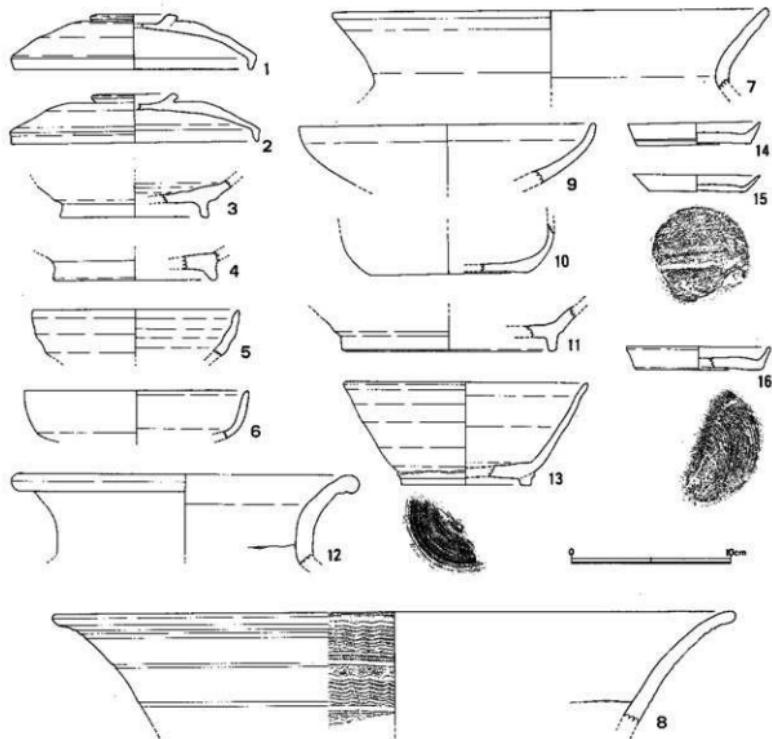
遺物は、須恵器片と鉄鎌（第56図）が出土している。このうち、須恵器については、実測できるものは無かった。鉄鎌は、先端部をやや欠失していると考えられるが、ほぼ全形を知ることができる。内湾刃を呈しているが、峯部も湾曲しており研ぎ減りしたものとは考えにくい。基部は、上端の一部を鈍角に折り返している。残存長20.0cm、基部の幅3.6cm、中央部の幅2.6cm、先端部の幅2.0cmを測る。厚みは、0.3cmである。

S B05（第55図）



S B05は、S B04の存在する平坦面より、0.3m高い平坦面に造られた。桁行き3間、梁間2間以上の建物である。建物規模は、桁行き4.9m、梁間2.9mを測る。柱間寸法は、桁行き

第57図 II区 SB05実測図



第58図 Ⅱ区出土実測図(1~8 SB01、9~11 SB02、12~13 SB05、14~16 上段上層出土)

が西から1.2、2.0、1.2m、梁間が1.2mである。柱穴は、径50~60cm深さ26~61cmである。建物の方位は、SB04と同じで桁行きを東西にとっている。

遺物は、須恵器(第58図12、13)が出土している。12は、復元口径21.6cm、残存高5.0cmを測る壺形土器である。頸部以下は、欠失している。緩く外反する口縁部は、その端部を玉縁状に仕上げている。調整は、内外面とも回転ナデである。胎土は、若干の砂粒を含むも緻密である。焼成は堅致で黒灰色を呈す。13は、高台付の杯である。高台は、低く底部の外縁に付いており、体部は、逆「ハ」の字状に開く。復元口径15.1cm、器高6.4cm、復元高台径8.0cmを測る。内面の見込みから外面の高台まで回転ナデを施す。底部外面は、回転糸切り痕をそのまま残す。胎土は緻密で焼成はややあまい。灰色を呈す。

Ⅱ区上段上層出土遺物(第58図14~16)

Ⅱ区上段上層からは、土師器の小皿が出土している。円盤状の土器で底部に短い口縁部が付くタイプである。復元口径79~90cm、底径60~80cm、器高11~14cmを測る。調整はいずれも見込みから底部にかけてナデを施す。14、16は、底部に糸切り痕を残す。15は、底部糸切りの後、ヘラ削りを施す。胎土、焼成とも概ね良好である。

3 III区の調査

III区の調査は、第1調査区から第3調査区に分けて実施した。III区は、I区の南側に西を向いて開く谷に立地する第3調査区、第3調査区の西に南北に延びる尾根の南に南を向いて展開する谷に立地する第2調査区、第2調査区の東側に東西に延びる尾根とこの尾根の東側に開く谷に立地する第1調査区から成っている。

第1調査区

第1調査区は、II区の南側に細長く延びるIV区の水田を挟んで、さらに南側に位置する。第1調査区からは、弥生時代の竪穴住居跡5、掘立柱建物跡1、古墳時代後期の横穴墓5、古墳時代後期以降の掘立柱建物跡8等が検出された。弥生時代の竪穴住居跡は、第一調査区の尾根の西側と尾根の東側の斜面から掘立柱建物跡は、尾根の中央部から検出された。古墳時代後期の横穴墓は、尾根の西斜面から2、東斜面から3検出された。古墳時代後期以降の掘立柱建物跡は、東側斜面から検出された。この掘立柱建物跡は、平坦面を伴うもので、この平坦面から鐵造剥片が確認され、これらの建物が鐵冶に関係するものであつたことが確認されるに至った。

第2調査区

第2調査区からは、古墳時代中期から後期にかけての竪穴住居跡1、古墳時代後期以降の掘立柱建物跡が検出された。

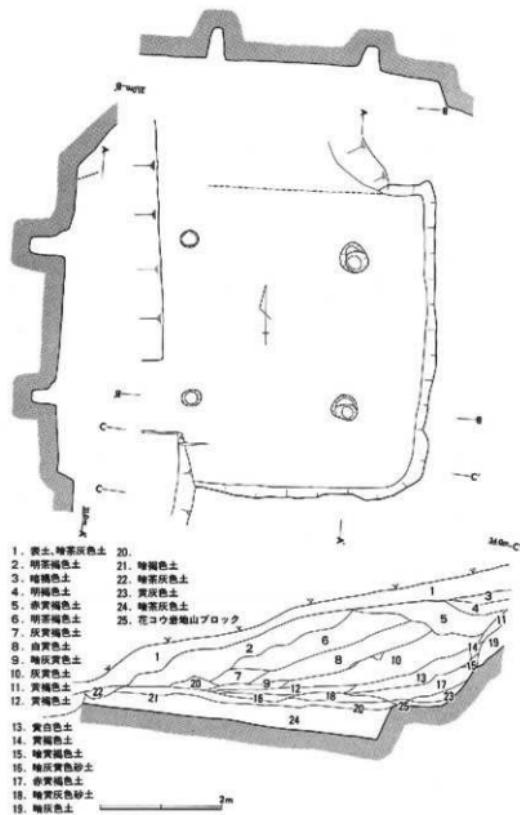
第3調査区

第3調査区からは、西に向いた斜面の上部から古墳時代後期の横穴墓1が、この下方の斜面からは、古墳時代中期から後期にかけての竪穴住居跡3、古墳時代後期以降の掘立柱建物跡4が検出された。

以下、遺構番号順に説明する。

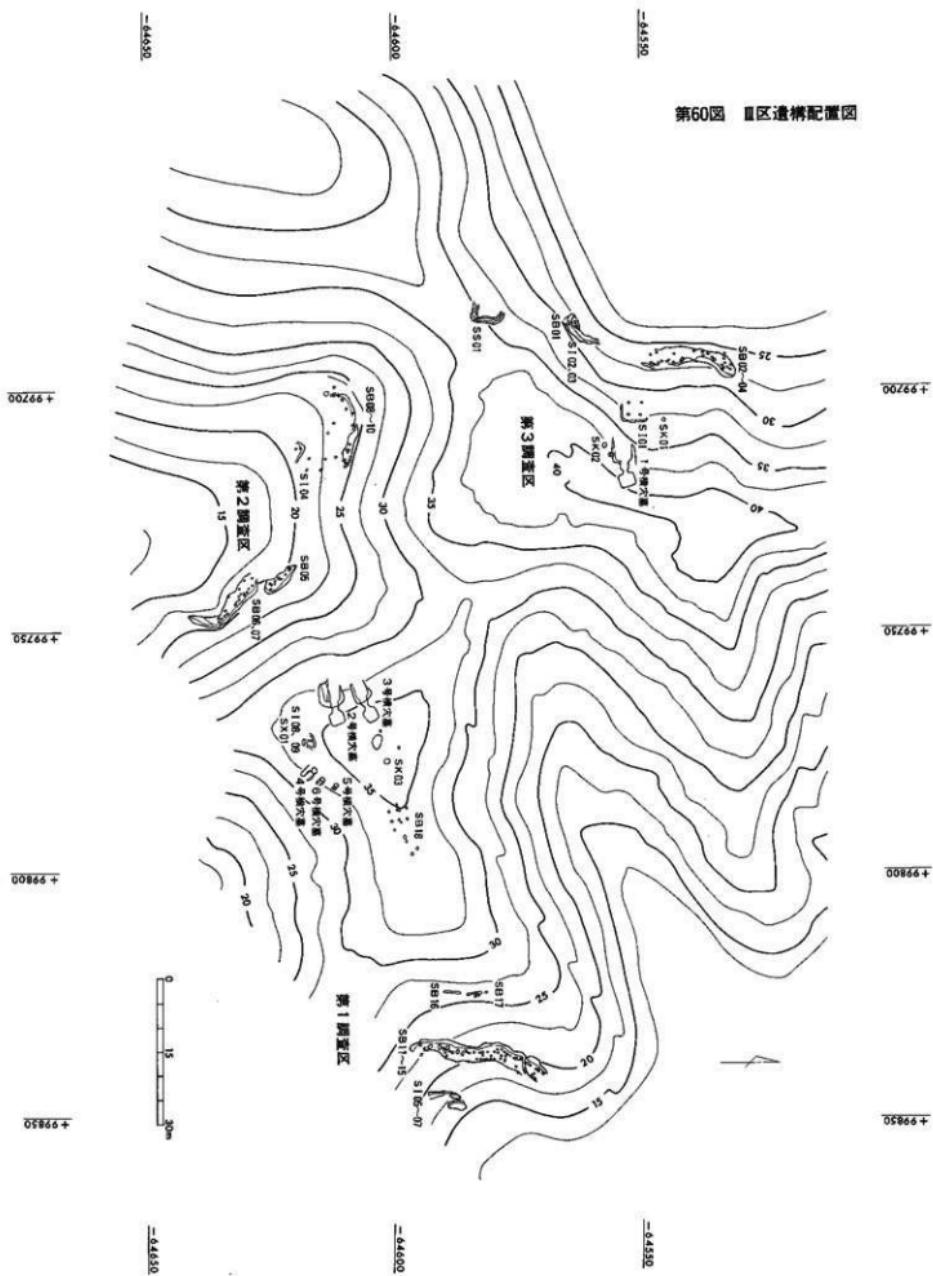
S I 01 (第60図)

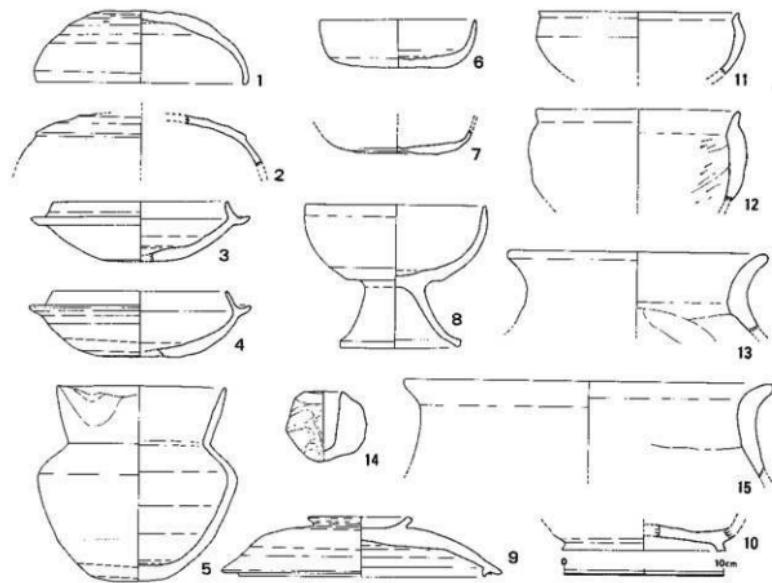
S I 01は、後述する1号横穴墓の前庭部の前方下部から検出された竪穴住居跡である。方形の住居跡と考えられるが北と西の壁は検出することは出来



第59図 III区 S I 01実測図

第60図 II区造構配置図





第61図 Ⅲ区SI01出土遺物実測図

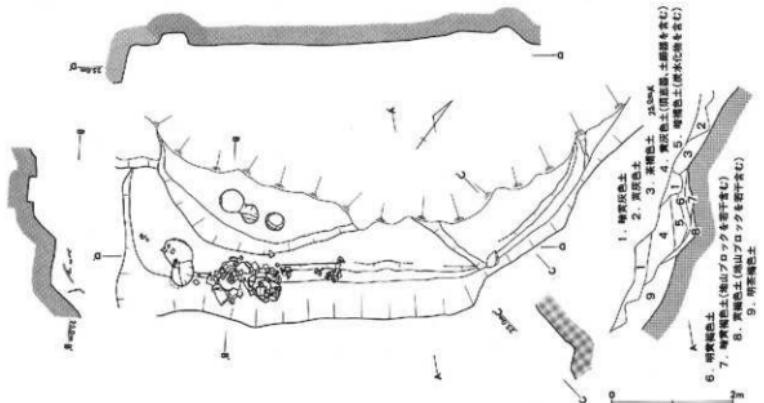
なかった。東側の一辺は、床面で4.6mである。南側は、床面で3.4mまで確認できた。東側の壁高は、60cm、南側の壁高は、7cmであった。主柱穴は、北東のコーナーの内側に1穴と、南東のコーナーの内側に一穴、さらに、これらと対角に1穴ずつ存在している。柱穴は、いずれも、ほぼ円形を成していた。それぞれの柱穴の規模を記すと、北東のコーナーの内側の柱穴は、径45cm、深さ58cm、南東のコーナーの内側の柱穴は、径45cm、深さ37cm、北西に位置する柱穴は、径30cm、深さ12cm、南西に位置する柱穴は、径33cm、深さ51cmであった。

この住居跡の上は、1号横穴墓構築の際に意図的に埋土が成されていた。この埋土は、横穴墓の掘削時に出土した土を処理したものと考えられるが、住居跡の覆土の上には、旧表土が存在していなかった。この住居跡が廃棄されて間がなかったのか、あるいは、埋土の時点で整地を行ったものか明らかでない。

壁体溝、中央ピット、床面の焼土とともに存在しなかった。

出土遺物（第61図）

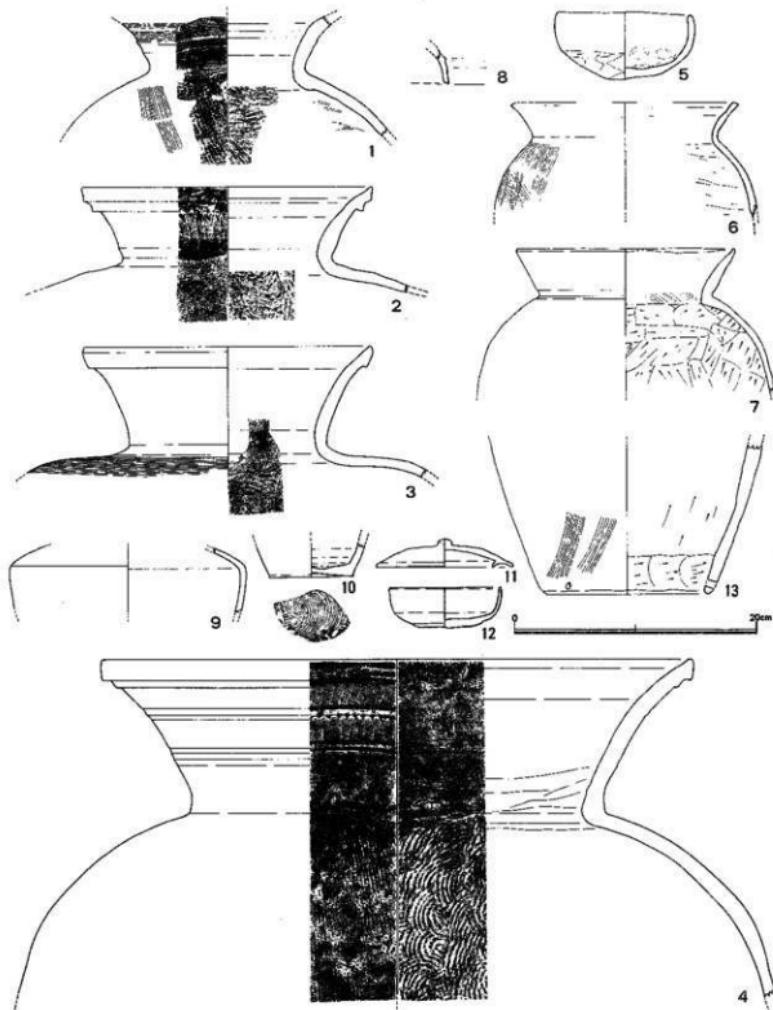
1～10は、須恵器、11～15は、土師器である。このうち、1～4、6、7は、蓋杯である。1は、口径13.0cm、器高3.5cmを測る蓋である。立ち上がりは内湾しながら天井部に至る。立ち上がりと天井部の境には界線は存在しない。口縁端部は、丸く收めている。天井部外面には、回転ヘラ削りを施すもヘラ起こし痕が残る。天井部内面には、仕上げナデが施されている。その他は、回転ナデで調整している。



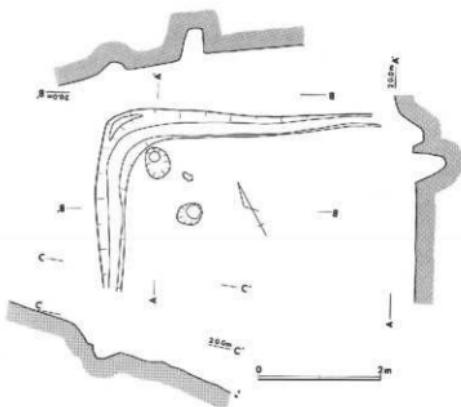
第62図 III区 SB01、SI02、SI03実測図

灰色を呈し、胎土には、砂粒を若干含む。焼成は、堅致である。2も蓋である。天井部は、平らな造りとなっている。天井部と立ち上がりとの境には、明確な段が付く。天井部外面には、回転ヘラ削りが施されている。その他は回転ナデで仕上げる。外面は、セピア色、内面は、灰色を呈す。胎土には、砂粒を若干含み、焼成は、堅致である。3は、復元口径10.8cm、器高3.7cm復元受け部径13.6cmを測る杯である。口縁部は、短く内傾し、受け部は、横に張り出す。口径に比して器高は低く、平たい造りとなっている。底部外面には、回転ヘラ削りを、同内面には、仕上げナデを施す。その他は、回転ナデである。外面は、灰黒色、内面は、暗いセピア色を呈す。胎土には、若干の砂粒を含み、焼成は堅致である。4も、復元口径10.3cm、器高4.1cm、復元受け部径13.8cmを測る杯である。口縁部は、薄く均一で短く内傾している。受け部は、横に張り出す。底部外面には、回転ヘラ削りを、その他には、回転ナデを施す。灰色を呈す。胎土には、若干の砂粒を含む。焼成は、ややあまい。5は、復元口径10.6cm、頸部径8.9cm、器高12.0cmを測る壺である。最大径は肩部に位置し、12.3cmを測る。口縁部は、直線的に外方に延びる。胴部外面の下半部は、回転ヘラ削りが施されている。その他には、回転ナデを施す。色調は、暗灰色で、胎土には若干の砂粒を含む。焼成は良好であるが、焼け歪んでいる。6は、復元口径9.7cm、器高2.0cmを測る杯である。口縁部は、底部から短く内湾気味に立ち上がる。底部外面にはヘラ起こし痕が残り、同内面には、仕上げナデが認められる。その他は、回転ナデで仕上げる。灰色を呈し、胎土には若干の砂粒を含む。焼成は、良好である。7も杯である。底部外面には、回転ヘラ削りを施すもヘラ起こし痕が残る。底部内面には、仕上げナデが認められる。灰色を呈す。胎土は、若干の砂粒を含むが良好である。焼成は、堅致である。8は、復元口径11.3cm、器高8.9cm、復元脚端径7.5cm、脚高4.0cmを測る高壺である。杯部は、内湾気味に開く。脚部は、「ハ」字を開き、端部には稜が付く。透かしは、認められない。杯部外面下部には、回転ヘラ削りが施されている。その他は、回転ナデを施す。特に杯部と脚部の接合部には強いナデが施され、凹んでいる。灰色を呈し、胎土は、緻密である。焼成は、良好である。9は、復元口径17.6cm、器高3.7cmの輪状つまみの付く大形の蓋である。輪状つまみの径は、6.5cmである。かえりは、口縁から下にはみ出している。天井部

外面には、回転ヘラ削りが認められ、その他には、回転ナデが施されている。灰色で、胎土には砂粒を多く含む。焼成は、良好である。10は、高台杯の底部である。復元高台径10.2cm、残存高1.6cmを測る。高台は、短いがしっかりと踏ん張っている。高台の接地面は、若干中窪む。調整は、基本的に回転ナデであるが、底部外面は、回転糸切りの後横ナデを施している。見込みには、仕上げナデが認められる。色調は、灰色である。胎土は、若干の砂粒を含むも緻密である。焼成は堅致である。11は、復元口径12.4cm残存高3.8cmの杯の破片である。高杯の杯部の可能性もある。体部は、内湾しながら口縁部に至るが、口縁端部は、アクセントをつけて直立する。調整は、基本的に横ナデであるが内面

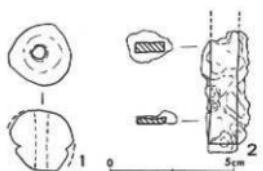


第63図 Ⅲ区 SB01、SI02・03出土土遺物実測図(1~4 SI02出土、8 SI03出土、5~7・9~13 SB01出土)



第64図 III区 S I 04実測図

には、暗文状の縦筋が認められる。器面は、滑らかでつるつるしている。オレンジ色で、胎土は、緻密である。焼成は、良好である。12は、復元口径12.7cm、残存高5.7cmを測る土器である。やや内湾気味の胴部から短く延びる口縁部が付く。口縁部内面から胴部外面には横ナデが施されている。胴部内面は、ヘラ削りのままである。暗黄灰色で、胎土には、砂粒を多く含む。焼成は、ややもろい。13は、復元口径16.2cm、残存高4.9cmを測る壺である。口縁部は、ゆるく外反する。頸部内面から外面にかけては、横ナデを施す。頸部以下内面は、ヘラ削りを行う。



第65図 III区 S I 04出土遺物実測図

茶色を呈す。胎土は、若干の砂粒を含むも良好である。焼成は、良好である。14は、口径2.4cm、器高4.3cmの手づくね土器である。胴部最大径は、ほぼ中央にあり、5.0cmを測る。底部は、尖っており自立できない。淡茶褐色を呈す。胎土には、若干の小砂粒を含む。焼成は、良好である。15は、復元口径27.0cm、残存高5.9cmを測る壺である。口縁端部は、鋭く外反する。調整は、横ナデである。黄灰色で胎土は、砂目が多いが緻密である。焼成は、良好である。

S I 0 2 (第6 2図)

第3調査区の西に開く谷の中程（調査区では一番下）に位置する。標高25m付近に存在する。方形の堅穴住居跡と考えられる。東は、S I 03と切り合っている。また、北をS B 01によって切られている。S I 03との前後関係は、明らかでない。

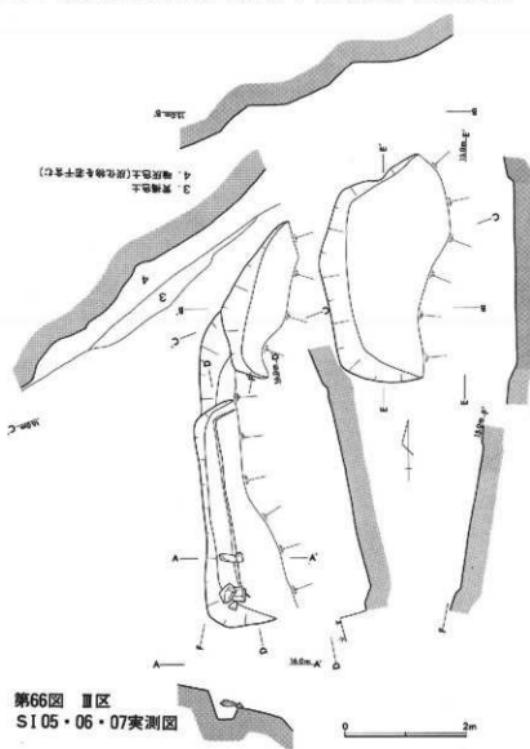
北西のコーナー付近の覆土中からは、須恵器を中心とした土器が集中して出土した。主柱穴等は確認されていない。

出土遺物（第6 3図1～8）

1～4、8は、須恵器、5～7は、土師器である。このうち、1～4は、壺である。1は、口縁部上部及び肩部以下を欠失する。復元頸部径12.7cmを測る。頸部から大きく外反する口縁部の外面には、目の細かい山の低い波状文が施されている。口縁下部から頸部の外面には、回転ナデが、肩部以下の外面には、平行タタキが施されている。内面は、口縁部から頸部にかけて回転ナデ、肩部には、同心円タタキが施されている。このうち、肩部内面の同心円タタキは、施文後ナデ消しが試みられている。口縁部内面及び口縁部から肩部にかけての外面には灰釉がかかる。胎土は緻密で焼成は堅致である。2は、復元口径24.0cm、残存高8.7cmを測る。肩部以下を消失している。口縁部は、肩部に対してほぼ直角に立ち上がり、やや緩く外反しながら端部に至る。口縁端部は、尖っており、また、この外面には段が付く。口縁部外面には、目の細かい、山の高い波状文が認められる。調整は、口縁部内外面と頸部

内面で回転ナデ、肩部外面に平行タタキを施す。肩部内面は、同心円タタキを施すもナデ消しを試みている。口縁部内面から肩部外面向にかけて灰釉がかかる。灰色を呈す。胎土には、若干の砂粒を含む。焼成は、堅致である。3は、復元口径23.5cm、残存高10.6cmを測る。肩部以下は、残存していない。口縁部は、肩部に対してほぼ直角に立ち上がり、上部でやや緩く外反しながら端部に至る。口縁端部は、外に屈曲させ先端は尖っている。調整は、口縁部内外面と頸部内面で回転ナデ、肩部外面にカキ目を施す。肩部内面は、同心円タタキを施すもナデ消しを試みている。口縁部内面から肩部外面にかけて灰釉がかかる。暗灰色を呈す。胎土は、緻密で、焼成は堅致である。4は、復元口径48.6cm、残存高27.9cmを測る大壺である。肩部以下は、残存していない。口縁部は、肩部から鈍角に直立して立ち上がり、外方に緩く外反しながら端部に至る。口縁端部外面には、段が付く。口縁部外面には、2条単位の凹線により2段に区画された2つの文様帯があり、目の細かい波状文が施されている。調整は、口縁部内外面と頸部内面で回転ナデ、肩部外面に平行タタキを施す。肩部内面は、同心円タタキを施している。口縁部内面から肩部外面にかけて灰釉がかかる。灰色を呈す。胎土は、若干の砂粒を含むも良好で、焼成は堅致である。8は、蓋杯蓋の破片である。口縁端部には、段が付く。立ち上がりと天井部との境には稜が付く。調整は、回転ナデである。灰黄色を呈す。胎土は緻密で、焼成は堅致である。

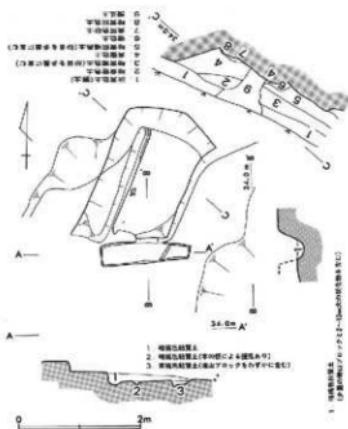
5は、復元口径10.9cm、器高5.5cmの杯である。口縁部は、内湾しながら立ち上がり、端部は、若干波打つ。全体にごつごつした感じを与える土器である。調整は、口縁部外面に横ナデを施されており、底部内面には、指頭による押圧が認められる。体部から底部外面にかけてはヘラ削りが行われている。肌色で胎土は、緻密である。焼成は、良好である。6は、復元口径18.7cm、残存高9.7cmを測る。口縁部は、外方に直線的に伸び、肩部は、張らない。胴部最大径は、中央かそれ以下に位置するものと考えられる。口縁端部は、カットされたように平らである。調整は、肩部から胴部にかけての外面



第66図 Ⅲ区
SI 05・06・07実測図



第67図 Ⅲ区 SI 06
出土遺物実測図



第68図 Ⅲ区 SI 08・09、SX 01実測図

この住居跡は、I区 S 101とほぼ同時期の所産と考えて良い。

S 103 (第62図)

S 103は、標高25m付近で検出された住居跡でS 102と切り合っている。S 102との前後関係はあきらかでない。主柱穴、壁対溝、遺物とともに確認されなかった。加工段の一部である可能性も否定できない。

S 104 (第64図)

S 104は、第2調査区の南に開く谷の西よりから検出された。標高20m付近に位置している。方形の竪穴住居跡と考えられるが、床面が流失しており確認し得たのは、北のコーナー付近だけである。壁の高さは、



第69図 Ⅲ区 SI 08・09出土遺物実測図

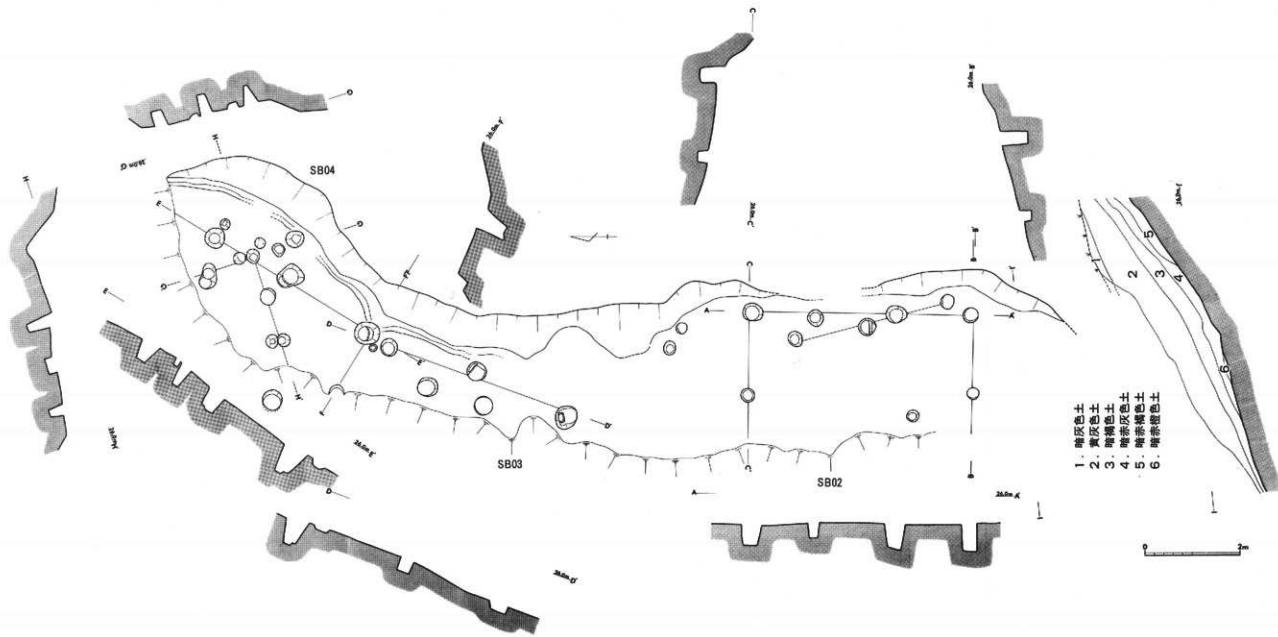
このコーナー付近で、近くの床面との差で、315cm確認された。壁沿いには、壁体溝が存在しており、コーナーから東に4.0m、西に2.5m確認されている。壁体溝は、幅20cm～30cmで深さ17.8cm確認された。主柱穴は、北のコーナーから1.1m内側に位置するところに1確認されている。規模は径45cm、深さ50cmであった。

出土遺物 (第65図)

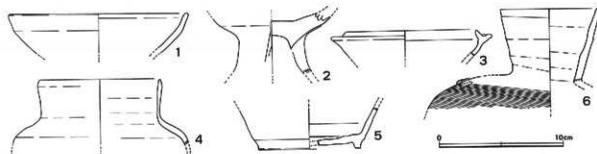
S 104からは、須恵器片、土玉(1)と鉄器片(2)が出土している。このうち、須恵器片は、再編の為図示し得なかった。土玉は、壁体溝から出土した。土師質で復元径2.7cmを測る。上から下に向けて径0.6cmの円形の孔が開けられている。高さは、剥落のため知ることは出来ない。指頭による押圧によって調整されている。色調は、黄味を帯びた灰色である。焼成は良好である。鉄器片は、刀子の茎とも考えられる鉄片である。長方形で長さ4.5cm、幅1.2cm測る。断面は、長方形を成し、厚みは、0.2～0.3cmである。

に縦ハケが施されている。内面は、頸部から口縁部にかけて横ナデ、肩部から胴部にかけて横方向へのヘラ削りが行われている。赤褐色で胎土には、大粒の砂粒を多く含む。焼成は良好である。7は、復元口径18.0cm、残存高11.6cmを測る。口縁部は、外方に直線的に伸び、肩部は、張らない。胴部最大径は、中央かそれ以下に位置するものと考えられる。口縁端部は、内側に若干折り曲げアクセントを付けている。口縁内外面には、横ナデが施されている。頸部以下には、入念なヘラ削りが行われており、頸部にシャープな稜が出来ている。赤褐色で胎土には、大粒の砂粒を多く含む。焼成は良好である。

S 102出土の須恵器は、臺を中心であったがいずれも古式な様相を示しており、供伴した蓋杯の破片からもこのことは追認できる。山本編年I期に属し、



第70図 Ⅲ区 SB02・03・04実測図



第71図 Ⅲ区 SB02・03出土遺物実測図(3~5、SB02 1、2、6、SB02、SB03)

S I 05 (第6 6図)

S I 05は、第1調査区の東にある北東に開く谷の中程で確認された。標高14m付近に位置している。遺構は、西側の一部でのみ残存している。壁高は、47cmである。床面は、南北3.0m、東西16.5m残存している。壁体溝、主柱穴等は確認できなかった。加工段の可能性もある。

S I 06 (第6 6図)

S I 06は、S I 05の南西上方で確認された。標高15m付近に位置している。遺構は、西側の一部でのみ残存している。壁高は、35cmである。床面は、南北3.5m、東西0.55m残存している。壁体溝は、壁沿いに幅25cm、深さ3cm存在している。この壁体溝の上には、一部に30cmばかりの石が存在していた。多角形のプランを探る可能性もある。主柱穴は、確認されなかった。

出土遺物 (第6 7図)

壁体溝の中から出土した。復元口径13.8cm、残存高6.4cmを測る壺形土器である。頸部は長く外反し、口縁部は内側で内湾する。口縁部は、外方に肥厚し、下部は垂れている。この部分に4条の櫛描き沈線を施している。口縁端部は、丸く收める。調整は、外面が横ナデ、内面が口縁部から頸部の中程まで横ナデ、以下は、横方向のヘラ削りを行っている。黄褐色で胎土には砂粒を多く含む。焼成は、やや柔らかい。

弥生時代後期後半の所産と考えられる。

S I 07 (第6 6図)

S I 07は、S I 05の西上方で確認された。S I 06の北に存在する。標高15m付近に位置している。遺構は、西側の一部でのみ残存している。壁高は、41cmである。床面は、南北2.5m、東西0.55m残存している。壁体溝、主柱穴等は確認できなかった。加工段の可能性もある。

S I 08 (第6 8図)

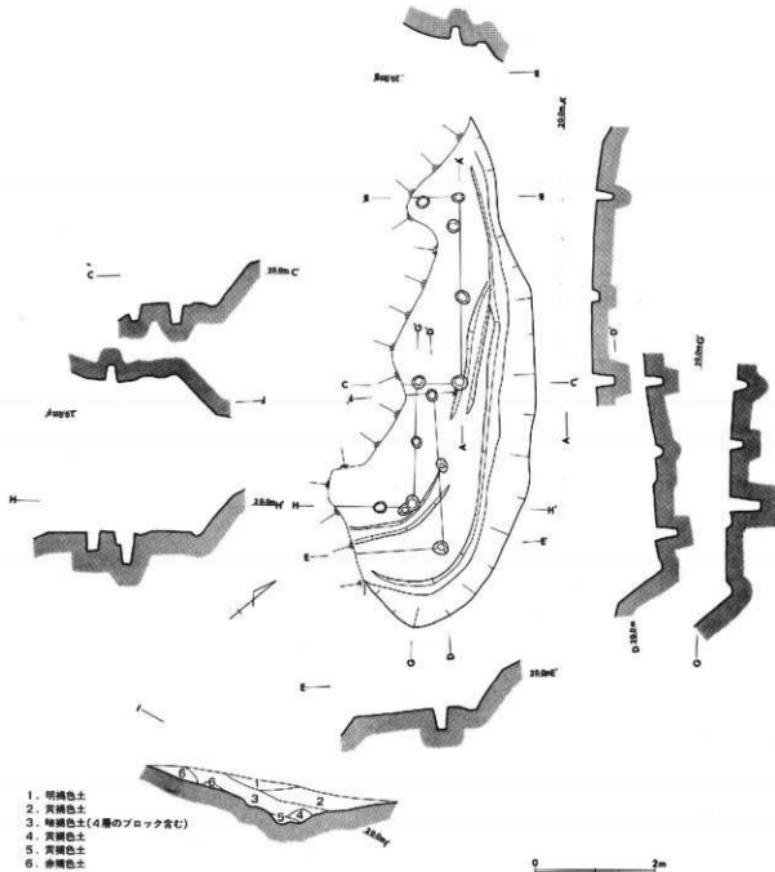
S I 08は、第一調査区の尾根の南側の緩斜面で確認した方形と考えられる竪穴住居跡である。後述するS I 09、S X01と重複して検出された。西側は後世の攪乱を受けている。東側にあるS I 09との前後関係は、木の根の攪乱によって今一つ明らかではなかったが、S I 08の覆土と考えられる2層とS I 09の覆土と考えられる3層の位置から推定すると、S I 09の方が新しいように感じられた。西側の壁際には、壁体溝が存在している。コーナー付近の壁高は、76cm確認された。床面は、南北で1.7m、東西で0.85m確認できた。

S I 09 (第6 8図)

S I 09は、S I 08の東側で確認された。多角形の竪穴住居跡とも考えられるが、そのプランについては、定かではない。床面は、南北で1.65m、東西で0.95m確認できた。

出土遺物 (第6 9図)

1は、S I 09、2は、S I 08床面から出土した。1は、復元口径14.0cm、残存高5.0cmを測る壺形土器である。口縁部は、外方に肥厚し、下部は垂れている。この部分に浅い3~4条の櫛描き沈線を施している。口縁端部は、丸く收める。調整は、外面が横ナデ、内面が口縁部から頸部まで横ナデ、以下は、横方向のヘラ削りを行っている。黄茶色で胎土には砂粒を多く含む。焼成は、やや柔らかい。2は、復元口径18.8cm、残存高7.2cmを測る壺形土器である。口縁部は、外方に肥厚している。この部分に浅く細かい多条の櫛描き沈線を施している。沈線は若干波打ち、部分的に消えている。口縁端部

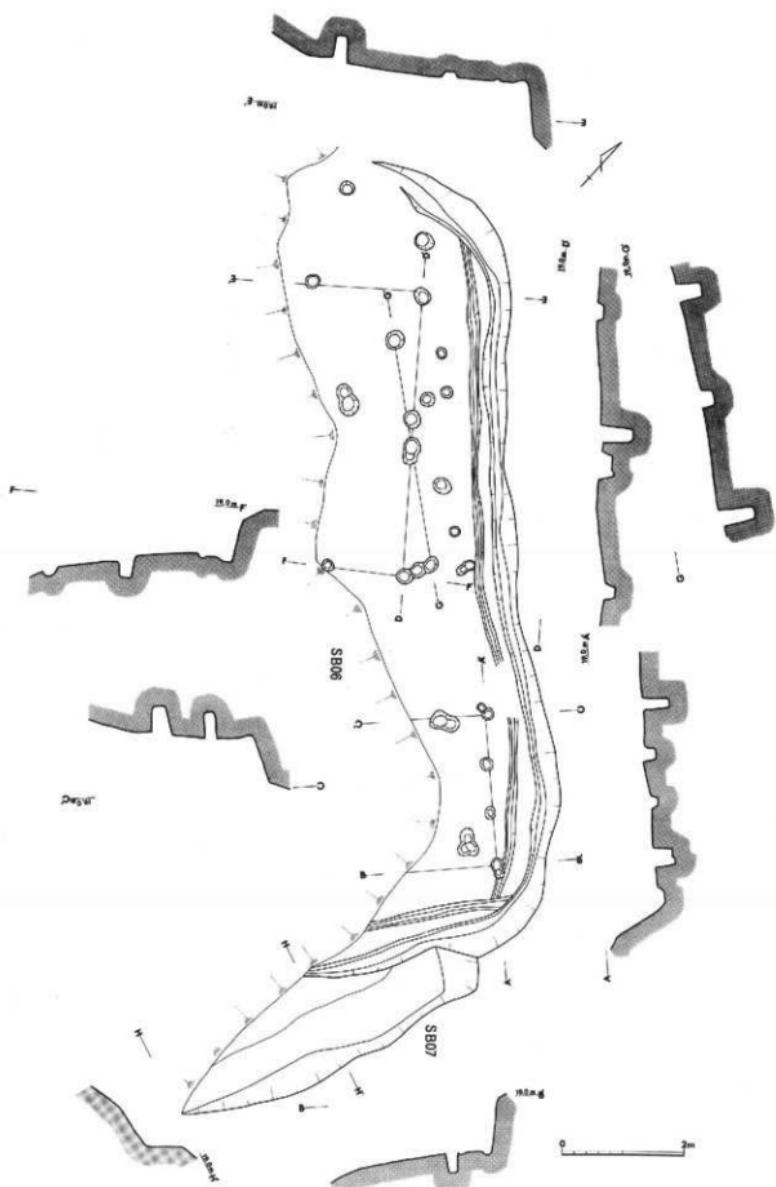


第72図 III区 SB 05実測図

は、丸く收める。調整は、外面が横ナデ、内面が口縁部から頸部まで横ナデ、以下は、横方向のヘラ削りを行っている。胸部は非常に薄い造りになっている。外面には、ほぼ全面に煤が付着している。黄灰色で胎土には、砂粒を多く含む。焼成は、良好である。弥生時代後期後半の所産と考えられる。このことからS I 08、S I 09は、S I 06とほぼ同時期にあったものと考えられる。

SB 01 (第6 2図)

SB 01は、第3調査区の南西隅に存在する。S I 02、03を切って加工段が造られている。加工段は、南北0.85m、東西3.5m残存している。加工段の平坦面は、標高24m付近に位置している。この平坦面には、柱穴1が存在する。柱穴の規模は、径40cm、深さ11cmである。



第73図 III区 SB06・07実測図

出土遺物（第63図9～13）

9～12は、須恵器、13は、土師器である。9は、長頸壺の破片である。口縁部と肩部下半を欠失している。肩部の最大径は、38.5cmである。調整は、内外面とも回転ナデである。黒灰色を呈し、胎土には若干の砂粒を含む。焼成は、堅致である。10は、底形7.0cm、残存高2.8cmを測る壺形土器の底部である。底部外面には、回転糸切り痕がそのまま残っている。調整は、底部外面を除いて回転ナデを施している。また、内面には、明瞭に輪轍目が認められる。灰色を呈し、胎土は、緻密である。焼成は、堅致である。11は、口径11.2cm、器高2.3cmの蓋杯の蓋である。天井部には、擬宝珠状のつまみが付く。口縁部の内側には、返りが付くが、この返りは口縁部より下には出ない。調整は、内外面とも回転ナデである。色調は、外面が淡黒灰色、内面が淡灰色である。胎土は、緻密で焼成は、良好である。12は、口径9.4cm、器高3.4cmの蓋杯の杯である。口縁部は、若干内渦気味に立ち上がる。ヘラ起こしで底部の切り離しを行い、さらにその上をナデている。調整は、内外面とも回転ナデである。色調は、黒灰色である。胎土は、緻密で焼成は、良好である。13は、下端部径13.2cm、残存高12.1cmを測る壺形土器である。下端部は、丸く造られており、この端部側面には、径0.5cmの内面に貫通する孔が認められる。調整は、内面がヘラ削りを行っている。このヘラ削りは、上部では縦方向、端部近くでは横方向に施されている。外面には、縦ハケを施す。赤褐色で胎土には若干の砂粒を含む。焼成は、やや柔らかい。

S B 02（第70図）

西側に開く谷にある第3調査区の西端中央標高m付近に造成された加工段に造られた掘立柱建物跡である。北側には、S B03～S B04が存在する。

S B02が存在する加工段は、S B03～S B04と同じ平坦面に存在する。概ね海拔26m付近に造成されている。南北に長く約20mばかり確認されている。東西は、3mばかり確認されている。北側にあるS B03～S B04の加工段は、S B01が存在する加工段より東に振れており、北東に長くなっている。

掘立柱建物跡は、a、b 2棟存在する。建物aは、桁行き3間、梁間1間以上の建物と考えられる。建物規模は、桁行きで5m、梁間で2m柱間寸法は、桁行きで1.5m、梁間で1.7mである。柱穴は、径40cm、深さ40cm前後である。桁行きの主軸は、ほぼ南北にとる。建物bは、桁行き2間、の建物と考えられる。梁間については明らかでない。建物規模は、桁行きで3.6m、である。柱間寸法は、1.8mである。柱穴は、径30cm、深さ30cm前後である。

出土遺物（第71図3～5）

全て須恵器である。3は、復元口径11.4cm、残存高2.1cmを測る蓋杯の杯である。口縁部は短く内傾して立ち上がる。調整は、内外面とも回転ナデで仕上げる。灰色を呈し、胎土には、小粒の砂粒を多く含む。焼成は、良好である。4は、復元口径9.8cm、残存高5.3cmを測る壺形土器の破片である。調整は、内外面とも回転ナデで仕上げる。暗灰色を呈し、胎土は、緻密である。焼成は、良好である。5は、復元高台形8.2cm、残存高3.3cmを測る高台杯である。高台は、底部の外縁に沿って付けられている。体部は、直線的に外側に開く。調整は、内面が回転ナデ、外面が高台の内側まで回転ナデを施す。底部は、回転糸切りをそのまま残す。

S B 03（第70図）

S B03は、S B02の北側に存在する。加工段、建物の方位ともS B02 aより18度ばかり東に振れて

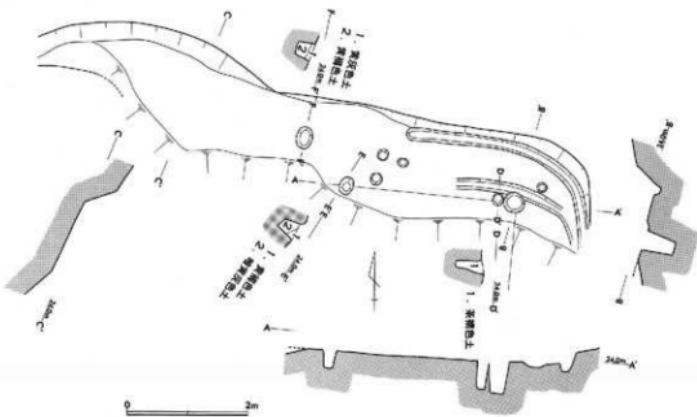


第74図 II区 SB08・09実測図

いる。建物は、桁行き2間、の建物と考えられる。建物規模は、桁行きで4.4mである。柱間寸法は、2.0mである。柱穴は、径40cm、深さ10cm前後である。

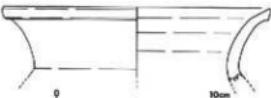
S B 0 4 (第 7 0 図)

S B04は、S B02、S B03の北側に存在する。加工段の方位は、S B02 aより30度ばかり東に振れている。掘立柱建物跡は、a、b 2棟存在する。建物 aは、桁行き2間以上の建物と考えられる。建物規模は、桁行きで43mである。柱間寸法は、桁行きで2.0mである。柱穴は、径50cm、深さ45cm前後である。建物 bは、桁行き2間以上、梁間1間以上の建物と考えられる。建物規模は、桁行きで2.2m、梁間で1.4mである。柱間寸法は、桁行きで1.0m、梁間で1.0mである。柱穴は、径25cm、深さ27cm前後である。



第75図 III区SB10実測図

S B 0 3、S B 0 4 出土遺物（第71図 1、2、6）



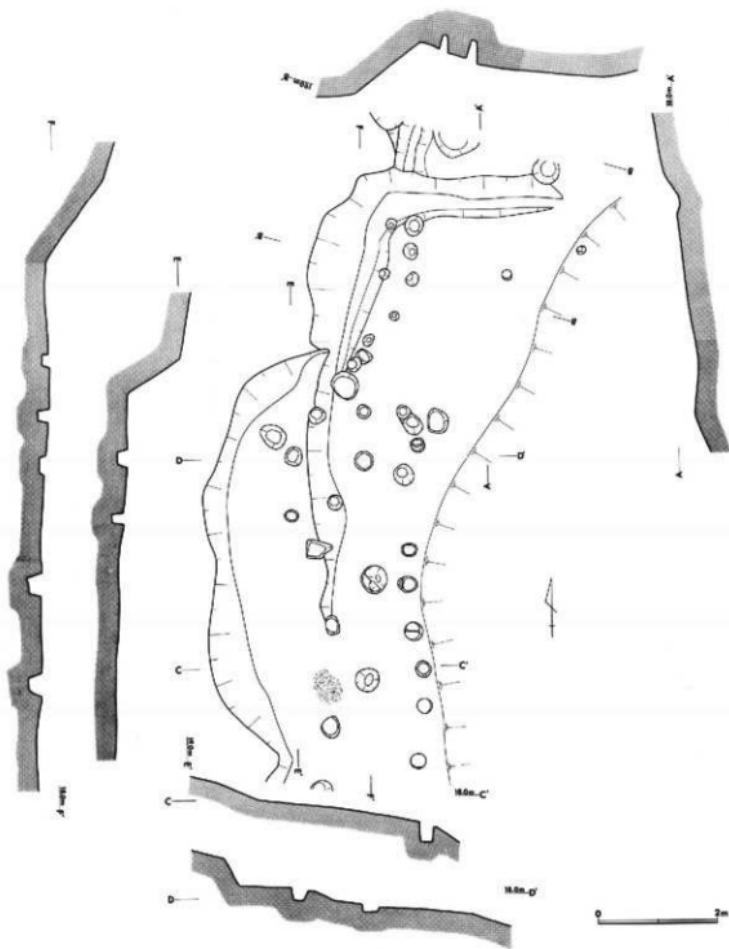
第76図 III区SB10出土遺物実測図

1は、復元口径14.5cm、残存高3.2cmを測る高杯の杯部である。杯部は若干内湾しながら逆「ハ」の字形に開く。調整は、内外面とも回転ナデで仕上げる。暗灰色を呈し、胎土は、小粒の砂粒を少量含むも良好である。焼成も良好である。2は、残存高4.5cm、脚径5.3cmを測る高杯である。脚部には、2方向に透かしを開けている。調整は、内外面とも回転ナデである。淡青灰色で胎土には5mm大の砂粒を含む。焼成は、やや不良である。6は、復元口径7.9cm、復元残存高7.9cmを測る平瓶である。肩部には、把手の変形したものと考えられるボタン状の粘土を張り付けている。肩部外面にはカキ目を施している。口縁部は、内外面とも回転ナデで仕上げる。灰黄色で胎土には若干の砂粒を含む。器表面には灰釉がかかる。焼成は、堅致である。

S B 0 5（第72図）

S B 0 5は、南側に開く谷にある第2調査区の東斜面に造成された加工段に造られた掘立柱建物跡である。南側には、S B 0 6、S B 0 7が存在する。

S B 0 5が存在する加工段は、2本の雨落ち溝が存在しており、前後2回にわたって造成されている事が分かる。この加工段は、概ね標高20m付近に造成されている。北西から南東に長く約6.5mばかり確認されている。幅は、北東から南西に1.8mばかり確認されている。雨落ち溝は、奥の壁際にあるものが幅20cm、深さ6~10cm、手前にあるものが幅30cm、深さ2~6cmを測る。土層の観察からは、この加工段は、手前から奥に拡張されたものと考えられる。掘立柱建物跡は、a、b、cの3棟が存在する。建物aは、桁行き2間の建物と考えられる。建物規模は、桁行きで3.2m柱間寸法は、桁行きで1.5mである。柱穴は、径20cm前後、深さ20~35cm前後である。建物bは、桁行き2間、の建物と考えられる。建物規模は、桁行きで2.7mである。柱間寸法は、1.3mである。柱穴は、径20~25cm、深さ10~30cm前後である。建物bは、桁行き2間、の建物と考えられる。建物規模は、桁行きで2.2mである。柱間寸法は、0.9mである。柱穴は、径20~25cm、深さ20~50cm前後である。

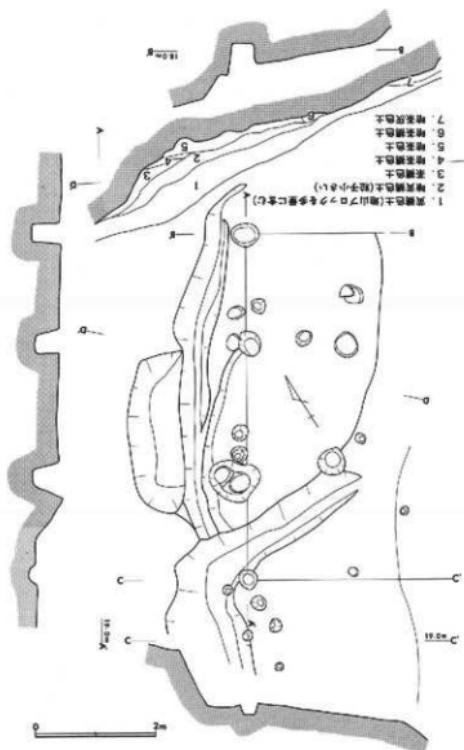


第77図 III区SB11・15実測図

S B 0 6 (第73図)

S B 06は、南側に開く谷にある第2調査区の東斜面に造成された加工段に造られた掘立柱建物跡である。南側には、S B 07が重複して存在する。北側には、S B 05が存在する。

S B 06の加工段は、概ね標高18~19m付近に造成されている。北西から南東に長く約13mばかり確認されている。幅は、北東から南西に3.5mばかり確認されている。雨落ち溝は、2本存在しており、奥の壁際にあるものが幅15~25cm、深さ6~14cm、手前にあるものが幅7~20cm、深さ2~12cmを測る。土層の観察からは、この加工段は、手前から奥に拡張されたものと考えられる。掘立柱建物跡は、a、b、cの3棟が存在する。建物aとbは、西と東に分かれて存在するが、aとcは、重複している。



第78図 ■区SB12実測図

に45m、東西に08m残存しているのみである。雨落ち溝は存在していない。掘立柱建物跡は、確認されていない。

SB08 (第74回)

S B08は、南側に開く谷にある第2調査区の北西斜面に造成された加工段である。北西側には、S B09が重複して存在する。東側には、S B10が存在する。

S B 08の加工段は、概ね標高24m付近に造成されている。幅15~45cm、深さ2~15cmの雨落ち溝が存在している。床面が流出しておりピットは、存在するものの、建物は、出来なかった。土師器の胴部破片が出土しているが、図示し得なかった。

SB09 (第74回)

S B09は、前記したS B08の北西側に重複する掘立柱建物跡である。S B09の加工段の壁は、東側では消滅している。雨落ち溝は、存在していない。建物跡は、概ね標高24m付近に存在している。

桁行き3間の建物と考えられる。建物規模は、桁行きで5.75mである。柱間寸法は、桁行きで1.8mである。柱穴は、径45~60cm前後、深さ26~45cm前後である。

BS10 (第75回)

物aは、桁行き2間、梁間1間以上の建物と考えられる。建物規模は、桁行きで4.8m、梁間で2.0mである。柱間寸法は、桁行きで2.0~2.5m梁間で2.0mである。柱穴は、径30~35cm前後、深さ10~50cm前後である。建物bは、桁行き3間の建物と考えられる。建物規模は、桁行きで2.8mである。柱間寸法は、1.0mである。柱穴は、径20cm、深さ10~20cm前後である。建物cは、桁行き2間の建物と考えられる。建物規模は、桁行きで4.0mである。柱間寸法は、2.0mである。柱穴は、径25

S807 (第7-9回)

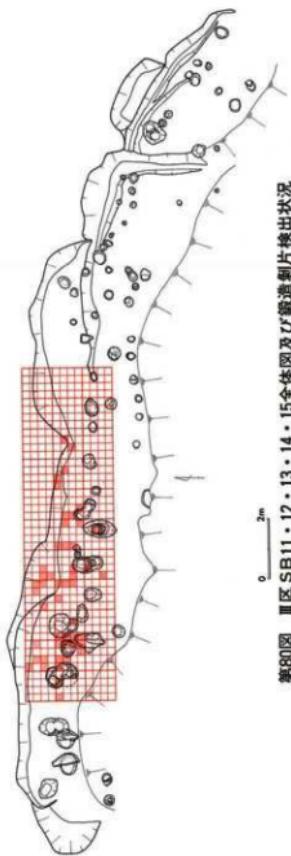
S B07は、南側に開く谷にある第2調査区の東斜面に造成された加工段である。北側には、S B06が重複して存在する。

S B07の加工段は、概ね標高19m付近に造成されている。S B07は、S B06によって切られており、南北

SB10は、南側に開く谷にある第2調査区の北斜面に造成された加工段に造られた据立柱建物跡である。西側には、SB08、SB09が存在する。



第79図 III区 SB13・14実測図



第80図 Ⅲ区SB11・12・13・14・15全体図及び縫造剥片検出状況

S B10が存在する加工段には、2本の雨落ち溝が存在しており、前後2回にわたって造成されている事が分かる。この加工段は、概ね標高24m付近に造成されている。西から東に長く約7.9mばかり確認されている。幅は、北東から南西に1.65mばかり確認されている。雨落ち溝は、奥の壁際にあるものが幅20cm、深さ2~7cm、手前にあるものが幅15cm、深さ7~10cmを測る。いずれも、西側では雨落ち溝は、消滅している。建物は、1棟確認された。桁行き2間以上の建物と考えられる。建物規模は、桁行きで3.0m以上である。柱穴は、径20~35cm前後、深さ30~50cm前後である。

出土遺物（第76図）

復元口径16.7cm、残存高4.4cmの壺の口縁部である。口縁部は、やや外反しながら立ち上がり、端部外面には、稜を造る。調整は、内外面とも回転ナデを施す。色調は、明るい灰色を呈す。胎土には、黒色の砂粒を顕著に含む。焼成は、ややあまい。

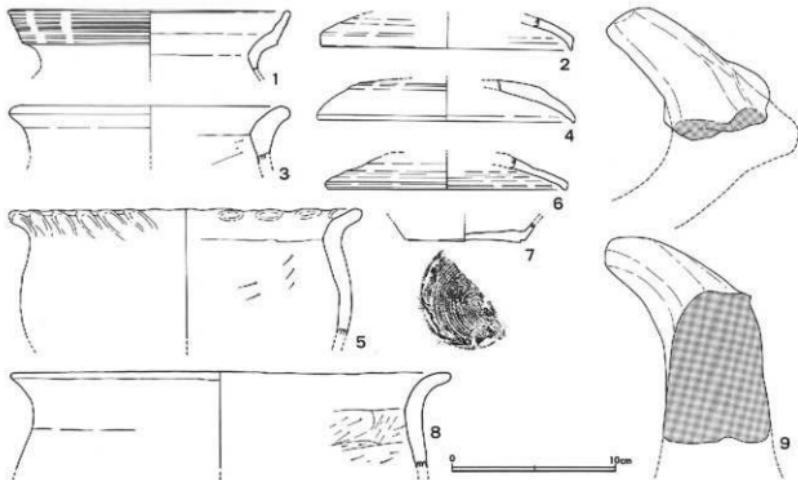
S B11（第77図）

S B11は、東側に開く谷にある第1調査区の東斜面に造成された加工段である。北側には、S B12、西側には、S B15、南側には、S B13、14が重複して存在する。

S B11は、東に開く南北に長い加工段でS B12を切っている。北側には、ほぼ直角に曲がるコーナーがある。このコーナーに沿って幅15~45cm、深さ5cmの雨落ち溝が存在する。コーナー付近での西側の壁高は、1.6mを測る。また、S B12との段差は0.21mである。床面の東側は、流失している。北側コーナー付近の床面の幅は、2.9m、1.4mをはかる。南北の床面の長さは、南側の境が不明瞭であるが、西側の壁から判断すると、約6.7m残存している。この段からは、多くのピットが検出されているが、建物になるものは、確認されなかった。

出土遺物（第81図1~4）

1は、弥生土器の壺の口縁部である。S B11の上層から出土した。復元口径16.4cm、残存高3.7cmを測る。口縁部には、面が作られており、8条の櫛描き沈線が施されている。調整は、内外面とも横ナデである。色調は、淡黄褐色で胎土には、砂粒を多く含む。焼成は、良好である。2は、復元口径15.1cm、残存高1.9cmを測る、須恵器の蓋杯の蓋である。口縁端部が、垂直に折れ曲がっており、内部には返りが付かないタイプである。調整は、内外面とも回転ナデである。暗灰色を呈し、胎土は、緻密である。焼成は堅致である。3は、復元口径17.0cm、残存高3.5cmの土師器の壺である。口縁部は、短く、厚く、やや外反しながら開く。調整は、口縁部が内外面とも横ナデ、頸部内面がヘラ削りが施さ



第81図 III区SB11～SB15出土遺物実測図 (1～4 SB11、5 SB12、6 SB13、7 SB14、8・9 SB15)

れている。4は、復元口径14.4cm、残存高3.0cmを測る須恵器の蓋杯の蓋である。口縁端部は、折れ曲がっていないが外面に稜を作る。内面に返りが就かないタイプである。調整は、内外面とも回転ナデを施す。天井部内面には、仕上げナデが認められる。灰色で胎土は、緻密である。焼成は、堅致である。

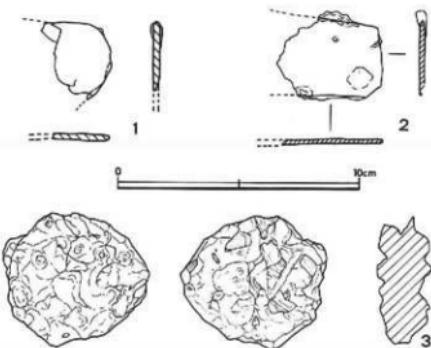
SB12 (第78図)

SB12は、SB11の北側にある建物である。SB11の加工段によってSB12の加工段が切られてういる。加工段は、SB11の加工段より若干東に振れている。

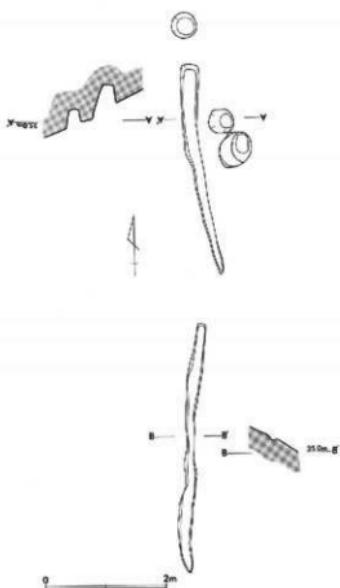
西側の壁高は、0.35mを測る。西側の壁には、長さ2.15m、幅0.45mの小さな段がある。また、西側の壁際には、一部に幅約25cm、深さ約5cm雨落ち溝が存在する。床面は、幅3m、長さ5.5m残存している。建物は、加工段に沿って桁行き3間の掘立柱建物跡が確認されている。建物規模は、桁行き6mで中間寸法は1.8～2.0mである。柱穴は、径35～40cm、深さ17～48cmである。

出土遺物 (第81図 5)

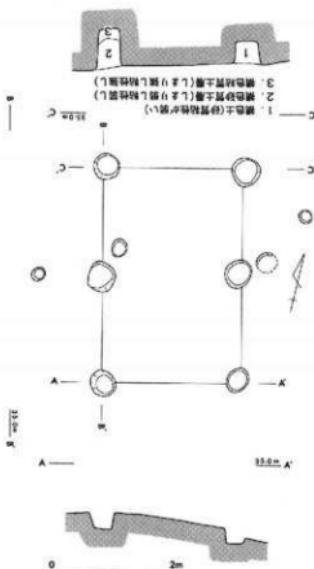
復元口径21.3cm、残存高7.7cmの土師器の壺である。口縁部は、短く、やや外反しながら開く。肩部は、あまり張らない。その最大径は、20cmで口縁端部より内側に位置する。口縁部には、指頭による押圧が認められる。調整は、外面が口縁端部から頸部にかけて横ナデ、内面がヘラ削りを施す。色調は、赤橙色で、胎土には、砂粒を多く含む。焼きは、あまい。



第82図 III区SB11出土遺物実測図



第83図 III区SB16・17実測図



第84図 III区SB18実測図

SB13(第79図)

SB13は、SB11から続く標高約18mの同一レベルの平坦面の南端に位置する。西側に検出された、加工段の壁が後述するSB14の壁より一段と奥に掘り込まれており、SB14を切って作られているものと考えられる。雨落ち溝は、存在しない。加工段の規模は、前述した壁の状況から、長さ6.9mで、幅は、3.2m残存している。掘立柱建物跡は、方位をほぼ南北にとる、桁行き3間、梁間1間以上の建物である。建物規模は、桁行き6.1m、梁間2.5m以上である。柱間寸法は、桁行き1.8m、梁間1.8mである。柱穴の規模は、桁行きで径60~80cm、深さ55~85cm、梁間で径35~40cm、深さ38cmである。

SB13は、調査途中に於いてスラグ等が出土しており、調査指導で穴沢氏から鍛冶関係の遺構の可能性を指摘され、床面から約10cm上から全面に25cm角の方眼を設定して覆土をサンプリングし鍛造剥片の検出を試みた。この結果、量は少ないもののかなりの区画に於いて鍛造剥片が検出され、SB13が鍛冶関係の遺構であることが確認された。なお、北西のコーナー付近からは、長円形の炭化物が詰まったピットやが確認されている。

桁行きの柱穴は、径が大きく、深さも深い。このことから、長い柱を立てた、高い建物が建っていたことが推定される。火を扱う鍛冶関係の遺構としては、至極当然の事かも知れない。

出土遺物(第81図6)

復元口径14.4cm、残存高2.0cmを測る須恵器の蓋杯の蓋である。口縁端部は、折れ曲がっていないが外面に稜を作る。内面に返りが就かないタイプである。調整は、内外面とも回転ナデを施す。灰黄色で胎土には、若干の小砂粒を含む良好である。焼成は、堅致である。

S B14 (第79図)

S B14は、S B11から続く同一レベルの平坦面の南側に位置する。北にS B11、南にS B13が重複して存在する。S B11との前後関係は、不明であるが、S B13よりは古いものと考えられる。雨落ち溝は、存在しない。加工段の規模は、長さ5m以上と推定され、幅は、3.2m残存している。掘立柱建物跡は、方位をほぼ南北にとる、桁行き3間の建物である。建物規模は、桁行き6.2mである。柱間寸法は、桁行き1.8mである。柱穴の規模は、径40~50cm、深さ40~67cmである。

S B13と同じく床面から約10cm上から全面に25cm角の方眼を設定して覆土をサンプリングし鍛造剝片の検出を試みた。この結果、かなりの量は少ないものの区画に於いて鍛造剝片が検出され、S B14も鍛冶関係の遺構であることが確認された。なお、北西のコーナー付近からは、長円形の炭化物が詰まつたピットや焼けた石2が確認されている。

桁行きの柱穴が、径が大きく、深さも深いことは、S B13と同様である。

出土遺物 (第81図7)

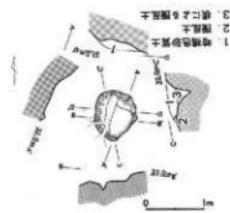
復元底径71cm、残存高11cm測る土師器の杯である。調整は、内外面とも回転ナデである。底部外面には、回転糸切り痕をそのまま残す。色調は、黄灰色で胎土には、若干の小砂粒を含むも良好である。焼成は、ややあまい。

S B15 (第77図)

S B15は、S B11の西側に存在する加工段である。S B11とは重複するが、その前後関係は、明らかにし得なかった。平坦面は長さ約6.5m、幅1.45m確認できた。雨落ち溝は、存在しない。また、掘立柱建物跡も確認し得なかった。南側で、径50cmの焼土面を確認しているが、鍛冶炉かどうかは、明らかではない。

出土遺物 (第81図8、9)

8は、復元口径26.5cm、残存高5.9cmを測る土師器の甕である。口縁部は、大きく外反する。胴部は、あまり張らないタイプと考えられ、その最大径は、下半部に位置するものと考えられる。調整は、口縁部外面が横ナデ、頸部以下内面がヘラ削りを施している。色調



第85図 III区 SK01実測図



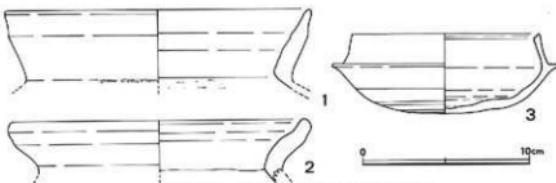
第86図 III区 SK02実測図



第87図 III区 SK03、SX01実測図

は、黄灰色で胎土には砂目が多い。焼成は、良好である。

9は、土師質の獣手形土製支脚の、破片である。二股に分かれた土器を支える部分のうち、右側にある。先端から、基部に向かって9cm、高さ12.

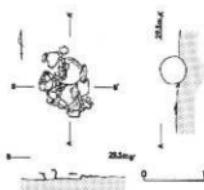


第88図 III区 SS01出土遺物実測図

2cm残存する。黄灰色で、胎土には、砂目が多い。

SB11、15出土鉄関係遺物（第82図）

SB11、15の覆土中からは、鐵滓、銅滓の他用途不明の鉄製品が出土している。1、2は、厚さ2~3mm、平たい鉄片である。1は、 2.7×2.3 cmの角の取れた丸い形状をとるが、2は、 3.1×4.9 cmの長方形である。いずれも、縁辺には、たがね痕が認められる。3は、 5.3×5.9 cm、厚さ2.3cmを測る腕形滓である。A面には、鉄錆が認められ、B面には、小石や木炭片が付着している。両面とも、磁石に反応する。



第89図
III区西斜面土器だまり実測図

SB16、17（第83図）

SB16、17は、第1調査区の東斜面の上部で検出された。ちょうどSB11~15の加工段の上方にありし、標高25m付近に位置する。SB16は、南北に幅20m、深さ18cm長さ4.1mの雨落ち溝だけが検出されている。

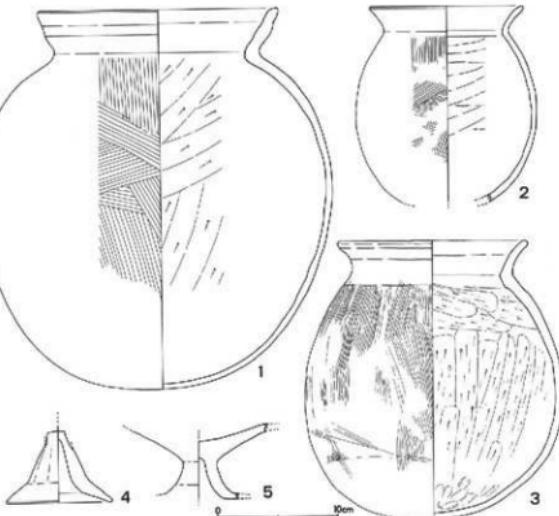
SB17は、SB16の北側にあり、南北に幅25cm、深さ32cm長さ3.5mの雨落ち溝とピットが検出されている。

SB18（第84図）

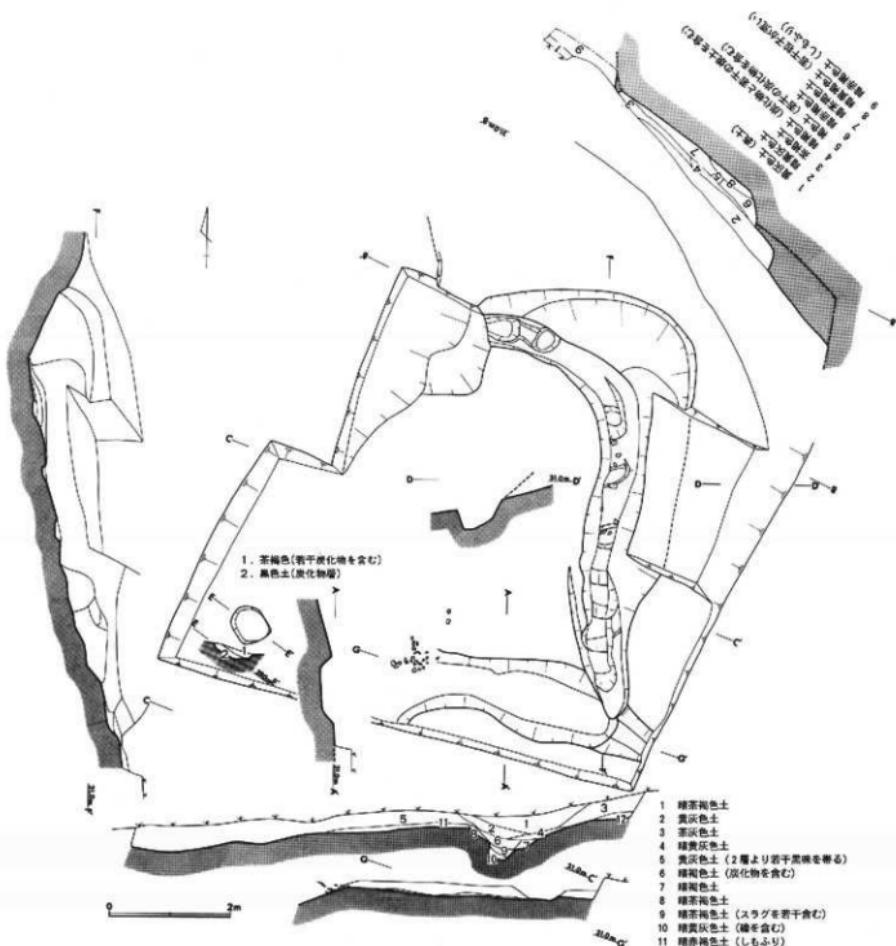
SB18は、第1調査区の東西に長い尾根のほぼ中央南よりに位置している。標高35m付近に存在している。1間×2間の東西に長い掘立柱建物跡である。建物規模は、桁行き4m、梁間2.6mである。柱間寸法は、桁行き1.8m、梁間2.2mである。柱穴の規模は、径45cm、深さ27cmである。

南側の斜面から弥生土器が検出されており、弥生時代の所産の可能性がある。

SK01（第85図）



第90図 III区第3調査区西斜面土器だまり出土遺物実測図



第91図 II区 SS01実測図

第3調査区の西に開く斜面の中腹の1号横穴墓の東側、標高32m付近に位置する焼土坑である。不整円形で径cm、深さcmを測る。

S K 0 2 (第8 6図)

第3調査区の西に開く斜面の中腹の1号横穴墓の西側、標高34m付近に位置する焼土坑である。不整円形で径cm、深さcmを測る。

S K 0 3 (第8 7図)

第1調査区の尾根の頂に位置する焼土坑である。西側の斜面には、2号、3号横穴墓が存在する。また、南側には、南北に溝が走っている。標高36m付近に立地する。台形を呈す。長辺1.1m、短辺0.8m、幅0.8m、深さ20cmを測る。この土坑内及び周辺からは須恵器の胸部破片が検出されている。

S X 0 1 (第6 8図)

S X 01は、S I 08、S I 09を切って存在している。長方形を呈し、 0.35×1.5 mを測る。土坑墓と考えられる。S X 01からは、須恵器片が検出されている。

S S 0 1 (第9 1図)

第3調査区の南側から検出された道路跡である。地山に掘り込まれた、北東から南東に、西から東に延びる2本の溝状の遺構が尾根の鞍部付近で合流していた。このうち、北側のものは、底が階段状に成っており、小石や、土器細片などが検出された。底幅0.35m、延長7m確認された。南側のものは、底幅0.75m、延長4m確認された。両者とも、尾根を越えて第2調査区に向かっており、第3調査区と第2調査区の集落間を結ぶ間道であったと考えられる。南側の道路跡の西端からは、古墳時代中期の土器片が集中して検出されており、この時期に使用されていたものと考えられる。

出土遺物 (第8 8図)

1、2は、土師器の壺である。1は、復元口径18cm、残存高4.6cmを測る口縁部の破片である。「く」の字に開く口縁の端部外面には、段が付く。調整は、口縁部内外面が横ナデを施す。頸部以下の調整は、外面がハケ、内面にヘラ削りが施されている。黄赤褐色を呈す。胎土には、2mm大の砂粒を含む。2は、復元口径、17.5cm、残存高3.9cmを測る口縁部の破片である。「く」の字に開く口縁の端部付近は、若干内湾する。調整は、口縁部内外面が横ナデを施す。頸部以下の調整は、内面にヘラ削りが施されている。茶褐色を呈す。胎土には、砂粒を多く含む。3は、須恵器の蓋杯の杯である。復元口径111cm、復元受け部径13.4cm、器高4.7cmを測る。口縁端部には、段を有す。調整は、外面底部が回転ヘラ削り、体部から口縁部にかけて回転ナデ、内面が回転ナデが施されている。

西斜面土器だまり (第8 9図)

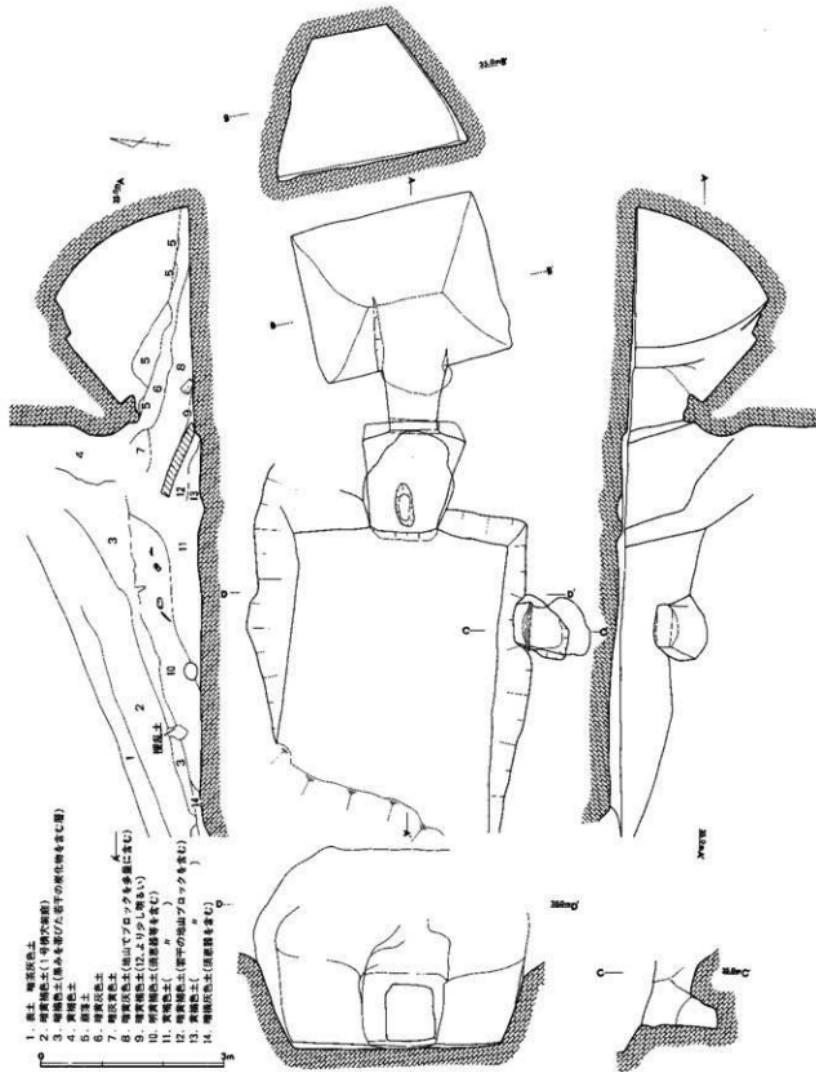
S K 0 1付近の標高295m地点で検出された。土師器壺3等が、集中して検出された。

出土遺物 (第9 0図)

1~3は、「く」の字口縁の壺である。いずれも、胸部最大径を中央より下にとる。1は、口径193cm、器高309cm、最大径286cmを測る。2は、口径122cm、最大径147cm、残存高160cmを測る。3は、口径148cm、器高228cm、胸部最大径208cmを測る。調整は、いずれも口縁内外面が横ナデ、体部外面がハケ目、内面がヘラ削りである。4、5は、高壺の破片である。4は、脚端径86cm、脚高115cmを測る。脚端部付近は、内外面とも横ナデ、その他はヘラ削りを施す。5は、脚部と杯部の破片である。調整は器面剥落の為不明である。

1号横穴墓（第92図）

1号横穴墓は、第3調査区に存在する。西に開く谷に位置しており、標高40mの尾根の近くに構築されている。1号横穴墓が存在する後背の尾根は、盛り上がっており、あたかも後背墳丘を思わせるものがあった。この横穴墓からは、南から北に入り込む狭長な谷を挟んで西側に位置する臼コクリ遺跡の丘陵及び第3調査区の集落跡が見える程度で必ずしも見晴らしが良い場所とは考えられない。



第92図 Ⅲ区 1号横穴墓実測図

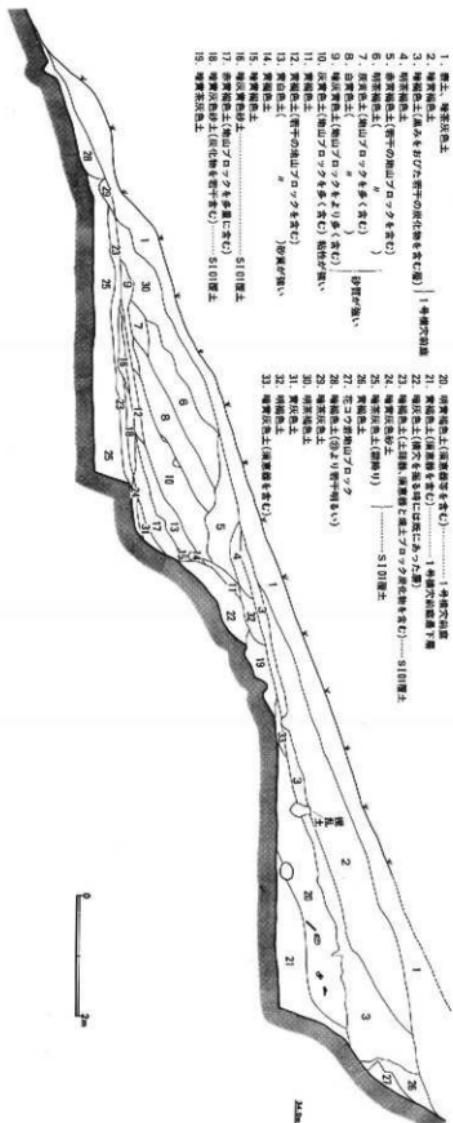
調査は、前述したように尾根が盛り上がっていたため、横穴墓の後背墳丘の可能性もあると考えて、この盛り上がりと、西と東の斜面にトレーナーを設定して行った。この結果、西側の斜面から横穴墓の存在を確認するに至った。後背墳丘の可能性を考えた尾根の盛り上がりは、自然地形であることが確認された。しかしながら、岩屋口北遺跡の横穴墓群、後述する第1調査区の横穴墓群は、こうした地形の盛り上がりを後背に持つおり、横穴墓の立地を考えるとき、単なる偶然の一一致とは考えられない。多分に後背立地を意識したものであったことが思料される。

横穴墓の調査は、前庭部と考えられた土層の落ち込みの南半分を掘り下げ、やがて、ベルトを中央に残して北側も掘り進めた。

セクションベルトによる土層の観察から（第93図）は、前庭部の土層に特に乱れはなかった。基本的に花崗岩の風化土が堆積していたが、ほぼ中央に堆積していた第3層は、暗褐色を呈し、炭化物を混入する層で安来平野の横穴墓に共通して見られる層であり注目された。また、特筆すべきは、前庭部の前方の地山が落ち込むあたりには、地山の傾斜に沿うように何層にも谷側に向かって堆積していたことである。これは、明らかに横穴墓の構築に際して、出た排土を前庭部の前方に埋土したものである。従来の横穴墓の調査は、ややもすると横穴墓本体の調査で終了する傾向にあるが、横穴墓の構築に際して前庭部の前方に排土を埋土する事例が明らかになったことで、今後の横穴墓の調査に際して注意を喚起するものとなった。

前庭部は、主軸を $N - 88^{\circ} - E$ にとり、尾根と直交するように掘

1. 黄土、暗褐色土
2. 暗褐色土
3. 暗褐色土（風化した岩の風化物を含む層）——1号横穴墓
4. 暗褐色土
5. 暗褐色土（岩の地山ロックを含む）
6. 暗褐色土（岩の地山ロック多く含む）
7. 暗褐色土（岩の地山ロック多く含む）
8. 白色土
9. 暗褐色土（岩の地山ロック多く含む）
10. 暗褐色土（岩の地山ロック多く含む）
11. 黄褐色土
12. 黄褐色土（岩の地山ロックを含む）
13. 黄褐色土
14. 黄褐色土
15. 黄褐色土
16. 暗褐色土（岩の地山ロック多く含む）
17. 暗褐色土（岩の地山ロック多く含む）
18. 暗褐色土（岩の地山ロック多く含む）
19. 暗褐色土（岩の地山ロック多く含む）
20. 暗褐色土（炭化物を含む）——1号横穴墓下層
21. 黄褐色土（岩の地山を含む）——1号横穴墓下層
22. 黄褐色土（岩の地山を含む）
23. 黄褐色土（岩の地山を含む）
24. 黄褐色土
25. 暗褐色土（岩の地山）
26. 黄褐色土
27. 暗褐色土（岩の地山）
28. 黄褐色土（岩の地山）
29. 黄褐色土
30. 黄褐色土
31. 黄褐色土
32. 黄褐色土
33. 暗褐色土（炭化物を含む）



第93図 1号横穴墓内地盤土層断面図

り込まれている。前庭部の規模は、奥壁床面で幅3.5m、奥から先端までの距離m以上と大形である。羨道部との境は、前庭部側が一段低くなっている。床面は、若干の凹凸があるもの、ほぼ平らに仕上げている。前庭部からは、大量の須恵器の他、鉄刀2、精鍊滓等が出土した。

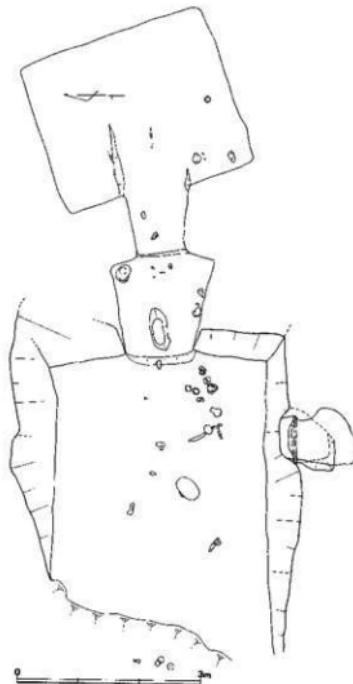
羨道部は、奥側で幅1.65m、前庭側で幅1.1m、長さ1.65mを測る。平面形は、台形を呈している。天井部は、既に失われており、立面形を知る由もないが、側壁は、ほぼ垂直に立ち上っている。調査時には、玄門の境までぎっしりと土砂が詰まった状態であった。この土砂を取り除くと、玄門部との境には、縦115cm、横92cm、厚さ15cmの荒島石の長方形に加工された閉塞石が前庭部側に倒れていた。前庭部近くの床面の中央には、径70×30cm、深さ12cmのピットが存在する。このピットは、玄室に向けて傾斜しており、閉塞装置を支える施設の存在をうかがわせた。羨道部からは、北奥コーナーから須恵器（横瓶、高台杯）が、閉塞石の下から精鍊滓が出土した。

玄門部は、羨道部よりさらに段を付け8cm程高くなっている。玄門部の幅は、羨道側で0.8m、玄室側で1.1mを測る。長さは、左右で異なっており、北側の側壁で1.0m、南側の側壁で1.1mを測る。平面形は台形を呈している。調査時には、土砂が詰まった状態であった。

玄室は、奥壁が3.0m、北側壁が2.5m、南側壁が2.6mのいびつな長方形の平面形を呈している。玄門の項で前述したように、玄門の左右の側壁の長さが異なっていることから、前壁は、左右が一直線にはならない。玄室の主軸は、前庭のそれとは若干異なり、N-73°-Eである。玄室の形態は、四面の壁と天井部の間に塙のない、疑似四注式家形で、平入りである。床面から棟線までの高さは、2.2mを測る。調査時には、玄門の天井から奥壁にかけて緩やかに傾斜しながら土砂が堆積していた。また、その上には、天井の崩落土が堆積していた。玄室内からは、人骨片、須恵器壺、刀金具片等が出土した。

出土遺物（第95図、第96図、第98図、第99図、第100図）

第95図1、2は、須恵器横瓶である。1は、口径10.7cm、胴部長径27.0cm、同短径20.7cm、器高22.2cmを測る。羨道部から出土した。口縁部は、直立気味に立ち上がり、端部近くで外反する。口縁端部外面には、0.7cmの面を作る。口縁下端と頸部には、竹管による窯印が3つ認められる。色調は、黒灰色で胎土は、緻密である。焼成は、堅致である。2は、口径12.5cm、胴部長径39.4cm、同短径26.0cm、器高28.7cmを測る大形品である。前庭部から出土した。口縁部は外反しながら立ち上がる。口縁端部外面には、0.9cmの面を作る。肩部には、ヘラ描きの窯印が認められる。灰色を呈す。胎土は、緻密で

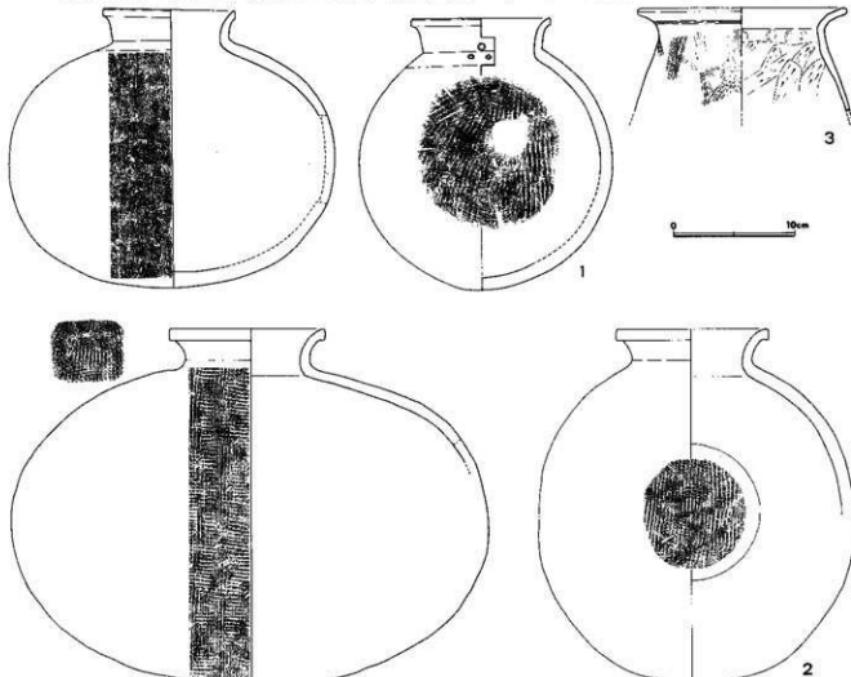


第94図 Ⅲ区1号横穴墓遺物出土状況

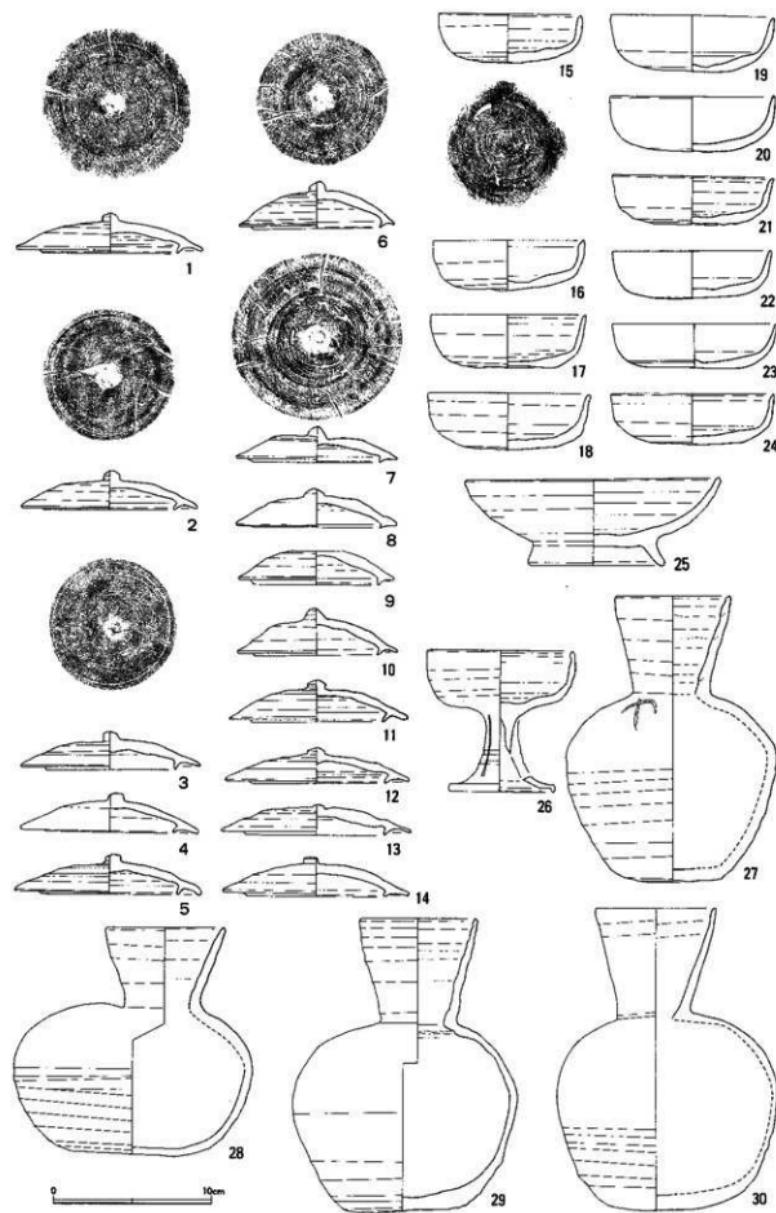
焼成は良好である。1、2とも口縁部は、内外面回転ナデを施す。肩部以下外面は、平行タタキの後カキメ調整を施す。頸部以下内面は、1が同心円タタキの後ナデ、2が同心円タタキを行っている。

第95図3は、口径16.4cm、残存高8.5cmを測る土師器の蓋である。前庭部から出土した。「く」の字に折れ曲がる口縁を有し、胸部は下彫れる。胸部下半部は、欠失する。調整は、口縁部内外面とも横ナデ、頸部以下胸部外面に縦ハケが施されている。頸部内面には、指頭による圧痕が、胸部内面には、ヘラ削りが認められる。胎土は、やや粗く、色調は橙褐色を呈す。

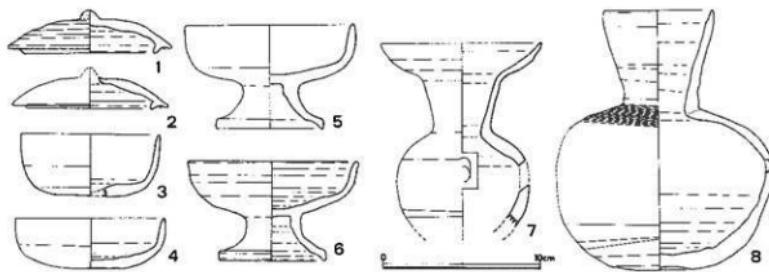
第96図1~14は、前庭部出土の須恵器蓋杯の蓋である。9を除いていずれも天井部外面に擬宝珠状や乳頭状のつまみを有している。器高は、総じて低く、口径も小さく小振りな土器である。口縁の内側に付く返りは、口縁部より下に出ている。調整は、総じて天井部外面が回転ヘラ削りの後回転ナデ、口縁部外面から天井部内面にかけて回転ナデを施している。暗灰色を呈すものが多い。1は、口径11.6cm、器高2.5cmを測る。天井部外面には、「×」印のヘラ記号が認められる。胎土は、緻密で焼成は、良好である。2は、口径11.0cm、器高2.4cmを測る。天井部外面には、「×」印のヘラ記号が認められる。胎土は、緻密で焼成は、良好である。3は、口径11.3cm、器高2.3cmを測る。天井部外面には、「×」印のヘラ記号が認められる。胎土は、緻密で焼成は、良好である。4は、口径11.1cm、器高2.4cmを測る。天井部外面には、ヘラ起こし痕がのこる。つまみは、天井の中心からずれている。胎土は、緻密で焼成は、ややあまい。5は、口径11.7cm、器高2.45cmを測る。胎土は、緻密で焼成は、良好である。6は、口径9.6cm、器高2.9cmを測る。天井部外面には、つまみを中心にして「#」印のヘラ記号が



第95図 II区 1号横穴墓出土遺物実測図



第96圖 Ⅲ區1號橫穴墓出土遺物實測圖(2)



第97図 Ⅲ区1号横穴墓前部前方付近出土遺物実測図

認められる。胎土は、緻密で焼成は、良好である。7は、口径10.0cm、器高2.2cmを測る。天井部外面には、つまみを中央に「#」印のヘラ記号が認められる。胎土は、緻密で焼成は、良好である。8は、口径10.0cm、器高2.4cmを測る。胎土は、緻密で焼成は、良好である。9は、復元口径9.7cm、残存高2.1cmを測る。胎土は、緻密で焼成は、良好である。10は、口径9.9cm、器高2.9cmを測る。天井部外面には、つまみを中央に焼成前に刻まれたと考えられる、「#」印のヘラ記号が認められる。天井部内面には、指頭による圧痕がみとめられる。胎土は、緻密で焼成は、良好である。11は、口径11.2cm、器



第98図 Ⅲ区1号横穴墓出土鐵製品実測図
(1. 鉄鎌 2. 刀子 3. 刀装具)

は、ヘラ起こし痕が明瞭に残る。底部内面には、指頭による圧痕が認められる。灰色を呈し、胎土には0.6cm大の砂粒を含むも焼成は、良好である。17は、口径9.6m、器高3.3cmを測る。淡灰色を呈し、胎土には0.2cm大の砂粒を含むも焼成は、良好である。18は、口径10.2cm、器高3.5cmを測る。淡灰色を呈し、胎土には長石粒を若干含む。焼成は、良好である。19は、口径10.3cm、器高3.5cmを測る。底部外面上には、ヘラ起こし痕が明瞭に残る。底部内面には、指頭による圧痕が認められる。灰色を呈し、胎土には0.2cm大の砂粒を含むも焼成は、良好である。20は、口径10.2cm、器高3.4cmを測る。底部外面上には、ヘラ削りの後軽くナデしている。淡灰色を呈し、胎土、焼成とも良好である。21は、口径10.0cm、器高3.0cmを測る。黒灰色を呈し、胎土には0.15cm大の砂粒を含むも焼成は、良好である。22

は、口径9.9cm、器高2.9cmを測る。暗灰色を呈し、胎土、焼成とも良好である。23は、口径10.3cm、器高2.7cmを測る。淡灰色を呈し、胎土、焼成とも良好である。24は、口径10.1cm、器高3.1cmを測る。底部外面は、回転ヘラ削りの後横ナデを施している。淡灰色を呈し、胎土には0.1cm大の砂粒を含むも焼成は、良好である。

第96図25は、羨道部から出土した須恵器の高台付の杯である。口径15.6cm、器高5.5cm、高台径8.1cm、高台高1.2cmを測る。杯部は、大きく外方に開き、高台は、高くしっかりと踏ん張っている。高台は杯部成形後に貼り付けている。見込みには、径8.5cmの重ね焼き痕が認められる。調整は、回転ナデである。暗灰色で胎土、焼成とも良好である。

第96図26は、須恵器の小型高杯である。口径8.9cm、器高8.8cm、復元脚端部径6.4cm、脚最小径2.0cmを測る。口縁部は、ほぼ直立している。脚部の杯部との接合部あたりは、非常に細い造りとなっている。脚部には、3方に透かしが刻み込まれている。また、脚部には、2条の凹線が施されている。調整は、回転ナデである。暗灰色を呈し、胎土、焼成とも良好である。

第96図27は、玄室から出土した須恵器の直口壺である。口径7.0cm、器高17.8cm、頸部径4.8cm、胴部最大径13.5cmを測る。口縁部は、若干外方に開く。胴部最大径は、胴部の上半に位置し、底部は平らに仕上げている。肩部には、ヘラ描きが認められる。調整は、肩下部から底部にかけて回転ヘラ削りを施す他は、回転ナデである。暗灰色で胎土には、0.3cm大の砂粒をやや多く含む。焼成は、良好である。第96図28～30は、須恵器の平瓶である。いずれも若干外方に開く口縁部を有す。28は、胴部が平たい造りになっているが、他は、球形に近い。調整は、いずれも肩下部から底部にかけて回転ヘラ削りを施す他は、回転ナデである。28は、口径7.3cm、器高14.25cm、頸部径4.2cm、胴部最大径14.4cmを測る。胴部最大径は、胴部のほぼ中央に位置し、底部は平らに仕上げている。淡黄灰色で胎土には、0.3cm大の砂粒をやや多く含む。焼成は、良好である。29は、口径7.2cm、器高18.4cm、頸部径4.8cm、胴部最大径14.1cmを測る。胴部最大径は、胴のほぼ中央に位置し、底部は平らに仕上げている。淡青灰色で胎土には、0.2cm大の砂粒をやや多く含む。焼成は、良好である。30は、口径7.4m、器高18.7cm、頸部径4.1cm、胴部最大径13.7cmを測る。胴部最大径は、胴部の中央より若干上に位置し、底部は平らに仕上げている。灰黒色で胎土、焼成とも良好である。

第97図は、前庭部前方出土の須恵器である。12は、須恵器蓋杯の蓋である。天井部外面に擬宝珠状や乳頭状のつまみを有しているタイプである。器高は、縦じて低く、口径も小さく小振りな土器である。口縁の内側に付く返りは、口縁部より下に出ている。調整は、天井部外面が回転ヘラ削りの後回転ナデ、口縁部外面から天井部内面にかけて回転ナデを施している。1は、口径10.0cm、器高2.7cmを測る。濃灰色で胎土、焼成とも良好である。2は、口径9.7cm、残存高2.0cmを測る。胎土には砂粒を多く含む。焼成は、良好である。3、4は、須恵器蓋杯の杯である。前述の蓋に対応するものである。口径は、小さめで器高は低い。底部は、ほぼ平らで、口縁部は、いずれも、直立気味に立ち上がっており。底部の切り放しは、ヘラ起こしであるが、最終的な処理は、回転ヘラ削りを行っている。3は、復元口径8.6m、器高3.8cmを測る。灰黄色を呈し、胎土は緻密であるが焼成は、あまい。4は、復元口径9.4m、器高3.1cmを測る。底部外面には、ヘラ起こし痕が残る。灰黄色を呈し、胎土には若干の砂粒を含む。焼成は、あまい。5、6は、短脚の小型高杯である。口縁部は、やや外側に開きながらほぼ直立する。脚端部外面には面が付く。調整は、全面にわたって回転ナデを施している。5は、復元

口径10.6cm、器高6.4cm、脚端部径6.7cm、脚上部径3.5cmを測る。灰色で胎土には若干の砂粒を含む。焼成は、良好である。6は、口径10.5cm、器高6.15cm、脚端部径6.6cm、脚上部径3.4cmを測る。灰色で胎土、焼成とも良好である。7は、小型のはそうである。底部を欠失する。復元口径10.0cm、残存高11.4cm、頸部径3.7cm、胴部最大径8.1cmを測る。調整は、胴部の下端に回転ヘラ削りが認められる他は回転ナデである。灰色で胎土には若干の砂粒を含む。焼成は、良好である。

第98図、99図、100図は、金属製品を取り上げた。第98図1は、鉄鎌である。茎は短く、鎌身の細長いタイプである。切先は、平らになるものと考えられる。鎌身の長さは、9.2cmを測り、その断面は、長方形である。茎の長さは1.5cmで断面は、方形を呈す。2は、刀子である。全長10.1cm、刀身長7.2cm、幅0.9cm、厚さ0.2cmを測る。茎は、長さ3.9cm、幅0.5cmを測る。幅は、茎尻まではほとんど変わらない。目釘は認められない。茎には、木質が残る。3は、破片であり、全形を窺い知る事は出来ないが鞘尻金具と考えられる。幅1.7cm、厚さ0.1cmの金板に厚さ0.15cm、高さ1.0cm以上の卵形の縁取りがなされている。第99図は、直刀である。前庭部前方から刀身の中央で折り曲げられた状態で出土した。茎尻を一部欠いている。残存長66.5cm、刀身の長さ56.4cm、幅2.8cm、最大厚0.8cmを測る。平造りをなし、かます切先である。茎との境には、金銅製の長径35cm、短径17cm長さ40cmのはばき金具が残存する。×線の所見では、片側で茎には、くり込みがあるように見える。目釘は、存在していない。

第100図も直刀である。前庭部から出土した。切先の一部を欠いている。推定全長73.6cm、残存長72.5cm、幅2.9cm、厚さ0.9cmを測る。平づくりである。茎との境界は、両闊タイプである。ただし、茎の厚みは0.6cmと刀身の厚みより、差がかなりある。茎の長さは、6.9cmで目釘穴は、存在していない。

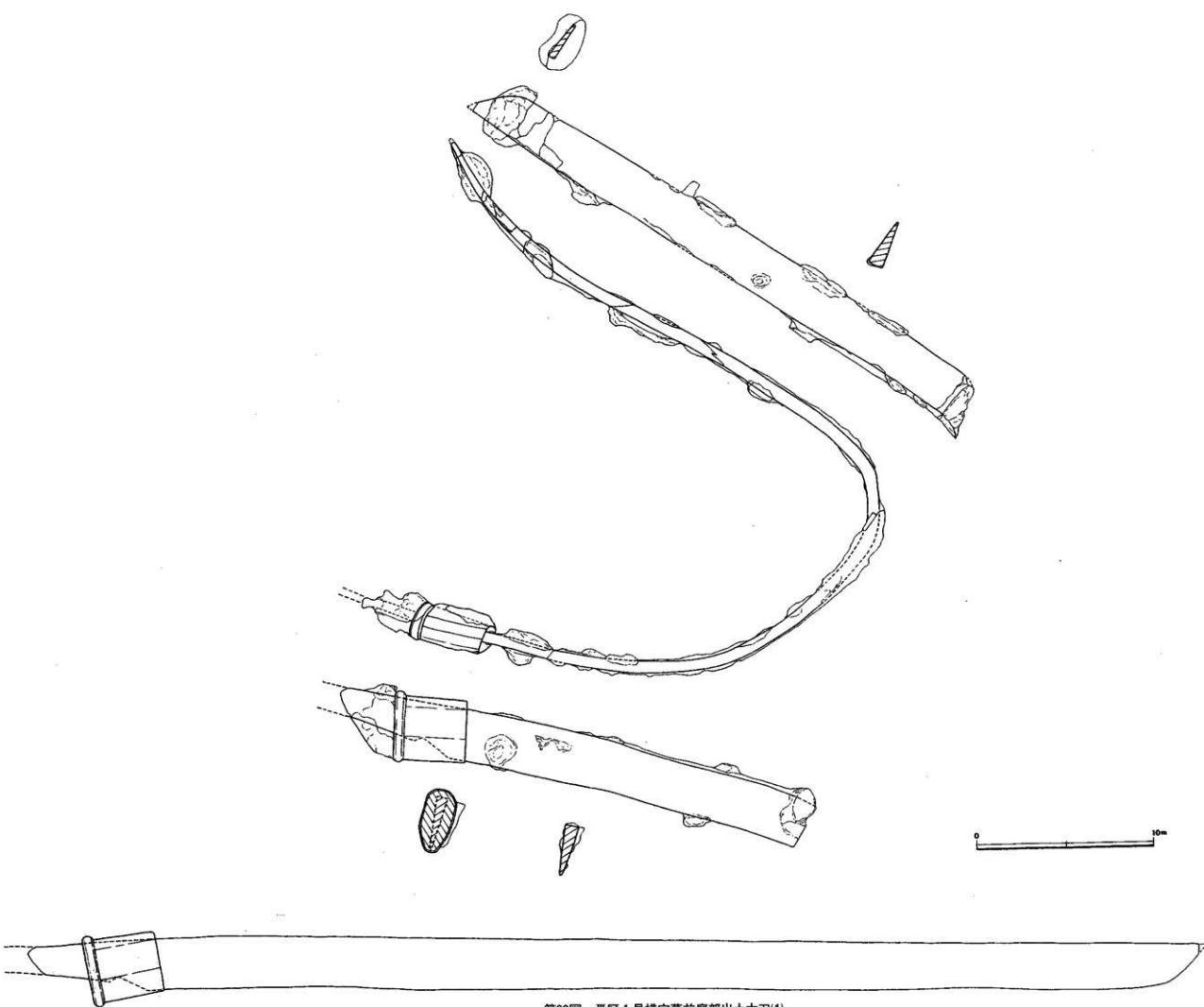
2号横穴墓（第101図）

東に大山・高麗山、南に佐久保の細長い谷、北に岩屋口北遺跡を望む標高40mの丘を頂点として東・南西・南東の3方に尾根が派生している。このうち尾根から南東に派生する尾根のつけね付近の西側斜面に2つの横穴墓が並んで開口している。このうち南側のものが2号横穴墓である。尾根を挟んで反対傾斜面には4号横穴墓か所在する。標高は床面で31mを測る。尾根の上から m程下かった位置にあたる。前庭部からの見通しは極めて悪く、眼下に小さな谷、北に岩屋口北遺跡をわずかに望むのみである。

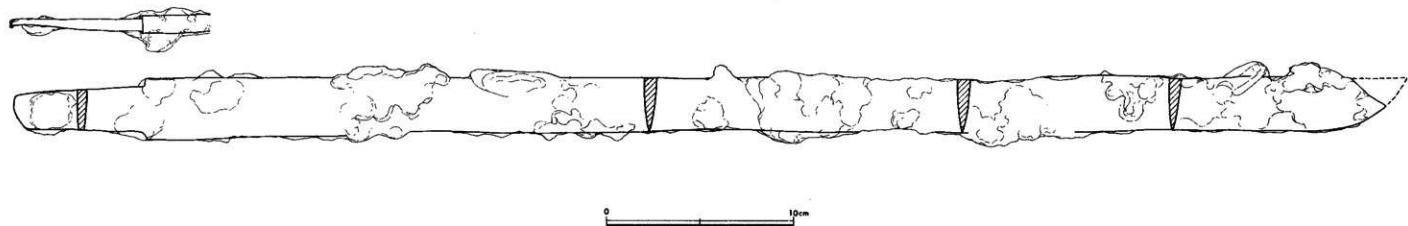
調査前の現地は雑木林であった。前庭部は完全に埋まっていたが、伐採後表土を剥いだところ覆土を検出した。前庭部・羨道は前庭部方向にベルトを設定し掘り下けた。玄門・玄室は玄室主軸方向にあわせ十字方向のベルトを設定して掘り下げた。玄室からは人骨が出土したが、この人骨は、井上先生に取り上げていただいた。遺構・遺物は写真撮影と実側図等による記録化を行った。

前庭部は、尾根に直交するかたちで掘り込まれている。主軸はN-77°-Eであり東西方向に近い。最も深いところで地山を2.6m地山を掘削して、幅約3.4m、長さ5.0m以上の長方形の前庭部床面を造り出している。床面は玄室から前庭部にかけて2°下方へと傾斜している。両側壁は90°でほぼ垂直にたちあがり、丁寧に整形されている。奥壁と側壁との境界は明瞭な直線で面されている。なお前庭部南側は幅約0.3m、長さ3.6m以上の細長いテラスか造られてる。前庭部のテラスは安来市高広遺跡・大分県市上ノ原遺跡でも知られているが、これほど大きいものではなく形態も異なる。

羨道は、前庭部の奥壁の中央より羨道が開口する。床面は奥壁測幅1.7m、前庭部測幅1.4m長さ1.4mの台形をしている。前庭部との段差はない。正面からみると、大井は崩落しているが側壁は内



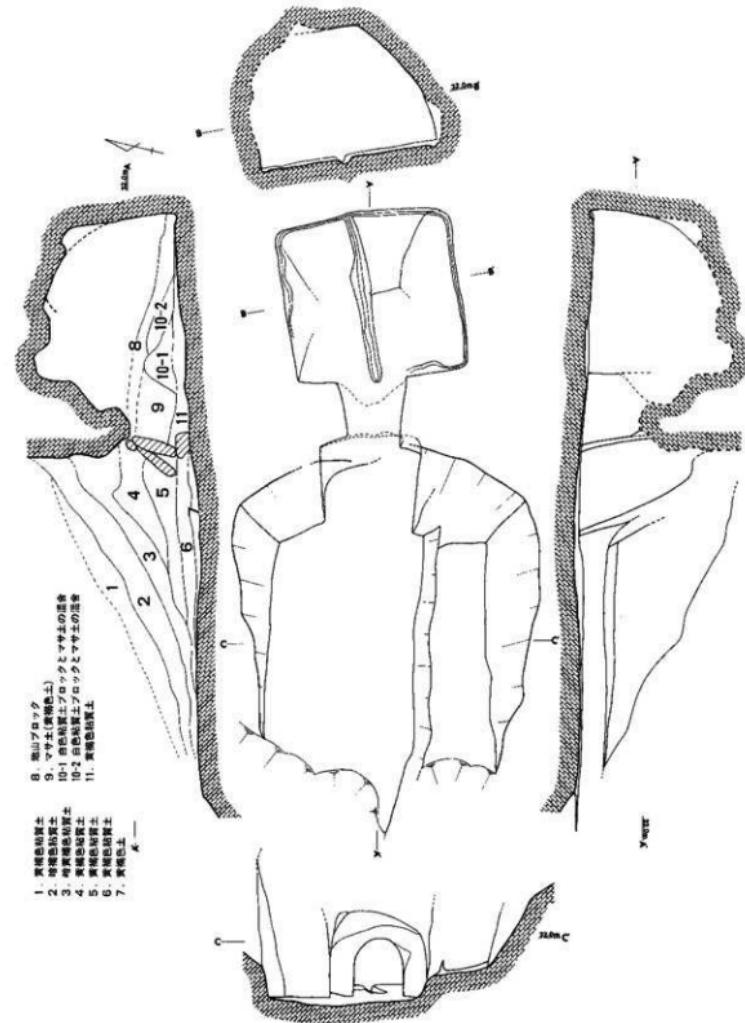
第99図 Ⅲ区1号横穴墓前部出土大刀(1)



第100図 Ⅲ区 1号横穴墓前庭部出土大刀(2)

湾の具合と地山の残り具合から、丸みを帯びた台形をしていたと考えられる。

閉塞は、粗く直方形に加工した40cm×40cm×20cm大の石を2個並べた上に、やはり、粗く加工した70cm×35cm×20cm大の板状の石4枚で閉塞している。石材はすべて荒鳥石を使用している。さらに隙間には大甕を大きい破片に割り、それを丁寧に詰めていることから、かなり密閉を意識していることがうかがえる。



第101図 Ⅲ区2号横穴墓実測図

玄門の床面は奥壁測幅1.1m、前庭部測幅0.9m長さ1.4mの台形をしている。高さは1mで、前庭部・玄室どちらから見ても整った釣鐘状を呈する。

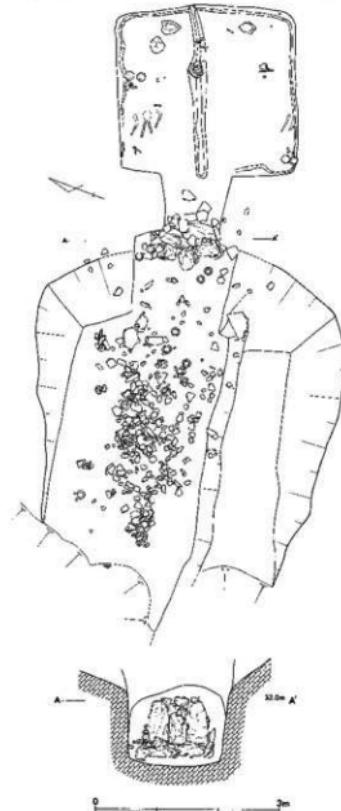
玄室の平面形プランは、奥行き2.6m幅2.8mを測る正方形に近い隅丸方形を呈する。主軸はN-Eであり、前庭部主軸とややズレている。4壁の際と中央には幅15cm×深さ10cmの排水溝が設けられている。

一方、大井は、縦断面が壁面のやや膨らむ三角形を呈す。天井部には横方向の長さ約1.3mの大棟が見られ、高さは2.1mをはかる。大棟は玄室の主軸とほぼ直交し、隣棟も同じく明瞭な直線で表出されている。隣棟の稜線は床の隅に向かってやや外側に膨らみながらのびている。形態的には、軒線がない疑似四注式平入りの形態に属する。

土層堆積状況(第101図)

前庭部・羨道部には多量の土砂が流入しており、完全に前庭部は埋まっていたので、前庭部主軸方向にベルトを設定して掘り下げた。床面上には黄褐色土(6・7層)がほぼ水平に近い状態で堆積していた。7層はしまりが非常に強く礫が多く含んでいる。6層は地山ブロックを多量に含みしまりがやや

強い。上面が水平であり須恵器がその面に沿って出土していること、板状の閉塞石の底がこの層の上面にのっていることから6層上面が最終埋葬時の床面であったと考えられる。その上層には玄室側が極端に厚い黄褐色土(4・5層)が堆積していた。5層は地山ブロックを含みしまりが弱い。地山ブロックは玄室側が低い傾斜をもった縦状に入っている。第4層は地山ブロックを少量含むしまりの弱い層である。土器はほとんど出てこない。この層の上面が閉塞石より高いことと堆積の状況から、4・5層は閉塞石が隠れるよう埋めたと考えられる。主軸に直交するセクションを観察したところ、テラス部分に堆積している層は5層より下層になることから、5層を埋める時にはすでにテラス部分は見えなくなっていたと考えられる。2・3層は黒みを帯びた層で傾斜をもつものほぼ均一の厚みで堆積している。3層はしまりが弱く黒みが強い層である。2層はしまりが弱く、下にいくほど色調が黒く、ある時期の表土と考えられる。3cm大の小礫を多く含み多量の須恵器片が検出された。また前庭部内両脇に直径60cm、深さ30cmの焼土坑を確認した。(第112図)土坑の縁が特に赤く焼けており、底部には炭化物が2cmの厚さで認められる。1層は黄褐色土である。しまりは非常に強い。



第102図 Ⅲ区2号横穴墓遺物出土状況

前庭部・羨道部の堆積状況と遺物出土状況を整理す

ると、7層が堆積→閉塞石（下）が置かれる→7層上面に須恵器杯身が置かれる→6層が堆積・テラスも埋まる→閉塞石（上）が置かれる→6層上面に蓋杯が置かれる→5・4層で羨道を埋めながら閉塞石の隙間に大甕を割って間に詰める→3・2層が堆積・完形の須恵器や破碎された大甕が破棄される・前庭部両脇で火を焚く・一定期間表土となる→1層が堆積、という経過が想定できる。

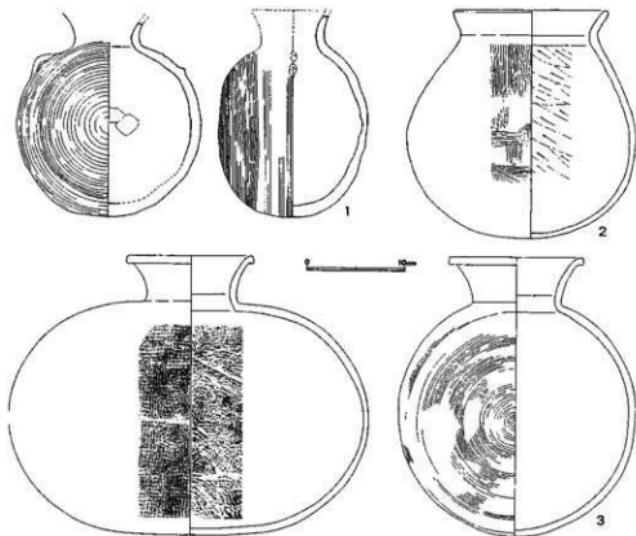
玄室内は天井が崩落したため地山で一番厚いところで床面から1m位の高さまで地山ブロックで埋まっていた。（8層）玄室の主軸を基準にして十字にベルトを設定して掘り下げた。最下層には黄褐色土（11層）がほぼ水平に近い状態で堆積していた。地山ブロックを含むしまりの強い層で、玄室内遺物はこの層の上面で出ることから、11層上面は追葬面の可能性がある。閉塞の裏側の11層中には最終閉塞に使用した大甕片が落ち込んでいる。このことから11層は2層に分層でき、玄室側の層の堆積したのち玄門部側に流入土が堆積している状況を調査時には見落した可能性も考えられる。10層は白色粘土ブロックとマサ土が混じる層である。10層-1より10層-2の方がブロックが小さい。10層は中央付近に山盛りに堆積しているため閉塞後の流入土とは考えられないこと、10層の直上の天井が崩落していることから天井の崩落土と考えられる。9層はしまりが弱いブロックを含まないマサ土である。10層が崩落したのち閉塞石の間から流入したものと考えられる。玄門・玄室の堆積状況と遺物出土状況を整理すると、11層（玄室側）が堆積→11層上面で追葬→閉塞時に玄門部に大甕片が落ち込む→11層（玄門側）が堆積→10層が天井から崩落→9層が流入→8層が天井から崩落、という経過が想定できる。

遺物出土状況（第102図）

前庭部では6個体分の大甕片・横瓶1点・完形の甕1点・無蓋長脚高杯2点・無蓋・短脚高杯2点・杯蓋7点・杯身6点を検出した。遺物はおおまかに2・3層中出土のものと5層中出土のものに分けられる。まず、5層中出土のものだが第104図7・9の杯蓋や104図18~20の杯身などを前庭部中央奥壁よりで検出した。その他の遺物はほとんど2・3層中から出土している。横断面でみると主軸ライン付近がくぼんでおり、平面でみても主軸ラインに沿って集中する。第113図6の大甕は3号横穴の閉塞にも使われている。テラスや焼土上坑内からは特に遺物は出土していない。（羨道・玄門）羨道部では完形の杯蓋4点、杯身5点、甕1点と破片資料の大甕を検出している。閉塞石を挟んで羨道部4~6層と玄門部11層から出土している。7層上面では第104図16の杯身を検出した。6層中には5cm大の大甕の小片がわずかに混入している。6層上面では第104図4・6・12の杯蓋3点、第104図一24の杯身1点10~30cmの大甕片が検出された。4・5層中では第104図11の杯蓋1点、第104図21の杯身1点、第104図26の甕1点と第113図一8の大甕片を検出した。これらは閉塞石の隙間を丁寧に埋めている。閉塞の状況から盗掘はうけていない。同一個体の大甕片が3号横穴の前庭部から出土している。（玄室）玄室内では杯蓋3点、杯身1点、提瓶1点、刀子3点、耳環5点、勾玉2点、切子玉2点、管玉2点、ガラス小玉7点、人骨体を検出した。玄室の遺物は11層上面で出土している。奥壁に向かって右手前の隅では右壁に沿うように完形の第104図3の杯蓋、第104図一14の杯身と人骨片が検出された。右奥の隅あたりには第105図2の刀子、第105図7・8の耳環、第105図10の勾玉、第105図12の切子玉、第105図13の菅玉、30cm大の石が1つ、人骨片が検出された。中央付近には漬れた状態で第103図2の土師器甕と第105図3の刀子が検出された。左奥隅の辺りには30cm大の石が2つ、壁に立て掛けるように第103図1の提瓶が検出された。左壁中央付近には完形の第104図1・2の杯蓋、第105図1-1の刀子、第105図5の耳環を検出した。第105

図4の耳環は頭蓋骨の中から出土した。左手前では人骨片が検出された。

出土遺物（第103図・第104図・第105図・第113図）



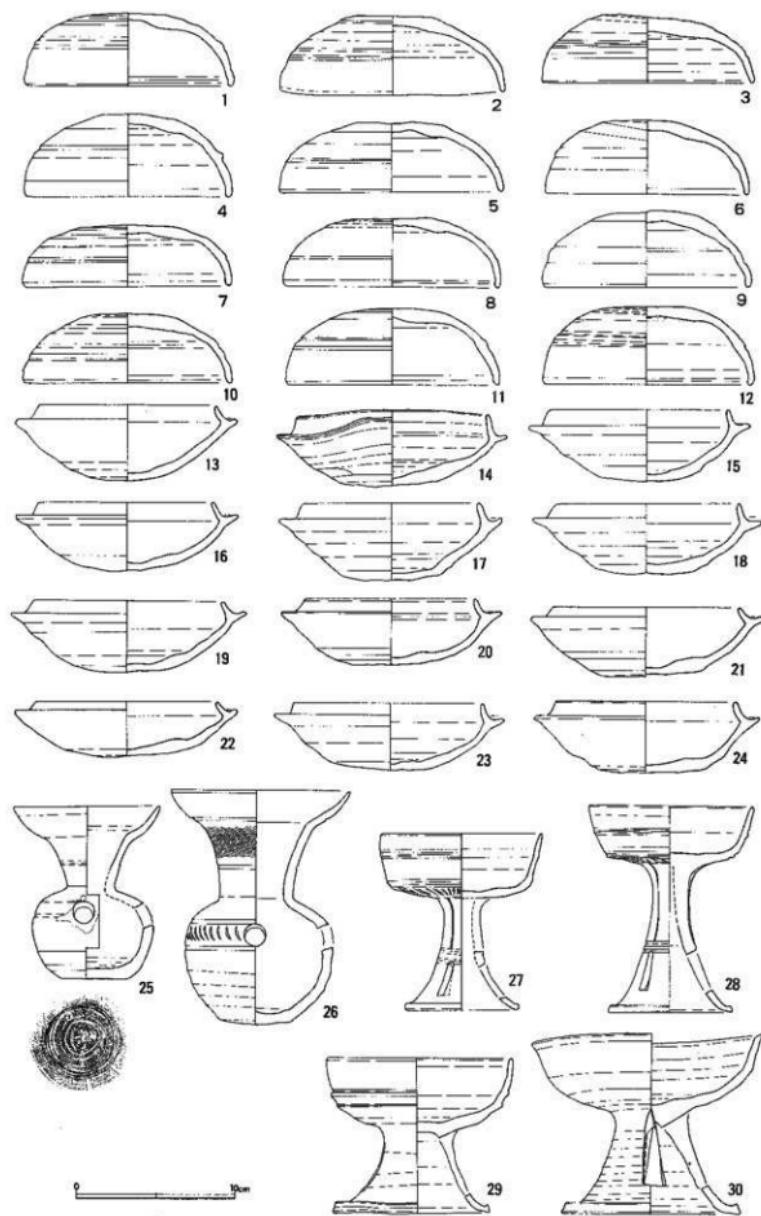
第103図 Ⅲ区2号横穴墓出土遺物実測図(1)

前庭部出土（第103図3・第104図7～13・15・18～26・28～30・第113図1～6・8）須恵器（第103図3・

第104図7～13・15・18～26・28～30・第113図1～6・8）

第104図7～10・12・13は、杯蓋である。

7は、完形で口径12.7cm、器高3.8cmを測る。調整は回転ヨコナデの後、天井部外面に粗い回転ヘラ削りを施す。肩部外面には2条の沈線が施し、これを低くナデつけることで突帯、稜を表現している。口縁内面は端部からさらに上方に沈線を1条めぐらす。細部は丸く段状を呈していない。大谷編年の出雲4期に該当すると考えられる。色調は内外面とも明るい灰色である。8は、口径13.2cm、器高4.3cmを測る。調整は回転ヨコナデの後、肩部外面には形骸化した1条の沈線かめぐる。口縁内面は端部からさらに上方に沈線を1条めぐらす。端部は丸く段状を呈していない。色調は明るい灰色である。9は、口径13.0cm、器高4.7cmを測る。天井部には粗い回転ヘラ削りを、内面には静止してナデを施している。肩部外面には2条の沈線を施し、これを強くナデつけることで突帯、稜を表現している。肩部内面にも沈線が1条めぐる。端部は丸く段状を呈していない。色調は明るい灰色である。10は、完形で口径12.8cm、器高4.3cmを測る。調整は回転ヨコナデの後、天井部外面を中心を残し周辺を3周回転ヘラケズリしている。肩部外面には2条の沈線を施し、これを強くナデつけることで突帯、稜を表現している。肩部内面にも沈線が1条めぐる。端部は丸く段状を呈していない。肩部内面には沈線が2条まわる。大谷編年の出雲4期に該当すると考えられる。12は、完形で口径13.2cm、器高4.8cmを測る。調整は回転ヨコナデの後、天井部外面には粗い回転ヘラ削りを施している。肩部外面には2条の沈線を施し、これを強くナデつけることで突帯、稜を表現している。肩部内面にも沈線が1条めぐる。端



第104図 Ⅲ区2号横穴墓出土遺物実測図(2)(1~3・14、玄室、4~6・16~17・27、玄門部、その他前庭部)

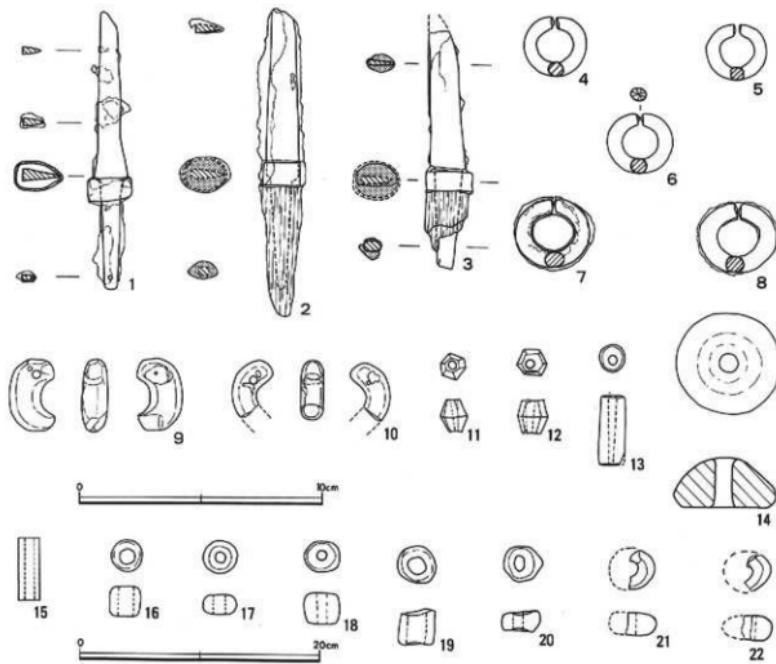
部は丸く段状を呈していない。大谷編年の出雲4期に該当すると考えられる。色調は明るい灰色である。13は、口径13.0cm、器高3.8cmを測る。調整は回転ナデの後、天井部外面には粗い回転ヘラ削りを施している。肩部外面には2条の沈線を施し、これを強くナデつけることで突帯、稜を表現している。肩部内面にも沈線が1条めぐる。端部は丸く段状を呈していない。大谷編年の出雲4期に該当すると考えられる。第104図18~20・22・23は杯身である。

18は、口径11.3cm、最大径14.2cm、器高4.2cmを測る。口縁部は内傾して立ち上がる。口縁端部は丸くおさまっている。調整は回転ナデの後、底部外面に粗い回転ヘラ削りを、内面に静止してナデを施している。色調は明るい灰色である。19は、口径11.7cm、最大径14.7cm、器高4.4cmを測る。口縁部は内傾して立ち上がる。口縁端部は丸くおさまっている。調整は回転ナデの後、底部外面に粗い回転ヘラ削りを、内面に静止してナデを施している。色調は明るい灰色である。20は、口径10.5cm、最大径13.7cm、器高4.1cmを測る。口縁部は内傾して立ち上がる。口縁端部は丸く収まっている。調整は回転ナデの後、底部外面に粗い回転ヘラ削りを、内面に静止してナデを施している。22は、口径10.9cm、最大径13.6cm、器高4.0cmを測る。口縁部は内傾して立ち上がる。口縁端部は丸く収まっている。23は、口径11.7cm、最大径14.4cm、器高4.2cmを測る。口縁部は内傾して立ち上がる。口縁端部は丸く収まっている。調整は回転ナデの後、底部外面に粗い回転ヘラ削りを、内面に静止してナデを施している。色調は暗い灰色である。

第104図25は壺である。口径9.0cm、器高10.7cm、頸部最小径2.7cm、胸部最大径7.3cm、底部径4.0cmを測る。器高が縮小化したもので、全体的に丸みをもち頸部に対して口縁が大きい。底部は平底である。頸部に1条と体部2条の沈線が僅かに残るもの、波状文や体部の刺突文は省略されている。調整は体部下半から底部までを回転ヘラケズリ、その他は回転ナデである。大谷編年の出雲4・5期に該当すると考えられる。色調は内面が暗い灰色、外顔が明るい灰色である。

第104図27~30は高杯である。27は、長脚無蓋高杯である。口径10.0cm、裾部径6.9cm、器高1.9cmを測る。杯部は平らな底部に直立する体部がつくものである。長脚2段3方透かしである。透かしは、上段下段とも同方向に穿たれている。上方の透かしは、切れ目のみとなっている。下段の沈線は省略されている。脚端部は、面をもつかやや丸みをもつ。脚はやや短い。大谷編年の出雲4・5期にみられる型式である。28は、長脚無蓋高杯である。口径13.0cm、裾部径7.7cm、器高12.7cmを測る。杯部は平らな底部に直立する体部がつくものである。長脚2段3方透かしである。透かしは、上段下段とも同方向に穿たれている。上方の透かしは、切れ目のみとなっている。下段の沈線は省略されている。脚端部は面をもつがやや丸みをもつ。大谷編年の出雲3・4期にみられる型式である。色調は、明るい灰色である。29は、低脚無蓋高杯である。口径11.5cm、裾部径9.3cm、器高9.6cmを測る。杯部は、底部から体部へゆるく立ち上かり、強い屈曲はみられない。杯部中位に沈線をめぐらす。三角形1段2方透かしである。脚端部は外面に面をもつ。大谷編年の出雲4期にみられる型式である。色調は明るい灰色である。30は、低脚無蓋高杯である。口径14.0cm、裾部径10.7cm、器高9.6cmを測る。杯部は底部から体部へゆるく立ち上がり、強い屈曲はみられない。口縁端部は、やや外反する。杯部中位にめぐらされる沈線は省略されている。三角形1段2方透かしである。脚端部は外面に面をもつ。大谷編年の出雲4期にみられる型式である。色調は明るい灰色である。

第103図3は、横瓶である。口径13.2cm、器高27.7cm、胴部径22.5cm、胴部幅33.6cmを測る。口縁部



第105図 Ⅲ区2号横穴墓出土遺物実測図(3)(1~3 刀子、4~8 耳環、9~13・15~22玉類 14 紡錐車
15~22現寸大)

は、外反し、端部に面を持つ。胴部外面にはタキの後カキ目を施し、内面には青海波文のあて具痕が残る。色調は明るい灰色である。

第113図1~4、6、8の大甕と5の壺は、破片で前庭部から多量に出土している。大甕については3号墓のものもまとめて後述する。

羨道・玄門部出土遺物（第104図4~6、11、15~17、21、24、26、第113図8）須恵器（第104図4~6、11、
15~17、21、24、26、第113図8）

第104図4~6、11は、杯蓋である。4は、口径13.0cm、器高5.1cmを測る。調整は、回転ナデの後、天井部外面には粗い回転ヘラ削りを、内面には静止してナデを施している。肩部外面には2条の沈線を施し、これを強くナデつけることで突帯、稜を表現している。口縁内面は端部からさらに上方に沈線を2条めぐらす。端部は丸く段状を呈していない。色調は明るい灰色である。5は、口径14.0cm、器高4.3cmを測る。調整は、回転ナデの後、天井部外面に粗い回転ヘラ削りを、内面に静止してナデを施している。肩部内面には2条の沈線を施し、これを強くナデつけることで突帯、稜を表現している。口縁端部は、丸く段状を呈していない。色調は明るい灰色である。6は、口径12.7cm、器高4.5cmを測る。調整は、回転ナデの後、天井部外面には粗い回転ヘラ削りを、内面には静止してナデを施している。肩部外面には2条の沈線を施し、これを強くナデつけることで突帯、稜を表現している。口縁内面は、端部からさらに上方に沈線を1条めぐらす。端部は丸く段状を呈していない。大谷編年の出雲4

期に該当すると考えられる。色調は暗い灰色である。11は、口縁部が一部欠損しているがほぼ完形で口径12.3cm、器高4.8cmを測る。調整は、回転ナデの後、天井部外面には粗い回転ヘラ削りを施している。肩部外面には2条の沈線を施し、これを強くナデつけることで突帯、稜を表現している。口縁内面は、端部からさらに上方に沈線を1条めぐらす、端部は、丸く段状を呈していない。大谷編年の出雲4期に該当すると考えられる。色調は、明るい灰色である。

第104図17、21、24は、杯身である。15は、口径11.0cm、最大径13.8cm、器高4.4cmを測る。口縁部は内傾して立ち上がる。口縁端部は丸くおさまっている。調整は、回転ナデの後、底部外面には粗い回転ヘラ削りを、内面には、静止してナデを施している。色調は、明るい灰色である。16は、口径10.9cm、最大径3.7cm、器高4.3cmを測る。口縁部は内傾して立ち上がる。口縁端部は丸くおさまっている。調整は、回転ナデの後、底部外面には粗い回転ヘラ削りを、内面には、静止してナデを施している。色調は、暗い灰色である。17は、口径10.8cm、最大径13.9cm、器高4.8cmを測る。口縁部は内傾して立ち上がる。口縁端部は丸くおさまっている。調整は、回転横ナデの後、底部外面には粗い回転ヘラ削りを、内面には静止してナデを施している。色調は明るい灰色である。21は、口径11.6cm、最大径14.5cm、器高4.3cmを測る。口縁部は、内傾して立ち上がる。口縁端部は丸くおさまっている。調整は、回転ナデの後、底部外面には粗い回転ヘラ削りを、内面には静止してナデを施している。色調は、内外面とも明るい灰色である。

第104図26は、甌である。口径11.1cm、器高11.4cm、頸部最小径4.5cm、胸部最大径9.3cm、底部径4.5cmを測る。頸部が若干短い形態で底部は、平底である。頸部には、1条の沈線と波状文を、体部には、2条の沈線の間に刺突文が施されている。調整は、体部下半から底部までを回転ヘラ削り、その他は、回転ナデである。全体的に丸みを帯びている。大谷編年の出雲3・4期に該当すると考えられる。色調は明るい灰色である。

第113図8は須恵器大甌である。2号墓の閉塞に用いられている大甌片は、全てこの破片である。詳細は、後述する。

玄室出土遺物（第103図1、2、第104図1～3、14、第105図1～22）

土師器（第103図2）

第103図2は、甌である。口径15.5cm、頸部径13.5cm、胸部最大径23.0cm、器高22.7cmを測る。球形の胴部に外方に開く単純な口縁が付く小型のものである。胴部の最大径は、中央よりやや下に位置する。底部は丸底である。調整は、外面に縦横方向のハケメ、内面は左上がりの削りを施している。

須恵器（第103図1、第104図1～3、14）

第103図1は、提瓶である。口縁部は欠損しており口径は不明であるが、頸部径6.8cm、残存高20.0cm、胸部径19.0cmを測る。胴部側面形態は、対称形である。環状の把手が歪んで環の孔が小さくなっている。大谷編年の出雲3・4期に該当すると考えられる。

第104図1～3は、蓋杯である。1は、口径12.6cm、器高4.5cmを測る。調整は、回転ナデの後、天井部外面には粗い回転ヘラ削りを、内面には不定方向のナデを施している。肩部外面には、2条の沈線を施し、これを強くナデつけることで突帯、稜を表現している。口縁内面は端部からさらに上方に沈

線を1条めぐらす。端部は、丸く段状を呈していない。大谷編年の出雲4期に該当すると考えられる。色調は、明るい灰色である。2は、口径13.7cm、器高4.9cmを測る。調整は、回転横ナデの後、天弁部外面には粗い回転ヘラ削りを施している。肩部外面には2条の沈線を施し、これを強くナデつけることで突帯、稜を表混している。口縁端部は、丸く段状を呈していない。大谷編年の出雲4期に該当すると考えられる。色調は、外面とも明るい灰色である。

3は、口径13.0cm、器高4.3cmを測る。調整は回転ナデの後、天弁部外面には粗い回転ヘラ削りを施している。肩部外面には2条の沈線を施し、これを強くナデつけることで突帯、稜を表現している。口縁端部は丸く段状を呈していない。大谷編年の出雲4期に該当すると考えられる。色調は外面が明るい灰色と暗い灰色が半分づつ、内面が明るい灰色である。

第104図14は、杯身である。口径11.7cm、最大径14.7cm、器高4.7cmを測る。口縁部は内傾して立ち上がる。口縁端部はまるく収まっている。調整は回転ナデの後、底部外面には粗い回転ヘラ削りを施している。色調は内外面とも暗い灰色である。

金属器（第105図1~8）

第105図1~3は、刀子である。1は切先が欠損しており、残存全長は11.3cm、刀身が長さ6.8cm、元幅1.3cmである。鋸化が著しいが両闇タイプである。幅1.8cmのはばき金具があり、茎の先端には目釘孔と目釘が1箇所観察される。2は、切先が欠損しており、検存全長は12.5cm、刀身が長さ7.5cm元幅1.4cmである。鋸化著しいが両闇タイプである。幅1.4cmのはばき金具があり、茎は木質で覆われている。3は切先が欠損しており、残存全長は9.5cm、刀身が長さ5.5cm、元幅1.4cmである。鋸化が著しいが両闇タイプである。幅1.8cmのはばき金具があり、茎は木質で覆われている。

第105図4~8は、耳環である。4は、金環である。外径の長径が2.6cm、短径が2.3cm、太さが4~5cmを測る。切目の部分のみ鋸びている。5は、外径の長径が2.5cm、短径が2.3cm、太さが4~5cmを測る。6は、金環である。外径の長径が2.6cm、短径が2.45cm、太さが5~6cmを測る。全体的に保存状態は良好であるが、切目の部分のみ鋸びている。7は、外径の長径が2.9cm、短径が2.8cm、太さが5~6cmを測る。全体的に鋸化が著しい。8は外径の長径が3.1cm、短径が2.8cm、太さが6cmを測る。全体的に鋸化が著しい。

玉類（第105図9~13）

第105図9・10は、勾玉である。9は、メノウ製である。長さは2.8cm、幅1.0cmを測る。色調は薄い茶色である。調整はかなり難であり、途中で止めた孔や、白い筋が付いていたり、稜が残っている。孔は片側穿孔である。10は、メノウ製である。長さは2.4cm、幅0.9cmを測る。色調は透明感のある明るい茶色である。孔は片側穿孔である。中程で折れているが、折れた面にも調整を施していることから、折れたものをそのまま利用していると考えられる。キズは若干あるものの研磨は丁寧に行われている。

第105図11・12は、切子玉である。11は、水晶型である。最大径は1.1cm、長さ1.3cm、孔径0.3~0.1cmを測る。孔は片側穿孔であり、上端面一杯に穿孔し、下端面には穿孔時の剥離がみられる。12は、水晶製である。最大径は1.2cm、長さ1.4cm、孔径0.3~0.1cmを測る。孔は片側穿孔であり、上端面は中央からややずれて穿孔し、下端面には穿孔の剥離がみられる。

第105図13・15は、管玉である。13はメノウ製である。直徑は1.0cm、長さ2.9cm、孔径0.3~0.2cmを

測る。色調は濃緑色である。15は直径0.2cm、長さ0.6cm、孔径0.1cmを測る。色調は緑色である。両面から穿孔されている。第105図16~22は、小玉である。16は、ガラス製である。側面は隅丸方形を呈し、直径0.3cm、長さ0.3cm、孔径0.1cmを測る。色調は群青色を呈す。17は、ガラス製である。側面は球形を押しつぶした形を呈し、直径0.3cm、長さ0.2cm、孔径0.1cmを測る。色調は群青色を呈す。18は、ガラス製である。側面は隅丸方形を呈し直径0.4cm、長さ0.3cm、孔径0.1cmを測る。色調は緑がかった青色を呈す。19は、ガラス製である。側面は隅丸方形を呈し、直径0.4cm、長さ0.3cm、孔径0.1cmを測る。色調は緑がかった青色を呈す。片方の面は不整形である。20は、ガラス製である。直径は0.4cm、長さ0.2cm、孔径0.1cmを測る。色調は薄い透明感のある青色を呈す。平面形と断面形は歪である。21は、ガラス製である。破損しているが復元すると、側面は球形を押しつぶした形を呈し、最大径0.5cm、長さ0.2cm、孔径0.1cmを測る。色調は透明感のある青色を呈す。22は、ガラス製である。破損しているが、復元すると、側面は球形を押しつぶした形を呈し最大径0.5cm、厚さ0.2cm、孔径0.1cmを測る。色調は透明感のある青を呈す。

人骨（図1）

玄室内からは、計5体の人骨が出土している。詳細については、後述する。

その他

第105図14は、紡錘車である。最大径4.2cm、高さ1.92cm、重量22gを測る。形状は、載頭円形であり、中心に孔径0.8cmの貫通孔がある。色調は淡褐色である。

3号横穴墓（第106図）

2号棟穴墓のすぐ北となりに並ぶように3号横穴墓が所在する。前庭部はそれぞれ専有している。床面の標高はmである。景観は2号棟穴墓とほぼ同様である。やはり前庭部は完全に埋まっていたが、伐採後表土を剥いだところ覆土を検出した。前庭部・羨道は前庭部主軸方向にベルトを設定し掘り下げた。玄門・玄室は玄室主軸方向にあわせ十字方向のベルトを設定して掘り下げた。人骨は井上先生に取り上げていただいた。遺構・遺物は写真撮影と実測図等による記録化を行った。

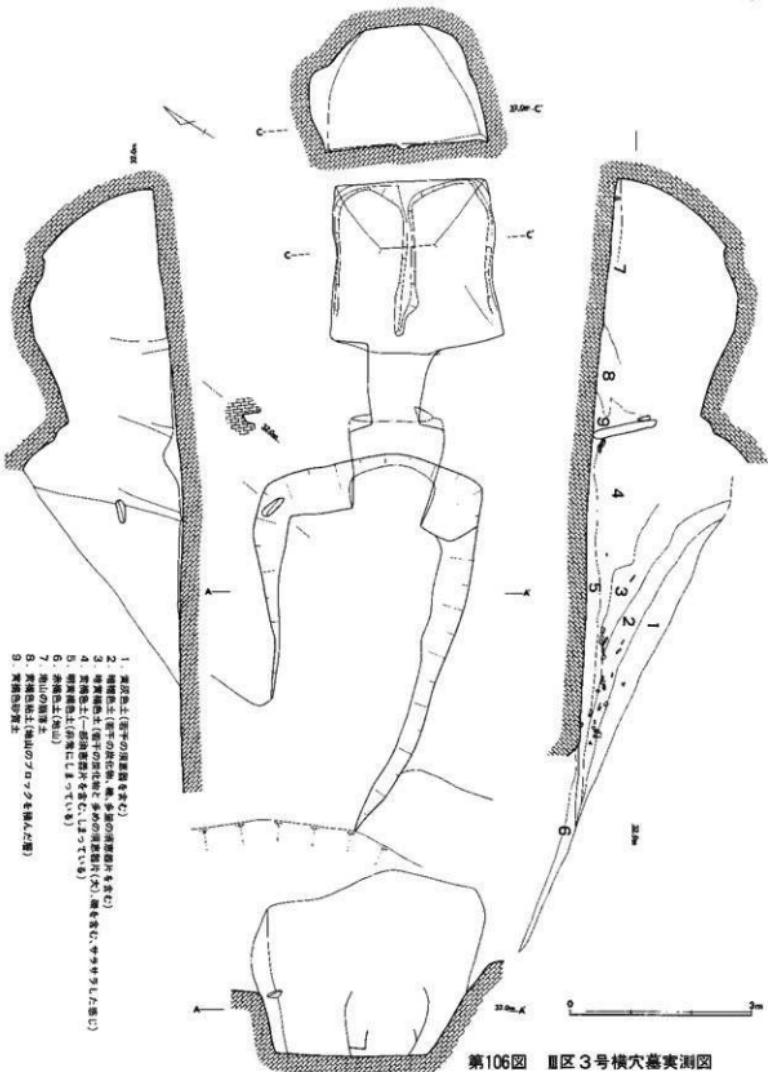
前庭部は、尾根に直交するかたちで掘り込まれており、主軸はN-70°-Eであり東西方向に近い。最も深いところで地山を2.6m掘削して、幅約3.6m、長さ5.0m以上の長方形の前庭部床面を造り出している。床面は玄室から前庭部にかけて3°下方へと傾斜している。北側壁は80°、南側壁は60°で立ちあがり、丁寧に整形されている。奥壁と側壁との境界は明瞭な直線で画されている。なお北側の奥壁と側壁との境界床面から1mの高さには幅約m、奥行き0.3m、高さ2mの細長い棚状の小横穴が造られている。

羨道部は、前庭部の南よりに開口する。床面は奥壁側幅1.6m、前庭部側幅1.2m、長さ1.4mの台形をしている。前庭部との段差はない。側壁は内湾しながら立ちあがるが、天井が大きく崩落しており本来の横断面の形状を窺うことは困難である。

閉塞には、粗く加工した90cm×40cm×15cm大の板状の石3枚を用いている。石材は、荒島石を使用している。閉塞石の隙間には、大壘を大きい破片に割り、それを丁寧に詰めていることから、かなり密閉を意識していることが窺える。

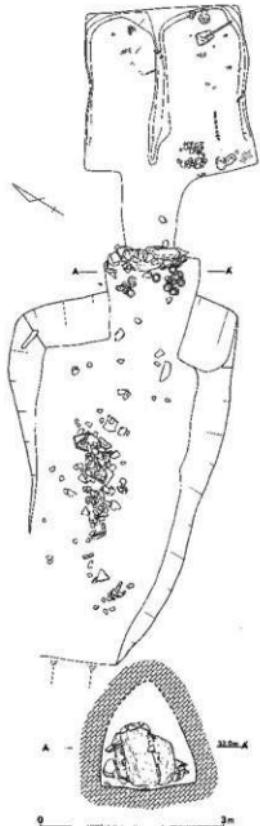
玄門の床面は、奥壁側幅1.2m、前庭部側幅0.8m、長さ1.3mの台形をしている。側壁は内湾しながら立ちあがるが、天井が大きく崩落しており本来の横断面の形状をうかがうことは困難である。

玄室の平面形は、裏行き2.6m、幅2.6mを測る正方形に近い隅丸方形を呈する。主軸はN-57°Eであり、前庭部主軸とかなりズレている。壁の際と中央には幅20cm×深さ10cmの排水溝が設けられている。一方、立面形は縦断面が壁面のやや膨らむ三角形を呈す。天井部には横方向の長さ約0.9mの棟線が見られ、高さは2.0mをはかる。棟線は玄室の主軸とはほぼ直交し、他の稜線も同じく明瞭な直線で表出されている。隅棟の稜線は床の隅に向かってやや外側に膨らみながら延びている。形態的には、軒線がない疑似四注式平入りの形態に属する。



第106図 III区 3号横穴墓実測図

小横穴



第107図 III区3号横穴遺物出土状況

前庭部北側の奥壁と側壁との境界床面から1mの高さのところには、幅約0.5m、奥行き0.3m、高さ0.2mの細長い棚状の小横穴造られている。

土層堆積状況（第106図）

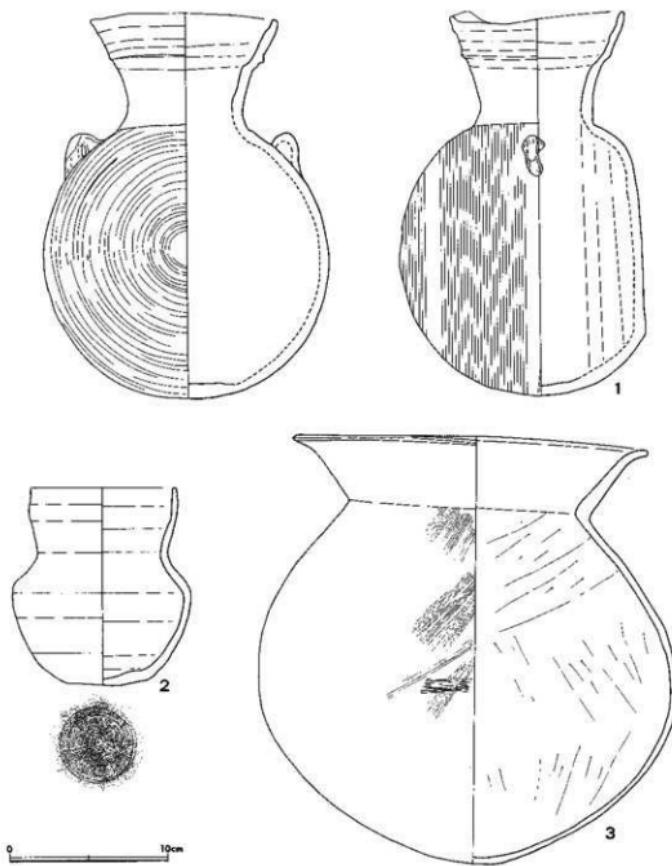
前庭部、羨道部には多量の土砂が流入しており、完全に前庭部は埋まっていたので、前庭部主軸方向にベルトを設定して掘り下げた。床面上には非常にしまった明黄褐色土（5層）がほぼ水平に近い状態で堆積していた。羨道の完形蓋杯や閉塞石がこの層の上面に設置されていることから5層上面が最終埋葬時の床面であったと考えられる。この上層には玄室側か極端に厚い黄褐色土（4層）か堆積していた。この層の上面は閉塞石より高いことと堆積の状況から、閉塞石が隠れるよう埋められたものと考えられる。2・3層は黒みを帯びた層で、ある時期の表土と考えられる。傾斜をもつもののほぼ均一の厚みで堆積している。この層からは多量の須恵器片が検出された。1層は近世以降の搅乱土である。前庭部には後世に掘り込まれた跡はなく盗掘はうけていない。前庭部・羨道部の堆積状況と遺物出土状況を整理すると、5層が堆積→閉塞石が置かれる→5層上面に須恵器杯身が置かれる→4層で羨道を埋めながら閉塞石の隙間に大甕を割って間に詰める→3・2層が堆積・完形の須恵器や破碎された大甕が破棄される・一定期間表土となる→2層が堆積、という経過が想定できる。玄室内は天井が崩落したため床面から玄門側で1m、奥壁側で10cmの高さまで地山の大きいブロックで埋まっていた。(7層) 玄室の主軸を基準にして十字にベルトを設定して掘り下げた。9層は黄褐色のしまい弱い土で羨道部からの流入土であると考えられる。8層は地山

ブロックに黄褐色土が入り込んだ層である。地山ブロックは天井の崩落と考えられる。9層の流入と3層の天井の崩落が繰り返されたため、2つの層は入り組んでいる。

遺物はすべて床面直上で検出しており、層位的な前後関係は見出せなかった。玄門・玄室の堆積状況と遺物出土状況を整理すると、遺体・測量品を安置する→閉塞石が置かれる→閉塞時に使った須恵器大甕が崩落→9層の流入と8層の崩落を繰り返す→7層の天井崩落、という経過が想定できる。

遺物出土状況（第107図）

前庭部からは6個体分の大甕片・完形の杯蓋9点・杯身12点罐1点を検出した。遺物はおおまかに2・3層中出土のものと4層中出土のものに分けられる。ほとんどの遺物は2・3層中から出土している。横断面でみると主軸ライン付近がくぼんでおり、平面で見ても主軸ラインに沿って集中する。第113図6の大甕は2号横穴の閉塞にも使われている。4層中には大甕片が若干混じる程度である。羨道部では完形の杯蓋4点・杯身4点・無蓋長脚高杯1点と破片資料の大甕を検出している。閉塞石を挟んで羨道部4



第108図 Ⅲ区3号横穴墓玄室出土遺物実測図(1)(1・2 須恵器、3 土師器)

～5層と玄門部9層から出土している。5層上面では閉塞石の前左右2か所に重なるように第109図1～6・9～13の杯蓋11点、第109図14～28の杯身15点、10～30cmの大甕片が検出された。第109図29・30の短頸壺2点、第109図32の長脚無蓋高杯1点、第109図31の甕1点を検出した。第113図6の大甕片は閉塞石の隙間をT寧に埋めている。閉塞の状況から盗掘はうけていない。同一個体の大甕片が2号横穴の前庭部から出土している。玄室内では、土師器壺1点・須恵器提瓶1点・短頸壺1点・刀子9点・切子玉1点・小玉1点・耳環4点・鞘尻金具1点・直刀2振・人骨4体を検出した。遺物等は全て7層中から出土している。奥壁にむかって右奥隅付近では第108図1の提瓶・第108図2の短頸壺1点・第111図2の直刀1振・第110図14の鞘尻金具・第110図12・13の耳環・20cm大的石を検出した。直刀は茎を石の上に、切

先を隅の方に向てある。耳環の辺りは骨片が認められ遺体があったものと考えられる。右壁中央辺りでは第110図1・3・8の刀子を検出した。右手前隅の辺りでは第108図3のI師器1点・第111図2の直刀1振・第110図4・6の刀子・20cm大の石を2点を検出した。直刀は玄室主軸に平行し、切先を奥壁側に向けて出土している。コーナーには骨片が認められ遺体があったものと考えられる。奥壁の前やや左よりには第110図3の刀子と骨片を検出した。

小横穴からは、遺物は確認できなかった。

出土遺物（第108図・第109図・第110図・第111図・第113図）

前庭部出土（第119図7・8・17～30・第113図1・2・6～9）須恵器（第109図7・8・17～30・第113図1・2・6～9）

第109図7・8は、杯蓋である。7は、口径13.0cm、器高4.4cmを測る。調整は回転ナデした後、天井部外面には粗い回転ヘラ削りを、内面には静止ナデを施している。肩部外面には2条の沈線を施し、これを強くナデつけることで突帯、稜を表現している。口縁内面は端部からさらに上方に沈線を1条めぐらす。端部は丸く段状を呈していない。大谷編年の出雲4期に該当すると考えられる。色調は内外面とも明るい灰色である。8は、口径12.8cm、器高4.3cmを測る。調整は回転ナデした後、天井部外面には粗い回転ヘラ削りを、内面には静止ナデを施している。肩部外面には2条の沈線を施し、これを強くナデつけることで突帯、稜を表現している。口縁内面は端部からさらに上方に沈線を1条めぐらす。端部は丸く段状を呈していない。大谷編年の出雲4期に該当すると考えられる。色調は内外面とも明るい灰色である。

第113図1・2・6～8）大甕と9の壺は破片で前庭部から多量に出土している。大甕については2号墓のものもまとめて後述する。

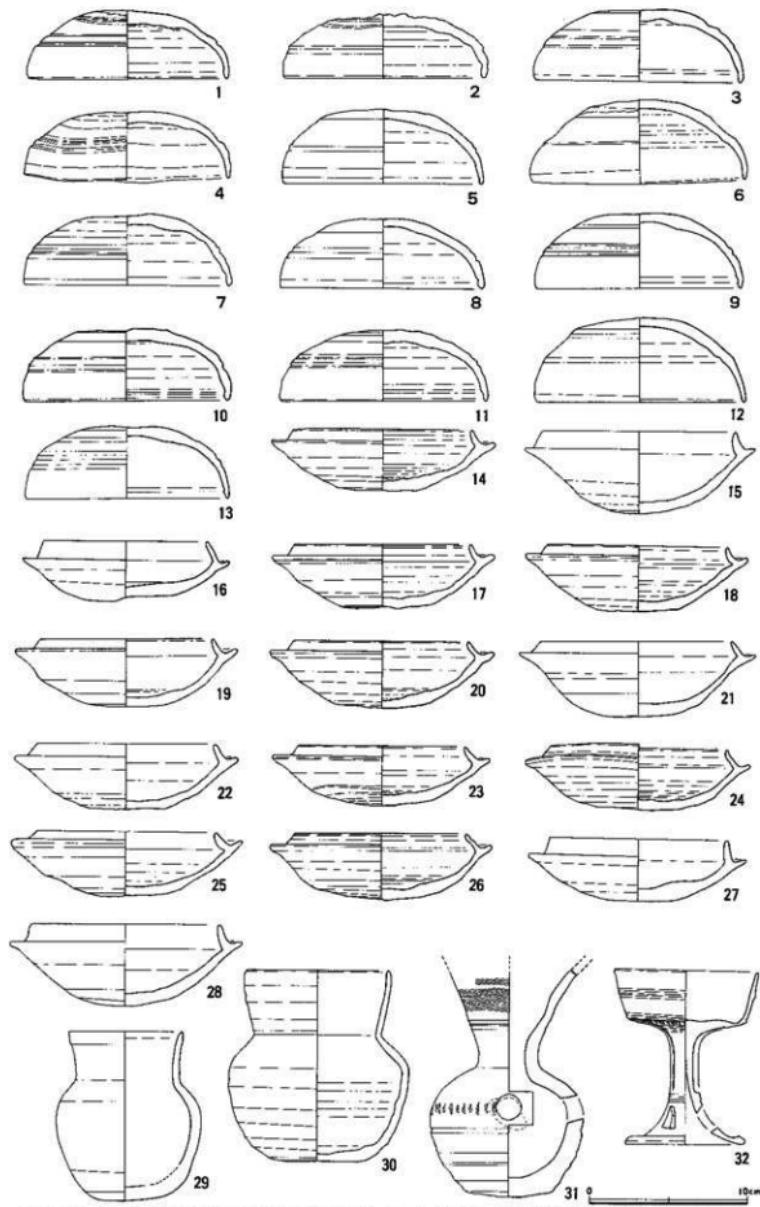
羨道・玄門部出土遺物（第109図1～4・9～16・31・32・第113図6）

須恵器第109図1～6・9～13・14～16・31・32・第113図6

第109図1～6・9～13は杯蓋である。1は、口径12.3cm、器高4.3cmを測る。天井部外面に×のヘラ記号が施されている。調整は回幅ナデした後、天井部外面は最も外周のみ回転ヘラ削り、全面にナデを施している。肩部外面には2条の沈線を施し、これを強くナデつけることで突帯、稜を表現している。口縁内面は端部からさらに上方に沈線を1条めぐらす。端部は丸く段状を呈していない。大谷編年の出雲4期の新しい段階に該当すると考えられる。色調は外面が明るい灰色、内面が暗い灰色である。2は、口径12.4cm、器高4.0cmを測る。調整は回転ナデした後、天井部外面には粗い回転ヘラ削りを施している。肩部外面には2条の沈線を施し、これを強くナデつけることで突帯、稜を表現している。口縁内面は端部からさらに上方に沈線を1条めぐらす。端部は丸く段状を呈していない。大谷編年の出雲4期に該当すると考えられる。色調は暗い灰色である。3は口径12.8cm、器高4.4cmを測る。調整は回転ナデした後、天井部外面には粗い回転ヘラ削りを施している。肩部外面には2条の沈線を施し、これを強くナデつけることで突帯、稜を表現している。口縁内面は端部からさらに上方に沈線を1条めぐらす。端部は丸く段状を呈していない。大谷編年の出雲4期に該当すると考えられる。色調は内外面とも明るい灰色である。4は、歪んでいるが、およそ口径12.7cm、器高4.4cmを測る。調整は回転ナデした後、天井部外面には粗い回転削りを施している。肩部外面には2条の沈線を施しこれを強くナデつけることで突帯、稜を表現している。端部は丸く段状を呈していない。内外面とも暗い灰色で

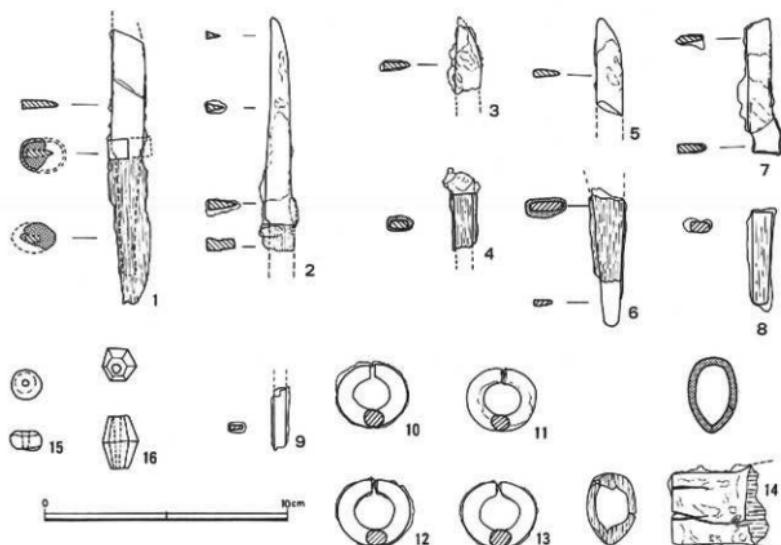
ある。5は、口径12.4cm、器高4.6cmを測る。調整は回転ナデした後、天井部外面には粗い回転ヘラ削りを、内面には静止ナデを施している。肩部外面には2条の沈線を施し、これを強くナデつけることで突帯、稜を表現している。口縁内面は端部からさらに上方に沈線を1条めぐらす。端部は丸く段状を呈していない。大谷編年の出雲4期に該当すると考えられる。色調は内外面とも明るい灰色である。6は、口径13.3cm、器高5.2cmを測る。調整は回転ナデした後、天井部外面の縁辺を2~3回回転ヘラ削りを、中心部を削り残しその部分にナデを施している。茅部外面には形骸化した細かい沈線が施されている。口縁端部は単純に丸く仕上げるが、口縁部付近が肥高せず厚みは均一である。大谷編年の出雲4期に該当すると考えられる。色調は内外面とも明るい灰色である。9は、口径12.8cm、器高4.6cmを測る。調整は回転ナデした後、天井部外面には粗い回転ヘラ削りを施しているが、中心部に切り離した痕が見られる。天井部内面には、静止ナデを施している。肩部外面には2条の沈線を施し、これを強くナデつけることで突帯、稜を表現している。口縁内面は端部からさらに上方に沈線を1条めぐらす。端部は丸く段状を呈していない。大谷編年の出雲4期に該当すると考えられる。色調は明るい灰色である。10は、口径12.6cm、器高4.4cmを測る。調整は回転ナデした後、天井部外面には粗い回転ヘラ削りを施している。肩部外面には2条の沈線を施し、これを強くナデつけることで突帯、稜を表現している。口縁内面は端部からさらに上方に沈線を1条めぐらす。端部は丸く段状を呈していない。大谷編年の出雲4期に該当すると考えられる。色調は明るい灰色である。11は、口径12.7cm、器高4.4cmを測る。調整は回転ナデした後、天井部外面には粗い回転ヘラ削りを施している。肩部外面には2条の沈線を施し、これを強くナデつけることで突帯、稜を表現している。口縁部の端部に沈線を入れてゆるい段状に仕上げている。大谷編年の出雲3期から4期の古い段階に該当すると考えられる。色調は内外面とも明るい灰色である。12は、口径12.9cm、器高5.2cmを測る。調整は回転ナデした後、天井部外面には粗い回転ヘラ削りを施している。肩部内外面には形骸化した沈線が1条めぐらす。口縁端部は丸く段状を呈していない。色調は明るい灰色である。13は、口径12.5cm、器高4.4cmを測る。調整は回転ナデした後、天井部外面には粗い回転ヘラ削りを、内面には静止してナデを施している。肩部外面には2条の沈線を施し、これを強くナデつけることで突帯、稜を表現している。口縁内面は端部からさらに上方に沈線を1条めぐらす。端部は丸く段状を呈していない。大谷編年の出雲4期に該当すると考えられる。色調は明るい灰色である。

第109図14~28は、杯身である。14は、口径11.0cm、最大径13.9cm、器高4.0cmを測る。口縁部は内傾して立ち上がる。口縁端部は丸く収まっている。調整は回転ナデした後、肩部外面には粗い回転ヘラ削りを施している。色調は内外面とも明るい灰色である。15は、口径12.2cm、最大径14.3cm、器高5.1cmを測る。口縁端部は丸く収まっている。調整は回転ナデした後、肩部外面には粗い回転ヘラ削りを、内面には静止ナデを施している。色調は明るい灰色である。16は、口径10.2cm、最大径12.8cm、器高3.7を測り、口縁部は内傾して立ち上がる。口縁端部は丸く収まっている。調整は回転ナデした後、脚部外面には粗い回転ヘラ削りを施している。17は、口径11.0cm、最大径13.9cm、器高4.0cmを測る。口縁部は内傾して立ち上がる。口縁端部は丸く収まっている。調整は回転ナデした後、脚部外面には粗い回転ヘラ削りを施している。色調は内外面とも明るい灰色である。18は、口径11.3cm、最大径14.0cm、器高4.1cmを測る。口縁部は内傾して立ち上がる。口縁端部は丸く収まっている。調整は回転ナデした後、肩部外面には粗い回転ヘラ削りを施している。色調は内外面とも明るい灰色である。



第109図 Ⅲ区 3号横穴墓出土遺物実測図(2)(1~4・14~16・31・32玄門部出土その他前底部出土)

19は、口径10.7cm、最大径13.8cm、器高4.2cmを測る。口縁部は内傾して立ち上がる。口縁端部は丸く収まっている。調整は回転ナデした後、底部外面には粗い回転ヘラ削りを施している。色調は内外面とも明るい灰色である。外面の一部に暗い灰色の部分がある。20は、口径10.9cm、量大径14.0cm、器高4.1cmを測る。口縁部は内傾して立ち上がる。口縁端部は丸く収まっている。調整は回転ナデした後、底部外面には粗い回転ヘラ削りを施している。色調は内外面とも明るい灰色である。21は、口径11.8cm、最大径14.6cm、器高4.7cmを測る。口縁部は内傾して立ち上がる。口縁端部丸く収まっている。調整は回転ナデした後、底部外面には粗い回転ヘラ削りを、内面には静止ナデを施している。色調は明るい灰色である。22は、口径11.2cm、量大径13.8cm、器高4.1cmを測る。口縁部は内傾して立ち上がる。口縁細部は丸く収まっている。調整は回転ナデした後、底部外面には粗い回転ヘラ削りを施し中心部のみ静止ナデを施している。色調は明るい灰色である。23は、口径10.4cm、最大径13.6cm、器高3.7cmを測る。口縁部は内傾して立ち上がる。口縁端部は丸く収まっている。調整は回転ナデした後、底部外面を回転ヘラ切りの後簡略なナデ調整、間隔の雑な回転ヘラナデを施す。一見暗文のように見える。色調は明るい灰色である。24は、口径11.1cm、最大径14.1cm、器高4.1cmを測る。口縁部は内傾して立ち上がる。口縁端部は丸く収まっている。調整は回転ナデした後、底部外面には粗い回転ヘラ削りを施している。かなり歪んでいる。色調は暗い灰色である。25は、口径11.2cm、最大径14.3cm、器高4.0cmを測る。口縁部は内傾して立ち上がる。口縁端部は丸く収まっている。調整は回転ナデした後、底部外面には粗い回転ヘラ削りを施している。色調は明るい灰色である。26は、口径10.7cm、最大径13.9cm、器高4.1cmを測る。口縁部は内傾して立ち上がる。口縁端部は丸く収まっている。調整は回転ナデした後、底部外面には粗い回転ヘラ削りを施している。



第110図 Ⅲ区3号横穴墓出土遺物実測図(1~9 刀子、10~13 耳環、14 刀装具 15・16 玉類)